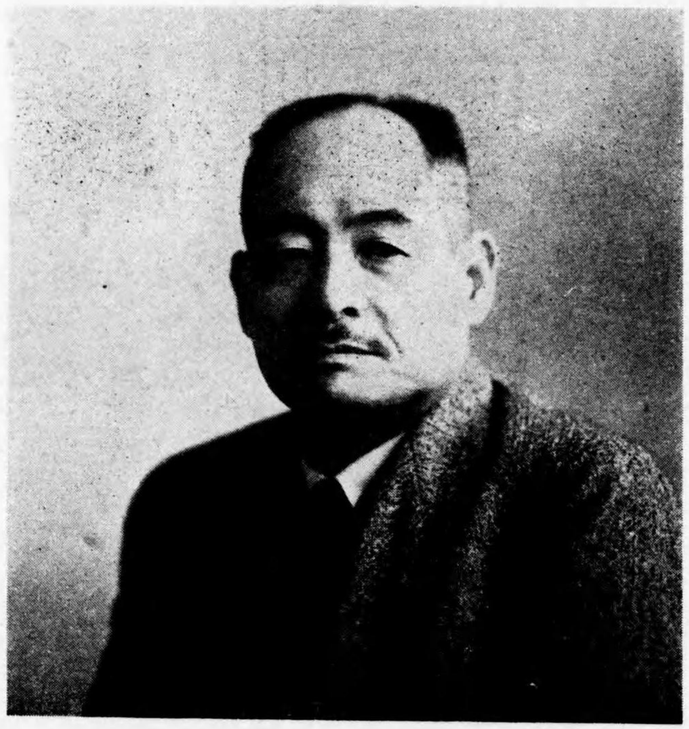
289
33

始

劍掃錄

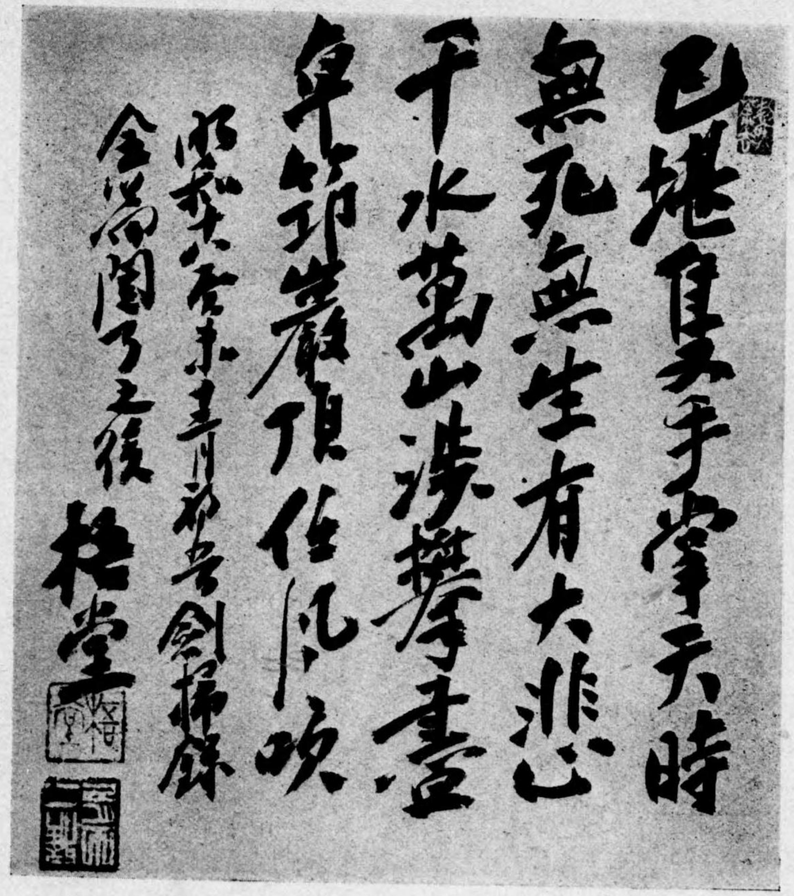
井上雅二



述者近影

289
33

15252



上梓に當りて

人生の秋に入れるものの爲す可き本則は、私の常に提唱する通り、求めず售らず、第二線に在つて後俊を支援して其の事を達成せしめ、閑あらば立言以て今を補ひ後を益するに在る。而して私は已に人生の秋の半に攀ぢんとしてゐる。曩に「言志詩抄壹千首」を抽出して梓に付したが、之と同じ意味に於て、私が過去五十餘年に亘り隨時に隨感を隨錄したるもの最初の「夜來語」四卷約一千枚より、後には「劍掃錄」の名を以て二千餘枚二十册の大部となつた、「夜來語」は蘇東坡の「夜來八萬四千偈、他日如何擧似人」より得たもので、中に包む所、「故名士と己」より始まつて「少青年時代」「對支關係」「對韓關係」「日露戰爭」より「南方經營」等大正十年に及んでゐるが、之と前後して「劍掃錄」の名を以て隨錄を始め今に至つてゐる

のである。「夜來語」をも梓に付するに於ては兩者を合せて尨大なる巨卷となる可く、時局に鑑みて自肅し、然かも「劍掃錄」の中に於ても其の一半を割愛し、他の一半のみを抄出し玆に之を刊することとしたのである。

「劍掃錄」の名の起源に就て憶ひ起さしむる成句はないが、「醉古堂劍掃」は青年時代よりの愛讀書の一にして今に機あらば之を味讀するを怠らない私の隨錄に「劍掃」の名を冠せるも此等に伴ふ潛在意識の現はれかも知れない。玆に其の儘、其の名を冠せしめることとしたので差したる意味はない。若し夫れ私の日記に至つては明治二十八年より玆に五十年に近く、雨の降る日も、風の吹く旦も、アンデスの山中にてもサハラの大漠にても、將た歐米に亞細亞に水に陸に孤節を卓するの處、必ず伴ふものは則ち「日記」であつて、今之を繙ぎ見ると、感興の禁ぜざるものあるも、此等は一切省いて加へず、唯だ所謂「劍掃錄」の中より取材して一卷としたのである。

之を閲讀して一貫するは、自己の自省であり自警であり、自奮であると云ふ一語に盡きる。卽ち自省錄であり、自警錄であり、自奮錄であつて見れば、自家向上の資たるに過ぎず、敢て他に示す可き何物もない。然しながら翻つて想ふに今や皇國の大發展期に當り一億一心、聖戰の完遂に邁進しつゝあるの秋、興亞五十年の坂を攀ぢ來つて其の跡を顧み、次代國民に何を貽すべき。唯だ後俊の獻身に俟つあるのみ、而して其の後俊に先人の踐み來つた羊腸の道を示し、其の信念を說き、其の素志を語る。自ら些少の補なきに非らざる可し「言志詩抄壹千首」は「詩は志なり」、詩に依つて志を述べ以て次代國民の續起に資せんとしたもので、此の「劍掃錄」は則ち文に據つて其の共鳴を獲んとするに他ならない。固より老大家の嚬笑を買ふを免かれないであらう。然かも世局は急迫し、聖業の完遂は之を身後に待つの外なき現狀に於て、思想の粗笨、所說の迂魯は問ふ所に非らず、只だ直心一往、自己實踐途上より贏ち得たる信念を露呈して次代國民の取捨に委せんと欲するのみ。大方の默過を祈る。

上梓に當りて

本卷は斯る意味に於て之を一般に公にするの意なく、一は以て自己の反省に充て、一は以て自己の眞骨頭を後昆に貽さんとし、玆に少部を梓に付して、近親故友、並に未見の知己に頒つこととした。若し「言志詩抄壹千首」と併讀の榮を賜はるあらば述者望外の仕合せである。

「はしがき」を終るに當つて心境を示すの蕪詩四、五を左に追記することとした。

一、劍掃錄を閲し終つて

已堪隻手掌天時。　無死無生有大悲。
千水萬山涉攀盡。　卓筇巖頭任風吹。

二、亡友を憶ふ

興亞宿圖今漸成。　旭旗飄影八紘横。
黄泉應起同憂士。　把臂終宵語此榮。

三、今春、將に南方に遊ばんとして

日煖風輕春意生。　詔光瑞氣滿皇城。
斯行畢竟無他事。　隨處炎南布一誠。

四、南游途上

建國炎南宿志成。　腰横長劍又長征。
燕來鴻去卅年久。　無一山河不舊盟。

五、將に東歸せんとす

南巡踰月任方終。　搭駕飛機向大東。
六十七年遊未足。　明春重欲逐歸鴻。

六、歸廬

炎南建國宿圖攄。　萬里鵬程意自舒。
這裏素懷人若問。　居然靖節愛吾廬。

上梓に當りて

七、山林を愛す

性本愛山林。不希混世塵。曉禽喚仙夢。晚籟促詩神。入悼黃泉友。騁思東亞民。山莊天欲雨。簷外燕來頻。

八、皇謨就らん

境幽塵不到。神王岸肩歌。細雨啼何鳥。微風綠似波。驕夷叨弄劍。壯士悉操戈。不日皇謨就。翕然天地和。

昭和十八年十二月聖戰第三年を迎ふるの前三日、目白五禱莊にて

井上雅二識

劍掃錄

上梓に當りて

目次

第一篇　少青年時代　自明治十五年至同三十七年　廿三年間　五歲より二十七歲　六十八件……一

＝人生の春＝

第一　首春　自明治十五年至同二十七年　十三年間　五歲より十七歲　十四件……五

第二　盛春　自明治二十八年至同三十二年　五年間　十八歲より二十二歲　三十六件……一六

第三　晚春　自明治三十三年至同三十七年　五年間　二十三歲より二十七歲　十八件……七一

第二篇　壯年時代　自明治三十八年至昭和十年　卅二年間　二十八歲より五十九歲　百七十八件……九五

＝人生の夏＝

第一　首夏　自明治三十八年至同四十三年　七年間　二十八歲より三十四歲　二十二件……九七

第二　盛夏　自明治四十四年至大正十二年　十三年間　三十五歳より四十七歳　二十七件……一三〇
第三　晩夏　自大正十三年至昭和十年　十二年間　四十八歳より五十九歳　百廿九件……一九一
第三篇　老年時代　自昭和十一年至現在　八年間　六十歳より六十七歳　九十九件……五九九
‖人生の秋‖
第一　首秋　自昭和十一年至現在　八年間　六十歳より六十七歳　九十九件……六〇一

―終―

劍掃錄

井上雅二

第一篇　少青年時代

自明治十五年
至同三十七年

廿三年間

五歳より
二十七歳

六十八件

―人生の春―

第一首　春　自明治十五年至同廿七年　十三年間　五歳より十七歳　十四件

まへがき

幼少時代の夢や奇行は本著に載すべき範圍の外に屬するも、兒童研究の一材料ともなればと臆斷し其の二、三を拾つて順序なく記錄より拔書きすることとした。

一、六歳の豐太閤

明治十五年より鄕村に近い佐治町の尋常小學校に通つたが、何時の間にか、豐臣秀吉を慕ひ、母に請ふて羽織の背と前垂れに「豐太閤」の三字を刺繡して貰ひ、自ら豐太閤を以て任じ仲間の少年達の中から八名、其の一人に德川家康、他の七人に加藤淸正、福島正則等賤ケ嶽七本槍の名を稱へしめ、威風堂々校中校外を濶步したもので、中德川家康であつた三上少年は今も健在で數年前神戸より上京拙宅を訪ね來つて久濶を叙したことであつたが、他の七人の消息は絶へて終つた。吾が黨の豪傑は町の少年が口で爭ふに對し、常に手を以て之に酬ゐ、不言實行言ふよりは行へ流儀であつたのみでなく自分丈でなく臣の八人、共に成績は比較的良く上より十番と下らない成績で、自

分は大抵首席を占めてゐた。

二、十一歳の鎭西八郎

自分の「小さい秀吉」時代は續き、十一歳の春、郡の學制改革に依り鄕村を距る五里、佐治を去る四里、郡役所の所在地たる柏原の高等小學校に入ることとなつて、其の寄宿舍の人となつて、其からの二年間の寄宿舍生活は矯激を極めたものであつたが、舍長の柳瀨筆三と云ふ先生は容貌魁偉風采堂々たる人であり、熱情家でもあつた。自分は幼年時代に父の太閤譚や英雄談に魂を魅せられたと同樣に、柳瀨先生の日本外史の講話に鼓舞せらるること多かつた、特に「保元の亂」の一章――鎭西八郎爲朝が藤原信賴の召に應じて檢非違使の高職を與へられんとするや「長袖者流何をか爲さん、吾は八郎にて足れり、曷んぞ檢非違使たらんや」と豪語して之を一蹴した一節に至つて自分は疾く感激した。何と云ふ男らしさぞ權勢に阿附せず、官位官職に誘惑されず、毅然として自ら爲す可きを爲さんとする大丈夫の骨頭に傾倒した。好し「吾は八郎にて足れり矣」――幼時から懷いた豐太閤たらん夢は固より覺めなかつたが、八郎爲朝の風骨も亦棄て難い、秀吉となつて天下第一の官たるも固より可、八郎となつて天下第一の平民たる亦甚だ可なりと云ふ心持となつた。其の後、六十餘年に亘る自分の生涯は、正しく太閤と八郎の間を縫ひ、竟に天下の一平民として土に歸するが最後の段階たるが如く、八郎は自分の畢生を纏ふ一誘惑であらうか、呵々

三、出世の夢

高等小學二年生の頃寄宿舍の伍長を命せられ、同室の二人の生徒を導いたが、二人共温順な素直な少年であつた。此の地方には古くから希望を書いた紙片を喉に貼つて眠ると、必ず其の望を遂げた夢を見ると云ふ言ひ慣はしがあつた。自分は此の二生に「足立小太郎の未來」と書いた紙を喉に貼らせて寢かした。足立小太郎は自分の幼名である。

朝になつて床を離れると、自分は

「オイ、昨夜はどんな夢を見たか」

と問ふと温順素直の二少年は

「君が陸軍大將になつて大陸を征伐したところを見た」

と異口同音に答へるのが常で、其より掃除に取掛り愉快な勉學の一日が始まるのであつた。然るに或る日のこと一人が何とも答へない。

「オイ、どうしたお前は俺の將來の夢を見なかつたか」

「見なかつた」

「ナニ、見なかつた」

毎朝のことで、流石の友達も馬鹿くさくなつたのであらうが、自分は激怒して、思はず手近の火箸で、友達の面

部をなぐり、左眼を傷けた。如何に學業が良くとも、こんな亂暴は許される理はない。直に伍長を免ぜられた上に一週間の謹慎を申付けられ自省室に立籠つた。此の禁足を機會に大に勉強したので、小試驗の結果、今まで二番であつた自分が首席となり、成績發表の朝、受持の柳瀨先生は、ズラリと一同を見渡しつつ、開口一番、

「一番は勇氣凛然たる足立小太郎君」

と呼んで莞爾とされたのである。先生は早く歿せられたが同室の二少年は今も健在で活動されてゐる樣である。

四、女嫌ひ

「昔は時々「女嫌ひ」と云はれる人があつたそうであるが、自分も其の一人であつた。別に女が嫌ひと云ふのではなく、英雄を崇拜し太閤や八郎に擬した自分は、幼時、男でも女々しい男は女々しい女と同樣嫌ひであつた。

三・四歳の頃から女中の介抱を好まず、母親の膝へも餘り寄り付かなかつた。始終父親の脊中に乘つて「太閤さん」の話を聞いて心を躍らしたことを思出される。此の女嫌ひの傾向は長ずるに從つて激しくなり、學校では女教師をも忌み嫌つた。

柏原小學時代に一人の若い女教師が居た。今思へば何等變つた人でもなかつたらうが、自分の眼には少々新しがり屋で、頭には流行の髪を頂き、短い袴を着け、靴をはいて登校されることが目立つて見へ、其のハイカラ姿が好かなかつた。自分の此の感情は自づと相手にも通ずると見へて、女先生の方も自分を好かず、毎日の品行簿には丙丁の文字が羅列するので、子供心にも不平が爆發し、或る日、先生の面前で、品行簿を破つて床の上に叩きつけたのであつた。思へば他愛もないことだが、今に忘れられない思ひ出の一である。

五、「ハイカラ」嫌ひ

明治廿二年、十三の歳に篠山の鳳鳴義塾中學の二年に入學した。軍人志願が生徒の主なる志望で、陸軍豫備校の觀さへあつた。從つて校風は剛健で訓練も猛烈を極め、毎土曜日の錬磨會では精神上の糧として日本外史、日本政記、尊攘記事、新論、靖献遺言、弘道館述義等の書を輪讀し、又深夜に旗取りをするとか、寒中に水泳などして心膽を錬り、體力を養つたのであるが、教頭の農學士先生の「ハイカラ」風が氣に喰はずして之が排斥を試みたことや、但馬に行軍して和田山峠に差し掛かつた際、吠へ付く犬を殺して教頭の叱斥を喰ひ、奮然、列を離れて去つたこと抔も、「女嫌ひ」に共通する「ハイカラ」や「柔弱」嫌ひの餘波とも云ふべく、當年の稚氣笑ふに堪へたりである。

六、一級飛び越へ

鳳鳴義塾でも大抵首席から二、三番の所にゐた。當時神童と謳はれたのは平野、村上、杉と自分の四人で、此の四人が常に一番から四番を占め其の中で自分は時に平野と首席を爭ふことあつたが、大抵一番か二番であつたので二年級から一躍四年級に編入され、然かも一學期の試驗を終へて見ると、自分等四人が同じく一番から四番を占めると云ふ風で、四秀才と呼ばれたが、平野は夭折し、杉も先年六十に滿たずして他界し、村上も隱れて顯はれない。

彼等を想ふて時に悵々の情に堪へないこともある。

七、山陵巡拜と宮城遙拜

攻玉社や海軍豫備校時代には、次掲の丸山や川口等の盟友と毎朝二重橋外に跪いて皇居を遙拜し、又兵學校入學前も入學後も夏季休暇には御山陵巡拜を思立ち、先づ大和、山城、近江、丹波に於ける各地の御山陵を巡拜したもので、當時の日記は「御山陵巡拜記」として血書してゐる。前者は高山彥九郎、後者は蒲生君平に擬したものである。又京都梁山泊時代には「尊攘破天」と號し、白衣に澁汁で之を大書し、長髪短袴、市中市外を横行したものである。尊皇攘夷の四字には熱狂的魅力を感じたものであるが、自分等が神州とか尊皇攘夷と云ふ文句を其の儘に生活したものが、此の頃は猫も杓子も同じ言葉を口にするのを見て歷史は巡るの感がするのである。

八、血　盟

海軍時代の前後には、最も熱狂的な時代が續いたので、幾多の話題となる可き思出の數々が殘つて居る。その頃の記念物として、最近血盟の誓書が現はれて來た。それは兵學校を首席で卒業し、前途ある身、惜しくも大佐時代に夭折した丸山壽美太郎君の家に傳はつたもので、その長男が外務省に勤務せられて居るところから、自分の下に贈られたのである。丸山君の執筆で、終りの署名は血書してゐる。

誓　書

嗚呼今日ハ是レ如何ナル時ゾ、實ニ東洋ノ危機日ニ切迫シ、天下ノ形勢愈々迫ル。是レ實ニ吾人神州ノ臣民タルモノガ奮起、以テ盡忠報國ノ爲メ身命ヲ顧ミルベカラザルノ時ナリ。然ルニ滔々タル世人皆是レ輕薄、澆季ニ陷リ我國體ヲ凌辱シ、覬トシテ恥ルナキニ至ル。豈ニ切齒ニ堪ユベケンヤ。余等三人、今玆ニ刎頸ノ交ヲ結ビ、相携ヘテ盡忠報國ノ精神ヲ鼓舞シ、世ノ逆流ニ立チテ攘夷ノ功ヲ奏シ、以テ我神州ノ稜威ヲ世界萬邦ノ上ニ輝カシ、皇恩ヲ五洲ニ普及セシメンコトヲ期ス

明治廿六年四月廿六日

丸山壽美太郎
足立雅二
尊攘甲助

尊攘甲助とあるは、姓を川口と言ひ、東北の產、非常な慷慨家で、後、郡司大尉に從つて北門の守に就き、遂に生命を捧げた熱血漢である。

神州の稜威を萬邦に輝かすと言ひ、盡忠報國と言ひ、皇恩を五洲に普及せしめんと言ふ事は、丁度五十年後の今日に最も當欲まる言葉ではないか。日本は過去五十年間、苟もすれば此の言葉を忘れてゐたのではないか。

又自分が丸山、川上兩君に贈つた左の文句が出て來た。

江田島海軍兵學校生徒時代

京都若王子時代

丈夫畢竟一片之土塊
願ハクハ吾同志ノ本領ヲ失スル勿レ、赤誠萃マル所ハ鬼神亦泣カン、別レニ臨ンデ一言ス。

尊攘

丸山　川上　兩士

當時の吾等は、常に一身を土塊に比し、何時にても天下國家の爲めに拋つ可き信條から、「丈夫ハ畢竟一片ノ塊ノミ」と言ふ事を盛んに申した。自分も此の信條を書いて、別れに際して兩君に贈つたものと見へる。丸山は前記の丸山壽美太郎君であり、川上は川上正一君で、中佐時代病を得て現役を退いたが此れも今は故人となられた。

九、天下を取る

少年時代には、何か言ふと、直ぐ「天下を取る」といふ言葉が出た。

「君は何になるのか」

「陸軍大將となつて、大陸に遠征し、天下を取る」

と云つた調子で、「天下取り」と言ふのが、その時代の自分に對する綽名であつた。

しかし、天下取りにも種々ある。少年時代には、豐太閤となり、一國の總理となることがその實現だと思つて居たが、人生の秋に入つて見れば、火に燒けず水に溺れざる境地に安住し、乾坤に唯一人の我ありと悟入することこそ、「天下取り」であるといふ風にも、考へられるのである。

十、一直線

海軍兵學校時代の前後、自分は擧措、苟くもせず、道を歩くにも、曲線を描くを好まず、常に一直線に進んだ。人に往き會つても、道は讓らない。人が避けて曲るのを待つて、復た眞つ直に歩く。どうしても曲らねばならぬ場合は、九十度の角を描いて曲る。稚氣滿々ではあるが、かくの如く直線を愛し、簡單を好んだことも性格の片鱗とも申すべく、人は笑つて許してくれるだらう。忘れられぬ思ひ出の一つである。

十一、世界を呑む

江田島では、朝夕廣々とした入江を前にして、雄渾の氣を養ひ、男性的な波濤の音を聞いては、快朗の性を培つ

たが、中學時代から養はれた尊皇攘夷の思想は、往々にして常軌を逸するの行動となり、同志と血盟して神州の正氣を陸沈より救はんと擬した。從つて傲岸不遜の外人を好まず、英國人教師のノルマン先生とは良からず、紙に、「髯虜」と大書して、石に包んで海中に投じ、「紅毛共を鏖殺しにしたぞ」と言つて喜んだこともある。

又、世界を呑むべしと云ふので、紙片に「地球」と書いて、此れを呑み込んで痛快がつた。此の「地球の丸呑み」は自分の創案から、校中に流行し、熱血青少年は盛んに氣を吐いたものである。

十二、蜜柑の復た喰ひ

旅順閉塞隊の勇士で、今は故人となつた栗田富太郎少將は、自分と同期生で、自分に酒を飲むことを敎へた先輩である。學校では、飲酒は嚴禁されてゐたが、休日に外に出でた際は往々にして禁を犯してやつたもので、或る日曙に「クラブ」で一獻傾け、何喰はぬ顏で歸つて來たが、やがて夜の溫習時間となつた。處が天罰覿面と云はうか。間もなく嘔吐を催し、看にした蜜柑を机の上に吐いてしまつた。自分はしまつたと思つたが仕方がない。よしそれならかうしてくれようと、机の上に吐き出した異樣な物質を、一つ一つ摘んでは、復た喰ひ出したのである。驚いたのは宮川部長で、

「こらツ、貴樣は何をしたのかツ?」

と、此れに答へて、自分の曰く、

「はい、部長殿、蜜柑の奴が一度私の餌食になつて、腹中におさまりながら、復た飛び出したのであります。甚だ不埒(ふらち)でありますから、唯今再び征服したのであります」

此れには後の宮川中將も苦笑して、

「もういゝ、しかし、餘り亂暴しちやいかんぞ」

と訓された。どうも餘り自慢になる話ではないが、今に兵學校に傳はる「蜜柑の復だ喰ひ」であるから、隱さずに告白して置く次第である。

十三、尊攘破天

兵學校時代、夏季休暇には武者修業に出たが、其の出で立ちが、今思へば噴飯ものである。先づ、衣服であるが白の晒木綿に黃色の澁を塗つたといふ珍物で、背中には尊皇愛國の至誠を示す「尊攘破天」の四字が黑々と大書してある。破天は當時の自分の號であるのだ。さうして背中には軍服と短劍とを入れた頭陀袋を擔ひ、腰には赤紐の十手を差し、頭には丸い裏金(うらきん)の陣笠を戴いた。

心膽と體力を鍊る爲めに、終日絕食して十數里を走つたかと思ふと、經節を唯一の食糧に、且かぢり、且步き、遂に行き暮れて、野宿したこともある。東海道を徒步旅行し、長驅して九州に出で、福岡、佐賀、熊本等到る處に其の地方の人物を訪ふて敎を乞ふたことも一再ではない。兵學校の嚴正な規律生活に服すると共に、不羈獨立、何ものにも束縛されない信念を、武者修業で養つたのであつて、此れは英雄崇拜の一面とも言へる。

十四、宇內一統さん

青年時代には、白鞘の短刀に「宇內一統」の四字を刻み附けて、常に座右に置いてゐたが、後にこれをステッキにして、携へ歩いたこともある。忘れもしないが、名古屋に博覽會のあつた時、此のステッキをもつて寫眞を撮つたことがあるが、寫眞師は自分の姓名を宇內一統といふのだと誤認して、

「宇內さん、宇內さん」

と呼ぶので、我ながら大笑したことがあつた。其の寫眞は、今に殘つてゐるが、それには

「携ふる所の一劍、銘に曰く宇內一統」

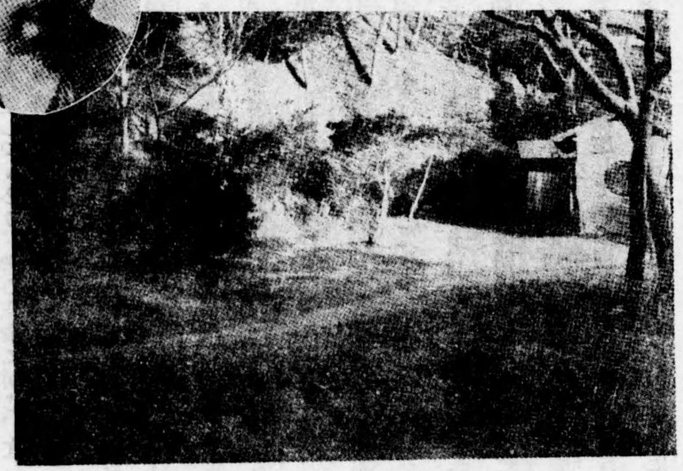
と自署してゐる。「宇內一統」も「天下取り」といふ言葉と共に、我々の常套語であつたことは笑はせる。

第二　盛春　自明治二十八年至同三十二年　五年間　十八歳より二十二歳　三十六件

一、初めて荒尾精先生に見ゆ

四日小林師を辭して、四條の內藤勝藏氏に厄介となる。小林全信師の紹介にて春日潛庵遺稿を携へて、荒尾精先生を訪ふ。兼て傳聞せる東洋の先覺者として、余も聊か天下の任に當るの志なれば、余の志のある所を述ぶ、先生大に賛成にて且つ曰く、幸ひ余も退隱、道を修め、其の餘暇に興亞學院の如きものを鹿ケ谷に設けて數多知名の士と天下の士を養成し相互に天下の爲めに盡すの考へにて、只今高橋、頭山等に資金の事奔走中なり、且つ鳥飼氏等と東洋圖書館の建立にも奔走しつゝあり、君の志余に同じ、宜しく相共に勉むるも可ならずやと大に天下の大勢を說かる、余も兎に角大體を知るに急なりしかば幸の事でもあり、鹿ケ谷にて暫らく其の大體を窮むれば、政治、經濟、兵法の諸學を修むるにも大に益する所あらんと、其の厚意を謝す、先生且つ曰く、君、今居所なきに苦しむ由何ぞ歌の中山に退隱するの必要あらん、當處は都塵を離るゝ遠くして靜幽俗緣に迂なり、苦しからずば余の宅に起臥せらるゝ亦可なりと、余是に於て暫らく滯在に決し、且つ二三友人の浪遊せるものを集めて梁山伯的生活をなさんものと、二三知己に此事を計る、是れ鹿ケ谷天狗連と稱せらるゝの基因なり。

八日荒尾先生の周旋にて川越宇三郎氏の裏二階に本陣を取り、此の日より數日間は朝より深更に至る迄東西古今の形勢より以て今日の現勢を來たしたる所以、志士當今急務の存する所奈何、志士の死所奈何、興亞の大策奈何等の說明を聞き、時々鷄鳴に至ることあり、先生少しも怠倦の色なく淳々として說く所、余大に其の士を愛し敎へて倦まざるを多とす。是に於て大に得る處あり、其れより學問の道を講究して、大學の三綱領八條目を王陽明學的に（坐禪的實行的は余の熱望せる所）考究し、毎朝鄙見を先生に正して討究することゝ定む、人として天地萬物の成立、人間の能力、學問の道、大義の存する所を知らざれば五車の書を讀破するも何の益あらん、幸ひ若王子瀧瀨の中に坐禪石あるを以て晝夜石上に端座して臀の腐り足の取れる迄凡百の苦痛何かあらんと、靜思苦慮、心神困倒するに至つて止み、毎日々々此の如くすること四日、中旬に至つて遂に之れを透破す、是に於て聊か余の天下に大任ある



支那問題の魁首東方齋荒尾精先生と、京都若王寺山中に於ける東方齋別院（延年臺）墟址

と、前途遼遠にして行路峻嶮なれども誓つて大英雄の眞骨頭を得んと欲するの念益々堅く、學問の要領より仁義の大道の何物なるかを知ることを得、玆に雅二の生涯に一階段を作る。

明治二十八年三月四日

二、延年臺

五月の中旬、化物屋敷を出で若王子山中、延年臺に移る。若王子山中は東山名所屈指の處にして三個の飛泉あり。櫻花、楓葉四邊に滿ち四季の風光絶佳、遊人粹客の節を曳くもの常に絶えず、殊に春の花時節や夏季には來往毎日數百人、茶店を山中に作りて客の休憩に便にす。一帶の幽趣なるは世上に喧傳する所、余等蕪筆の寫出し得る所にあらず、延年臺も遊人一醉の用に供せん爲めに建設せるものなり、然れども臺の位置北方に偏し、高臺に倚りて池邊を去る遠きを以て遊客の登り見るもの少く、彼等は多く其の南方瀑布に近き邊に蝟集するなり。是を以て俗人の熱鬧、讀書の妨害たらず、加之、早朝來や日沒後は四隣寂々松濤風籟の颯々たるあるのみ、若王子神社の社側を北に廻りて石階を上る一町餘、南に面しての茅屋は延年臺にして卽ち梁山伯の本陣たり、眼下の池は以て水泊に擬し、四邊十數の小屋は部下の各營とも云ふべきか。固より梁山伯生活を望まざるも、然か生活せざるべからざる奴共なれば、修身課程の如きあるも、起臥飲食時なく、間もなく前田淸哉、遠藤留吉兩生入臺せしを以て、自炊順番も漸く遠くなりて好都合なり。例の鍋一つ、椀も五、六個あるのみ、皆な手攫（つかみ）にて喰ふ。飲水の如きも一町餘離れ居る溪流を汲まざるべからず。衣類書物の如きも澤山所持せるものは之を他に頒け與へ、誰彼の差別なく、さすれば一枚の衣裳も一日に二三人の着ることもあるなり、又來りて喰寢するもの日に一兩人なれば、櫃底時々空を告げ燒芋にて肚子を飽かすことも度々なりき、晝夜別なく意に任せて高吟するあり、角力取るあり、擊劍するあり、或は山中に駈上りて麋鹿を侶とするあり、晝間は寢て夜は徹宵して讀書するあり、毎日當番の奴は町へ出て大根野菜、時によれば牛肉を買ひ來るあり、常に之れを腰にして山に歸る、又夕刻に至れば同人一同山を下りて娑婆に出で郊畔或は市街に橫行を試みるを常とす。其の樣如何

明治廿八年春京都梁山伯時代

明治廿八年臺灣に向はんとして

にも明治時代の開化人間にあらず、下駄の如き一人一個の用意なければ常に、四、五人に一、二人は徒跣にて歩するなり、袴の破れたるもの、羽織の袖なきもの、髪の長きもの、正氣歌を手にせるもの、鐵扇を身より離さゞるもの、陣笠を戴けるもの、洋裝なるもの、學校帽子を戴けるもの、千差萬別が僅か七、八人の中に存するなり。無頓着、豪放、沈毅温和のもの等いつしか都人士を壓倒して威風堂々、都下幾千の學徒敢て吾等に抗するものなく、若王子天狗或は若王子浪人と世の中に評せらるゝに至りたり。

三、豐太閤、余と友として善し

洛中洛外に古跡名所の多き、我國に冠として人口に膾炙する所、是を以て其の佳趣幽致なる所亦尠なからず、然れども、余尤も阿彌陀峰頭太閤墓上に臥するを好み、五月中旬初めて登山せしより夜に乘じて太閤に謁すること毎度、以て無上の遣悶藥となす、夫れ阿彌陀峰は清水寺の南に兀として崛起せる富士形の峰にして、全山老松巨幹、鬱蒼狐狸を住ましむ。獨り山頂は樹林疎にして月光は遍ねく墓面を照すべく、眼下洛陽を俯瞰して平原十里遠く下界を一瞥す、太閤乃ち此處に眠る、僅か二間方の柵を廻らし、中に一小石碑あるのみ、本年黒田侯の發起にて、方廣寺側より一直線に山道を切開きて宏大なる石階を作りて墓側に達す、一直線の階段十町餘他に見ざるの事とす、聞く豐公の薨するや此の頂に葬ることを遺言したりと、今又侯の此の石階を造るを見るに、深く太閤の意を察せるものゝ如し、余年少四方に周遊し、帝陵よりして許多功臣名將貴顯門閥の墳墓を見るに、帝陵は神嚴にして敬意を起さしめ、東照公以下、鎌足、信長等の墓、共に華麗にして俗人に嘆賞せらる、獨り太閤の墓に至りては然らず、覇氣勃々として乾坤を呑吐するの感あり、千歳の下、雅二親しく墓石に枕して青空を睨めば明月皎々、冲天に繫り俯瞰すれば三十六峰翠色滴り、人世の盛衰何のものかは、松風颯々、人膽を冷かならしむるの時、清水寺三更の鐘遠く聞へて益々萬籟寂寞、風も亦死す、暫くにして神氣爽然又凜然たるを覺えると共に夢か現か將た眞か、太閤の魂、地下より余に語るを覺え、茲に於て意氣益々興奮去る能はず、往々鷄鳴を聞いて初めて歸山するあり、其れより度々深更讀書に倦めば登りて墓畔に眠るを以て樂とす、嗚呼誰か此の間の消息を知るものぞ。

四、登叡行（其一）

此の月三・五の朝、余白骨と一升德利を肩にして登叡を企て、白河口より山谷の間を登る里餘、道漸く細り迂回して近江方面に出づれば琵琶湖眼下にあり、伊吹の高峰も余の丈けより低く、延暦寺前に達する頃は已に午後二點鐘、乃ち茶店に茶漬を飧ひ、案内者を雇つて道迷を免かれ、蘆草を蹈破つて頂上に達し、將門岩に踞し、枯木を集めて酒を暖めて飲み且つ歌ふ、薄暮案内者去る、漸くにして月東岫を出て湖上を照し、銀波一碧亦た風趣あり、右を臨めば洛陽一帶の燈火は螢の如く、杯中の月を飲みつゝ意氣昂然、思へば今夜比叡山頭、將門岩に踞して蓋世の歌を誦するもの、人間二疋、恐らくは今夜の明月は人盡く望むと雖も、此の壯懐を舒べて月に訴ふるもの果して何人かある、將門の大丈夫正に茲に宿せざるべからずと稱せしも、余等其の小膽を憐むなり、〇〇は粟粒大のみ何か

あらん。望むらくは此の山頂を平にして茅屋を作りて山近二州を庭園とせんには、功成り名遂げた後の隱れ場所ともなるべけれ、益ゝ醉ひ益ゝ吟じ、宇宙乾坤只余と白骨のみ、酒盡きて寒風堪へ難きに至れば月は既に頭上にあり洛陽の螢も漸く稀少とならんとす。已むなく右方の道を取り、直下に疾走する事二里、余は數度轉倒して水筒を破り、漸くにして修學院村に達す。其れより畦畔を歩し午前二時過に歸臺す一時の壯遊。

二十五日余神戸に赴く、前田、佐々木（德母）も同道す。松原の荷を千代田に托せん爲めなり。海岸中井回漕店に至りて聞けば、千代田は今朝拔錨せしと、全く失望せしも尙和泉艦のあるあり。卽ち端艇に乘じて和泉の堀內少尉を訪ふ。然れども出帆の期知るべからずと談笑二刻、乃ち已むなく佐世保鎭守府に托することゝなして同日夜歸洛す。是れより先き高宮（議）歸國。

今月に至り益々淸國通を知る。然れども未だ一人の肺肝相照す者を得ず。

學業課程

支那語學、國際學、經濟、歷史

山中に遁逃せる身なれば、他出下山すること稀に、寢喰の餘は先づ讀書するのみ。

五、嵐峽舟遊

六月二日東方齋主人の申出により、嵐峽舟遊を試む。此の時に當り大本營、東に轉じて同志も追々退京、殘るもの七・八に過ぎず。此の行、荒大人の胸中、蓋し一物ありしならん。余等天狗連も仲間入りを許されたれば一同例の乞食裝束にて疾走嵐山下、三軒屋の三階樓上に至れば、荒大人以下老ひぼれ株既に團坐せり。草場、緒方、勝木、青木、高橋の諸氏外に相國寺居士林連二三もあり曾生も今朝來泊せしを以て此の行に加はれり。凡て二十人、卽ち舟艘に酒肴を備へ正午頃峽中を溯る。頃は中夏の初めにて、櫻花の時にあらざるも滿目の風光如何にも天下第一なり。一同酌み且つ吟ず。途中、急駛矢の如き處には危機一髮、今にも轉覆せんとせること幾度なるを知らず。然れども舟手の熟練驚くに堪えたり。聞く此の河は日本三急流の一にして舟楫の困難は天下に冠たり。故に舟手の名人と稱せらるゝものは必ず此の急流を卒業せざれば名手たる能はずと。以て其の一般を察すべし。斯く兩山の介岩石、兀々の間を溯る里餘、淸瀧川に達す。此處の景は又嵐峽第一に居る。一同舟を岸に繫ぎ酒樽を傾けて飲む。或は泳ぐあり、或は舞ふあり、或は嘔吐するあり、中にも辨髮水中に「攫みこ」するは奇觀なりき。雅二獨り席を不動、莞爾として牛飲するのみ。東洋の志士（自稱）さん方と快を盡して歸山に就く。途中、溫泉場に浴し山上有斐閣に上る。又一異趣あり。斯くして再び三軒樓上に登れば日漸く沒せんとす。余等は則ち老人組に辭して歸る。途、妙心寺邊に至りて、國明公、脚病甚しく一歩をも進む能はず。依つて腕車を雇つて送之、此の行慥かに一ケ月位は命を延したり。

後幾干もなくして大原、木下二生、同志社近邊に下宿をなす。

六、馬鹿門庵

初旬延年臺同人、益々隆んに赴くを以て余は獨り別院に移る。庵は臺の左方松樹の間にあり。池邊を離るる遠く遊客の至る稀に洛陽の市中は收めて眼底にあり。併せて北山の前景、南方平原の景をも此の一庵に聚め、實に若王子山中第一に居る。二間に一間半の小庵なれば此の好風景に對して古書を繙き倦んでは高吟放歌す。其の趣味の高き諸葛草廬も及ばざらんと自惚れて居るなり。夜、市街に出で遠く山の中腹に紅一點を認む。是れ門庵窓下の燈火なり。凡そ此の高風趣を知らんとせば宜しく一たび遊びて其の眞を知るべし。豈に筆舌の盡くす所ならんや。外來の客、此の庵に來れば常に絶嘆去る能はざるなり。

七、登叡行（其二）

七日宿雨初めて晴れ神氣爽然、恰も三五の望月なるを以て夜、登叡行を企つる事に一決し、同人八、白岩、上野川上、丸山、宮坂、曾根原、牧山坊及余と薄暮より各一升德利を肩にして白河口より登る。日暮れて月未だ上らず暗を衝いて進む。雨後の道路なれば溪流と合して恰も水中を歩するが如く、砂礫落々、登山の難云ふべからず。行く里餘、或る小山の頂に達すれば十五夜の明月皎々として無限の情趣あり、同人即ち團坐觴を傳へ飲且つ歌ふ、「月見れば千々に物をこそ思ふけれ」と云ふは、眞に然り、既にして陰霧滿山、月影隱る。又行々吟且飲み大津方面に至り初めて丸山の逸せしを知り待つ一刻。彼遂に何れに迷ひ入りしか來らず、已むなく彼れを棄て、山の中腹を半腸迂回漸く老樹巨幹龍蛇を棲ましむる如き陰氣の林に入り下りては又上り、辨天祠に到る。時に午後十二時、先きの陰霧いつしか去り、碧天一空、明月は依然皎々吾骨髓に徹するに似たり。眼下湖上の風光亦云ふべからず。頭上老松の風濤颯々、亦思はず人をして凜たらしむ。乃ち又大に飲み酣にして魯智、奔雷の如き聲を以て松陰に在って猛虎行を舞ふ。威風堂々猛虎を屠るの概あり。余思ふ、上野の劍舞も道と共に益ゝ眞に迫るを覺ゆ。牧山坊も滿面溢るる如き愛嬌を以て、衣至骭行を舞ふ樣、又別趣の興あるなり。一は「猛虎一聲山月高」、一は「月下妙舞泣壯士」、一は鬼奴の如く、一は井筒女之助に左も似たり。此れ此行の奇觀たり。其他、川上等も劍舞し終るや、少年杯を捧げたれば、正一將軍大に得意顏たり。知らず之でせしめ得たるか馬鹿野郎。此くして同人絶快絶愉を盡くし、酒の盡きたるを遺憾として社前に犬の如くなりて眠る。八日早朝夢を破て又延曆寺に向ふ。肚子餓て歩行に堪へず道傍に横臥する二三度、漸く寺前に着し、茶店に投じて茶漬を喰ふ。然れども七人の囊中合して十錢なりしを以て各二椀にて瘦腹を肥やし、後は茶にて之れを補ひ勘定を問ふに二十錢なりと云ふ。十錢の不足如何んともしがたし魯知例の調子にて、空德利二個を取り之れにて勘免せよと、茶婆曰く「そんな瓶は異人さんが澤山おくれやす」と同人啞然哄笑す。然れども婆も余等の書生なるを知りてや後にて宜敷しと申せし故、乃ち再び疲れを力めて登る半里にして頂に達す。同人將門岩に踞し長嘯氣を吐くあり、沈思默坐するあり、四方の風光に目舞ひするあり。余は昨日の疲れにて草上に困臥す。可惜陰霧の爲め湖景を見る能はざりしを、斯くする少時、下山に決す。牧山坊非常に健者なりと雖も、夜來の運動加ふるに朝飯の足らざりし爲め歩行する能はず。余等と雖も殆んど困憊せし位なればなり。乃ち諸人爭ふて情を得ん、吾れ先登の功名せんものと已れの疲勞をも顧みず比叡の急坂を背負ふて下る。

余等二三町よりは到底負ふ能はざるに、魯知の剛力なる背負ふて嶮坂を馳下る易々たり。鬼奴の女之介を負ふたるが如く、上野の澁柿の衣物も是に至つて大に興を添へたり。辨天祠より道を變じて坂下村に至り、其れより唐崎に出づる二里餘、魯智、猶背負ふて平然たり。否な非常の困難を忍んで斯くするものは心中畫策あるなり。然れども中原の鹿誰が手に落つるや否やは、未だ容易に判ずべからず。辛崎松前の湖中に飛込みて游ぐ、六尺大の男が長髪面を掩ふて高吟しつゝ泳ぐ樣、如何にも明智左馬之介の戰敗して湖を横斷、唐崎に着せるが如き趣あり。此の時に至り一同の疲勞甚だし。其れより大津に向ふ。街人の評も亦面白い。魯智を鬬取さんに、白子雲の南京人、余のチャン〳〵、白骨生は道士の如く、川上は軍人の如しと、加ふるに道中少年を互に背負ふて行くことなれば、其の狀の奇なる名狀すべからず。行人の怪みて到る處私語せしも無理ならず。大津に至れば三時過なり。直に商業學校長猪飼氏宅に駈込みて休息、晝飯を七・八椀づつ喰ふて昨夜來の空腹を滿たし、四時頃辭して歸途に就く。

八、石山寺觀月

三日、仲秋十五夜の日に當るを以て、遊意勃々、乃ち石山寺觀月に決し、新橋君抔は御馳走に忙はし。余は中島姜少年を呼來る。時は已に四時ならんとす。荒尾先生等吾等に先ちて白子雲、田鍋、伊藤諸氏と共に大津に赴けり。新橋も余等の返る遲きを以て先發す。延年臺同人には曾生、立花生及中島等二氏と疏水によりて大津に達す。月既に岫を出で、霜の如き疏水中の景色又特別なり。大津町外より小舟を雇ふて湖上に浮び流れに從ふて下る。船頭泥醉一老翁との爭論も讙言口を衝て出で抱腹に堪へざらしむ。余等酒を傾け明月に對して飲且歌ふ。清遊の快名狀すべからず、天涯遊士の身、此の如きの遊び、豈に再びすべけんや、時に余外遊に決し居りしを以て、胸中無限の情は亂れて絲の如し、遂に後十時石山寺山下に到る。時に觀月の俗客多く歸途にありて續々たるを見る。然れども、尙ほ琴絃の聲閙しく、此の神境全く俗塵に埋沒しさらる。荒尾先生等何處に在るやを知らず。先づ山上に至り紫式部觀月の名所に達すれば寂として人影なく、只だ佐々木と外に一人の長髪連あり。卽ち相共に薪を折りて燃し濁酒を燗して大に飲む。此の間の趣味俗輩の知る所にあらず。斯くする二三刻にして再び下山して町に入らんとすれば黑木、新橋二人あり。新橋泥醉大に不平なり。東方齋抔は只今歸洛せしと。惜い哉御馳走の喰損ひをしたと。其れより新橋を連れて再び湖邊にて火を燃やして飲む。大佛尙ほ不平、石を投げるやら木を切るやら、尿をたれるやら大騷の中に夜も追々更け渡るを以て歸途に就く。黑木は叔母と共に宿せり。舟を傭はんとせるも已に船頭不在、途中瀨田橋にて佐々木等に別る。彼等汽車に乘じて山田に赴かん爲めなり。余等は鐵道線路に至つて大佛が柵を閉ぢたる爲め工夫と爭論し、今にも彼等を蹴殺さんとする刹那、衆に和解されて之を許す。此の時より姜少年益々大佛の亂暴を恐る。大佛に向つて姜少年の「他愛餘不愛」と云ひしを彼は、「餘愛他不愛」なりと誤りて之を喜ぶ樣も可笑しかりし。斯くして余等は睡氣切りに來りて歩する能はず、馬場停車場にて中島等に別れ、余等は逢坂山の道中に大の字になり眠りて翌早朝に至りて漸く歸山す。此の如き清遊は再びする能はざらん。快絶壯絶。（以上八件京都梁山伯時代）

九、明治二十八年歳晩蕃地所感

回顧すれば去年の今夜は則ち海軍機關學校を辭し、大なる希望を抱きて浪人に成り變り、漂然夜行列車にて上京二七連中の窟に入りしに深夜坐に十數人の同志あり。大に濁酒、澤庵に豪飲快談せし日なり。而して本年本日は埔社の蕃窟、語るに友なく述ぶるに人なし。靜坐俗吏の間に蟄伏するのみ、「歳々年々花相同、年々歳々人不同」だ。二十八年は余の生涯に大に變更を來たせし年なりき。初め海軍を辭し意氣四海を呑み、東西漫遊京都にて荒尾氏に遇ひ、肺肝相照すや遂に鹿ケ谷の同人となり、鞍馬山の天狗となり、已にして交友四方より來り、延年臺の梁山泊然たる生活は都人士の魂を驚かし、痛談狂語殆んど一世を罵倒せり。其の間、舞子須磨に避暑を試み、嵐山に叡山に意に任せて行來し、或は鹿ケ谷化物屋敷に寢喰し、膝を抱きて大に天下の形勢と精神錬磨惟れ日も足らざりき、此の間幾多知名の士に會し、高論卓説を拜聽し大に見識を高めたりしも、秋來ると共に交友も四方に散じ、余も亦た破浪の擧を企てゝ南溟に向ふ。思へば夢の如く深夜長息するのみ。廿八年に於ける我帝國の行歩如何。政海の動靜、列國の形勢等は日清戰役に依つて一期限を劃し、東洋益々多事ならんとす、委細略す。

思へば雅二の野郎位な馬鹿者は又と世にあらじ、疎狂猥りに天下を任とすると雖も、素養一も得る所あらず。諸同志に恥づる多し。年々歳暮に遇ふ毎に此の身に愛想盡くるなり。此の身なければ何の苦もないが、呼吸のある間は此の男中々俗人と伍し草木と朽つるを肯んぜず、「華盛頓（ワシントン）、那波烈翁（ナポレオン）、遂使二儒子成二大名一、長嘯抱レ膝獨莞爾、丈夫志業果如何」と法螺吹けり。毎（いつ）もながら、

「雄心志二四海一、千里客二南溟一、一睡遇二年暮一、負辜腰下刀」と歎息せり。誓つて明年よりは心魂を新にして、孜々刻苦、大に丹田氣海を練り、英雄の心事に入らん。誓つて奮勉古書を繙き、治亂興敗の跡を訪ねて經綸の大才を養はん。歳暮に遇ふ毎に棺に近づきて得る所、少なく。慙死の外なし、古英雄に何の面あつてか語るを得ん、「青天白日的節義、自二暗室屋漏中一培來、旋乾轉坤的經綸、自二臨深履薄處一操出」すと、南洲は吾が師、甲東は吾が友、誓つて天下を救はん……。

十、蕃民撫育掛となる

蕃民撫育掛となる。是れ余の尤も望みし所是からは生蕃相手に太古の民となり變り、大に試みる所あらん。元旦なれども、生蕃來廳の日なれば、其の用意をなす。依つて余等招撫局に至りて、霧社酋長に會して兄弟の約をなし、石を埋めて誓の渝らざるを告げ百方力を盡くして小土目以下四十餘名を同道して廳に入る。此の日總勢二百餘人來り居りしなり。乃ち酒食を與へて綏撫す。彼等蕃舞胡笳を歌ひ、所員も亦劍舞などして親密の意を表したが常に一椀にて彼等と同飲するには雅二も閉口せり。余の結髪せるを以て余を以て日本生蕃統領となし、諸蕃も大に余を敬せり。夕刻送て水牛等を與へ返らしめ、河野氏（久太郎）と夜遅くまで彼等と談笑して歸途に就く。途に泥醉者に遇しが、彼等は余を捕へて離れず、已むなく禮拜堂に遁れ入れば大御馳走にて所長等あり。乃ち共に食ふ。又生蕃近く來りて、熟蕃と爭を惹起さんとするを以て、百方周旋して熟蕃總理に之を慰諭せしむるを命じて返る。廳に返れば又數名の蕃丁來りて耳飾を乞ふ。時に一もあらず大苦心して種々の物を作りて與ふれども取らず。遂に

大喝して返らしむ。彼等夜中抃舞し居れり。寢るに衣なく蒲團なけれども、身體禽獸の如きを以て寒を覺へざるが如し。彼等が猛惡なりと云ふは當らず、之れを好遇せば愚直嬰孩の如く、禦し易くして化し難きなり。詳細生蕃事情に記せり。

新年元旦より蕃人の來るは、皇化の洽きを示すものにして、大吉兆ならずや。月は三五にして氷輪の如く沖天に懸り蕃山を照す樣、實に劍に仗つて胡穴を探るの概ありき。（明治二十九年正月元旦記）

十一、蕃地探險

孤劍短裝して一行八人、探險の途に上る。北角招撫局に至れば、霧社酋長「ヒオサボ」等迎へ待てり。守城坊より西方を望めば白雲靉靆一幅の好圖畫なり。所長は乘馬にて招撫局に至る。曰く足休めの爲めなりと呵々。守備隊等も四五十人送て北角に來る。是れ此の行不結果の重因なり。昨日酋長は五六人の外は來ることを辭せしに數十の兵士の來りしを以て愈々征伐するにあらざるやとの疑心を抱きて吾が意を解する能はず。酋長は部下六人と先導するにも、己れは最後にありて殿りせり。行くこと十餘町、蕃界に入る。此の谿の間を溯り、九芭林山を左にして往く。此の間、蘆葦人影を沒し殺氣人に迫る。行く一里にして酋長動かず。三人以上の人は今日は之より奥へ入るべからずと、談論數刻已むなく抽籤して三人のみ入ることゝして、余等は各處を探檢得る所少なくして夕刻歸る。委細は生蕃事情に記せり。

輕燥は事を誤り宋襄の仁は大將の爲にあらず、余は此の二語の味を知得せり。此行の利は是れのみ。

重ねて大探檢をなし、生蕃生活をなさんとす。生蕃撫育の任茲に在り。（明治廿九年正月二十四日記）

十二、蕃地所感

一、一月三十日

將に將たるの略なく長に長たるの才なきものは、部下の分裂亦收拾すべからず。余大に屬僚俗吏の眞面目よりして、上たるものゝ馬鹿は遂に大方針を誤り、不測の災害を來すものなるを知悉す。嗚呼恐るべき哉。

夜來、大に天下の大勢を談じ、英の三國に同盟せるを聞き、東洋益々多事ならんを思ふて、區々の身且つ遺憾に堪へず、中宵不成眠、素養なる哉、素養なる哉。

二、一月卅一日

俗吏間の情態、余に取つて御上の飯喰初めなれば、此等の點に付き大に會得する所あり。益々俗吏の下等なるを知る。山林的精神一もなく、名利に汲々たるの情可憐の至り。身存して心既に死せるもの、正邪曲直の辨大に會する所あり。

孫子、吳子、孟子を讀む、詩法を研究す。……

生蕃相手に心を益する多く、語るに友なく蕃山四塞の別天地大に吾が眞を養ふに足る。

三、一月十二日

世の中に馬鹿程恐ろしきものなく、世の中に小人程始末に困るものはない。己れの卑俗なるを知らずして徒に「チャン」輩が己れを輕蔑すとて怒る。不レ知自ら招くものなるを、中心、一の光風霽月的のものなく。小なること豆よりも小に、余輩傍觀して大に自戒する所あり。到底俗吏こそ頗る可憐。

夜來燈を剔りて成敗の跡を考へ、倦き來り机に對して眠り、夢に故園の餅ち搗きを見て、覺えて口占して曰く、

多年放浪背二慈情一。　回首萍蹤一葉輕。　今夜客魂鄉夢澹。　笑聞裊々搗粢聲。

四、二月十四日

舊曆正月の元日にて、蕃家爆竹の聲、夜眠を驚かす、今日は故國も正月元旦で雜煮を喰ふの日、感多少ぞ、天涯遊士長く慈情に背く。假令大志を抱くとは云へ、無限の暗涙あり。「チャン」の小供等の餅を喰ふて呼ぶのも浦山敷き限りなり。二月に入りてより毎日雨天、降り續きて夜來は殊に蕭殺、四方の關山は相距る遠く、溪流に橋なき爲め交通斷へ、これでこそ唐詩に所謂征戍兒の悲曲も偲ばれるなり。然れども、蘇武の十七ケ年匈奴の雪中に流謫されて、牧羊せしを値へば、一笑に値ひせず、實に余に取りては非常の好學問なり。靜思の工夫、尤も可なるを覺ゆ。

一巡査の病篤きを聞き、其の心中に立入りて、余の情に脆き密かに暗涙を流したり。皇天願はくは吾が壯士を助けて病を癒えしめよ。其れに付ても、輕薄兒の憎さ限りなし。實に世人の薄情なことも役人樣となる一しより、始めて知れて身慄然たり。小人們の面體可恐哉。

五、三月二日

俗吏の情頗る閉口、然し最早、地より五寸高く浮り上れば、萬事屁の如しだ。語るに人なく、「幽懷畢竟向レ誰語、長嘯蕃山松竹陰」だ。然して這裏大に雅二を練る所あるなり。多謝々々。

六、三月六日

意東亞漫遊に決し、夜、檜山氏に辭職の事を依頭す。所長快よく其の周旋を諾す。乃ち余は御用出張の名義を以て、臺北府に上り運動をなす事となる多謝々々。余は一片氏の俠氣に感ず……

臺北にて辭職許可を得ば、直ちに淡水より厦門に渡り上海に出でんとし、若し如何しても能ばざれば、直ちに歸國して潛まんと欲せり。之を要するに昨年十月以來南溟の中にあり。得る處幾干ぞ、會々の此蕃界にありて常人の知らざる心境工夫に便を得しと雖も、今や通譯官は全くの通辯のみとなり。少しも自己の能力を使ふ能はざることゝなれり。然かも俗吏數多來ると共に、餘りに不羈にして役人の型を破りて終日寢喰も出來ず。卽ち去るべきの時來れるなり。然かも徒らに見、徒らに聞き、徒らに異域を跋涉したとて何の益する所あらん。沈思すれば妖氛益々暗憺として、豪傑の士を俟つこと久し。南船北馬し日月を徒消するの秋にあらず。卽ち單純なる跋涉は余に取つて

無益なり。是を以て若し臺島に於て辭職する能はざれば最早日本より重ねて遊行するの必要なからん。余俗吏の間に處して大に感得せる所あり。好し〳〵潛學々々。

七、三月二十九日

正午より築川居士と御用小蒸氣に乘つて、淡水河を下る。此の間行程五里、沿道の風色亦佳なり。淡水滬尾街の遠望は中々文明國の港の樣ぢや。船は二點鐘にして稅關前に投錨す。直ちに上陸、支廳長代理隱岐氏を訪ふて談頃刻其の周旋にて東洋館に泊し、夕刻諸方を散策す。恰も明月の夜なるを以て丘上に登りて支那海を眺め、怒濤叫號氷輪水中に落ち、波靜かにして金紋點々捕ふべからず。好し一葦帶水を隔て大陸通ずるかと思へば、雄心破浪の氣已み難し。況んや今回の此の遊、固より禹域跋涉を期するものなるをや。淡水に遊ぶのも區々遊眺の外、別に一物なき能はず。愚者は嘻々として突ひ、智者は呶々として論ず。世の中も面白くなく介然一物あり。吾れをして思ふ儘に高翔せしめば聊か手腕を奮はんに、浮世の野郎共の齷齪するには閉口々々。

十三、臺灣を去らんとす

此の月は夢裡に過ぎたと謂ふべし。何の得る所なく埔城に寢喰するも、心思不定にして未だ心膽練磨の妙味を解するなく、其の後、悠々徒消して臺北に來りしも、運動不如意、茫然として浮世の役人連に伍し、嘻々俯仰するのみ。心中一つの益する所なし。此の大愉快の時に當り光陰を徒消す。實に斷腸の思あるなり。然れども人生不如意は亦大なる修練なれば、此の際大に得る所なくんばあらず。要するに己れの克己復禮に在るのみ。東亞の中原は雅二の料理を俟つこと久し。何んぞ蠢々として棲息する。正に猛氣一番大に心身を練り、大機を掣せざるべからざるなり。イツモながら月末に至ると吾身の智德の不進を嘆じて安く寢る能はざるなり。困つた野郎なり。五尺の身體と三寸の胸中が自由に出來ぬと云ふ始末さ。そんな奴が天下を擒縱する抔と法螺吹き居るのだもの、大日本帝國の前途も案じられるなり。兎に角今日迄の樣では中々豪傑の士とは云ふべからず。一段の猛省を要す。馬鹿らしくて眠れぬわい。

十四、在京生活日記

一、六月二日

勞働社會跋扈の風潮遠からずして、濠洲の南天より襲來らん。是れ一憂にして、黃色人種の白哲人に制壓せられんとする風潮、漸く大和民族にも及ばんとす。是れ二憂なり。然かも亞細亞八億の生靈未だ結托するを知らず。兄弟牆に爭ふの愚を爲す。我が黨有爲の志士、須らく中亞の天、波斯の野に入り、滿腔の熱心同情を以て、其の固信する宗敎（回々敎）の眞理中よりして、十九世紀文明制度を編出し來り之れが實施を勸告し、傍ら野に在つて大に奔走盡力せば、元來猛烈勇敢の韃靼種族、大に其の旗幟を振ひて國光を輝し、亞洲西方或は中亞の藩屏とならざるあらんや。蕩々たる中原の好山水、固より吾人埋骨の地に富む。余既に決せり。望むらくは才氣英發の青少年をし

て益々奮つて海外破浪せしめたきものなり。

二、六月三日

代議政體、言行錄第二等を讀む。午前十時、田鍋氏來る。共に一杯を酌して道を論ず。曰く「自箴の言、一以て貫くべし。又多きを要せず。且つ內を修むべく外を飾る勿れ。內修まれば自ら外に顯はる。日常所謂人に對して言ふべからざるの事なきを期すべし。卽ち致知格物より入るべきなり」と。午後田野(橘治)來る共に散策、借家を豐島郡に求めて不得、直ちに歸る。薄暮門外を遊行、少刻にして歸宅、阿部、淸國行を成さんとして未だ不成。

三、六月五日

孟子、報告六、七讀了。

午前大野來る。直に歸る。上午困々として眠る。後二時友成祖父來る。衰頽病後、然かも衣食に窮するの狀を說き且つ愛孫の現狀を說かれんことを乞はる、余氣の毒に堪へず、之れを慰諭し且つ金八塊を呈して寸志を表す。翁大に悅び、是非近日來遊あらんことを請はる。嗚呼人生の榮枯は一場の夢、余大に翁の不幸の後半世に於けるを歎ずるなり。之が子孫だるもの一刻にても不正の念を發して、之れを苦しむるあらば、人にあらざるなり。夕刻田野と共に早稻田水田の間を逍遙して歸る。余報告を見る每に、東洋の不幸を知る益々深く、實に中宵衾を蹶つて起つもの數回、嗚呼、何の日か鐵馬中原に馳驅し斯の志に報ゆるものぞ。空論徒議畢竟世に寸功なし、大智大勇を養ふべきなり。安南のこと、印度のこと、朝鮮のこと、支那のこと、若しくは日本のこと、之を如何んするものぞ。

十五、將に支那に向はんとす

嗚呼、雅二生を此の世に享けしより、玆に二十春秋、齡五歲にして庠序に入り、孜々勉學以て今日に至る。篠山に東京に江田島に橫須賀に或は全國の山川を跋涉し或は南溟蠻烟瘴霧の中に出沒し、自ら甘んじて臥薪嘗膽の苦をなし、只だ贏ち得たるは、半生狂狷の名のみ、然かも斯くする所以のもの豈に他あらんや。家を興し、國を益し、名を後世に揚げ以て男子四方の志を成さんと欲するのみ。今や再び去つて禹域四百洲に入らんとす。禹域地廣く物夥しく世界の富源として廿世紀世界大波瀾の中心たり。吾れ玆に志ありて此の地に遊ぶ。到る處の感慨幾何ぞ、想過考來眠りに就く能はざるなり。崑崙の山、長江の水、曾て之れを史書に聞く。而して未だ曾て知らざるなり。二十二代興敗の跡、曾て靑史の上に見る。而して未だ曾て見ざるなり。嗚呼愉快なり。此の遊、將さに大に修養する所あらんとするの今日、此の遊ある豈に多少の功なからんや。世人優遊吾れ關せず、余は正に甘んじて酷暑炎熱を犯し千難萬艱を排して他年皇謨展開の一助となさんのみ。

十六、臺灣前途果如何

「臺灣前途果如何」、頃者彼の「北淸日日」は縱橫に我が臺灣施政を誹議するの一文を載せ、其の翌日發行の新聞報は之を譯載して得々たり。其の言に曰く、「日本臺灣を虐視するの甚しき、遂に彼等をして叛旗を翻さしむる

に至れり、或は村莊を燒燼し、或は良民を虐待し、或は稻田を荒らし、或は婦女を姦淫し、或は妄りに人民を殺戮する等、實に暴戾恣睢至らざる所なし」と、余竦然として恐る。嗚呼此の如き記事豈に輕々に附すべけんや。天下耳目の鋭き、愚者の多き、遂に獰獅悍鷙巧に口實を設けて土民を誘ひ、益々新領土をして紛亂、麻の如くならしめ以て施政干渉の端を啓かんことを憂ゆるなり。回顧すれば去歲我皇師の臺島を領せしより已に十幾閱月、此の間短しとなさず。財を費す亦少々にあらず。而して得る所果して幾干ぞ。吾人重ねて論ずるに忍びざるなり。「北淸日々」其の他の新聞をして、斯くの如きの言を發せしむ。幾分かの事實なからんや。我國人は敢て之を掩はんとするも豈に能くせん哉。余大に疾呼して當局者に留意せんことを勸む。若し輕々に雲烟過眼視せば後難測知すべからざるなり。顧みて國家百年の長計に至らば、吾が臺灣施政の適不適は、直に延ひて禹域二十世紀の大禍亂に對する帝國の位置に大關係を及ぼし、會々臺島經營の拙は遂に帝國をして世界舞臺の中心より放棄せられ、復た回復する能はざるに至るやも知れず。世の識者願はくは爾の皆を決して如何に南溟の天地に妖氛暗憺たるかを觀よ。想ふに血淚萬斛なるものあらん。吾人は今、多くを語らず。夥しく言はず、只だ此の時に當り、速に警醒一番、大に決する所あれ、滬城城頭春色老ひ、火伯襲來夜眠り成り難し、獨り三層樓上の安樂椅子に倚り四方を望めば、玉兎皎々として一天、星稀に、深更車馬の聲尙絕えず、天涯遊士の胸臆、誰あつて知るものぞ。

十七、客中の感慨

一、客窓感慨

白龍子來訪せられ、道臺よりの通報なきを以て今日も延期に相成りたり。此の日、暑氣酷だしかりしも幸に下午より降雨のため聊か涼風を起せり。坐臥、世界の俊兒抜都(バット)大王の傳を讀み、昔時東洋の威風歐洲の草木を風靡せしめしを想ひ、今や當年英雄の覇圖逝いて跡なきを思ひ憮然天を仰いで長嘆せり。嗚呼、國家一日も欠くべからざるものは英雄なりけり。誰れか云ふ。英雄崇拜は昔の痴夢と、滔々たる輕薄者流共に語るに足らざるなり。此の日午後三時山城丸入港、新紙を齎らし來る。之を閲すれば悲歎痛憤の記事のみ、知る。目今我國に在ては諸方降雨打續きて洪水各處に起り。堤防瓦解し電信不通となれりと。而かも臺島の草賊未だ平定せず、紛々として極まる所を知らず。

上に　一天萬乘の聖　天子を戴き、下に忠勇尙武なる四千萬の同胞を保ち、宇內を混一して德澤を六合に洽からしむるの天職ある東海の扶桑國裡の事、感じ來れば吾人血淚數行ならざる能はず。吁々、吾れ生きて此の否運に遇ふ。誓つて大に恢復の策を講ぜずんば死するも地下に瞑する能はざるなり。頭を回して雅二の身邊を見るに、春秋寒暑を改むること玆に二十回、學勵まざるにあらず。行勉めざるにあらず。然かも半生、狂狷の名を博し得たるのみ。恰も以て一奇の世人に異なるなし。嗚呼雅二畢竟大材にあらざるか。何爲れず自ら任ずるの高且つ大にして其の行爲の賤且つ劣なる哉。中宵樓に倚りて沖天を望めば悲雨點々として四隣瞑々、嗚呼何に依つてか吾が鬱屈せる磊塊を慰するものぞ。慨然疾呼、遠征の歌を吟じて蒼天に問ふ。

二、外交餘話

七月十七日の朝日を看る。雜報欄内に外交餘波と題せるあり。我邦外交拙劣の結果を數ふ。卽ち之に附記して吾人、臥薪嘗膽の一助料とせん。

曰く第一京仁鐵道は報酬よりするも我國有に歸せざるべからず。然るに米人の爲めに先鞭を着けられたり。第二魯國に憚りて守備隊を充分置く能はざるが爲めに暴民の襲ふ所となり大なる損耗を實業者に與へたり。第三、撤兵の結果内地の行商は總て支那人の手に落つるに至れり。第四、朝鮮北部の金鑛は魯人の手に落ちたり。第五、日清戰後日本邦商は清商を壓倒せしに二十八年五月以後清商は、其の勢力を恢復せり。第六、朝鮮銀行には本邦人の取引拒絶せられたり。第七、邦民の損害賠償は數月を經過するも未だ一錢一厘を獲る能はず。第八、支那に對しては製造品不課税を主張する能はずして之を撤回せり。第九、本邦人の支那に製造所を起さんとするものは、當分中止するより外なし。第十、邦人の手にて支那に輸入せる鐵道枕木の類も凡て西人を通して輸入せざるべからざるに至れり。第十一、米國は我邦の製造品に向つて殆んど禁制法を行はんとするにも拘はらず、之に向つて何等の手を下さず。第十二、布哇は本邦酒一「ガロン」に付二弗の重税を課して禁壓せんとすれども之れを拒絶する外交手腕なし。第十三、濠洲は日英條約に加入せずと議決して我邦民の膨脹するを拒まんとすれども我政府は何の談判を試みざるなり。第十四、布哇は米國の後援を賴みて我移住民を退けんとすれども我政府は之れに對する何等の措置を爲さず。第十五、フキリツピン群島にて邦人の殺戮せられたるものあれども未だ賠償金を西班牙政府に要求したるを聞かず。第十六、フキリツピン群島を我邦の保護下に置かんとして、彼地貴族我邦に來遊するも凡て彼等をして絶望せしむるのみ。而して魯國は却つて進取的政策を以て、石炭貯藏所を群島中に置かんと計畫せり。第十七、シャムに於ける邦人の膨脹を冷かに看過して未だ領事館をも置く能はず、曰く何、曰く何。

嗚呼數へ來れば何ぞ其の數の多きや、然れども是れ只だ其の一端のみ。更に他に萬世に亘りて挽回すべからざるの誤計に陷りつゝ點あるなり。臺灣經營の缺陷の如き、東亞興隆の前途に如何なる不都合を起すべきか。山縣公使歸朝後の報告書は果して奈何のものなる乎。吾人多くを語らず。否な語るに忍びざるなり。嗚呼帝國の前途果して如何。嗚呼帝國を如何。日暮れて道遠きを覺ゆ。

夜來團欒諸公と當世を談じ、新紙を閲し、深更一時に至る遊子一片國を憂ふるの胸臆、眠り成り難し矣。

十八、松陰神社に於ける豪傑會

此の日は松陰神社に會合、豪傑糾合の約ありたれば、幸ひ田野の來訪と共に酒樽を携へて沖を訪ひ數刻原口、高月至る。相携へて青山に出で澁谷を經て世田ケ谷村に達す。路傍に宮坂、柴田に遇ふ。玆に大に酒肴を集めて神社に詣れば、横山、伊東、杉山、小山、阿部、高山諸君既に來會せり。時に一時、乃ち一同十數人、社前青草の上に團坐して飲み且つ歌ふ。神氣は松陰、賴三樹諸先輩に徹したると見え、雅二は想過考來淚潸々たり。宮坂と相抱いて慟哭す。這般の消息は知る人ぞ知る。世の輕薄兒又何をか知らん。或は講談師の話を聞き抔して一同十二分の快を盡くして薄暮歸途に就く。豪興四筵を驚かす。一老翁曰く、此の如きの快席は十數年來、未曾有と、以て一端を察すべきなり。途次諸氏に別れ原口、高月、沖、坂本、田野、及び余は坂本君方に又一杯を催ふす。余此の日、快極りて二三子の言行が癪にさわり少々熱罵を加ふ。酒醒めて之を思ひ慚汗淋漓たり。之も誠心の逆る所、深く咎む

るを止めよ。世上の俗兒豈に赤誠あらんや。昔者南洲翁の如き三十五歳に至る迄往々血氣を以て人を罵倒せしことありと。國臣傳に見ゆ。今人の徒に少年黃口兒を以て天眞の在る所を知らず。英雄を擬し沈默大人振る尤も不可なり。此如のき輩如何んぞ英雄の眞消息を會得せん。然れども雅二の如き少しく戒むる所あれ、松陰の所謂死生大悟と潛心存養を守り、平素沈默寡言、苟くも驕らず、敬の一字を服膺すべし、勉旃々々。

坂本君宅にて原、沖、高と四人にて又、大に元動力に就いて論及し、愈々吾黨四人は同心一體、會の根本となり至誠以て諸君の魁たらんことを約し、皆な決する所あり、若し後日薄志弱行前言に反する如きあらば天地不レ容レ之也、殊に書して以て後日の爲にす。

十九、東方齋逝去の報あり

夜來夢惡し。六時晨起すれば宇野突如として來る。曰く荒尾東方齋逝くと。余其の言を信ぜず、曰く本日の「日本」に此の事を載す。卽ち老婆に命じ「日本」を取り披見すれば吁々何たることぞや。先生は南臺巡遊中、ペスト病に罹りて逝く。吁々眞乎幻乎、吾れ知れざるなり。然かも眞なるが如し。噫々東洋絕無の志士、日本第一流の豪傑、東方齋主人三十八歳を一期として轗軻蹉跎、大業未だ緒に就かずして噫逝けるか逝けるか、雅二國家の爲、之を信ぜざるなり。滔々たる四千萬、一人の克く先生に及ぶものあらんや。東洋の大策、先生を措て誰人か其の後を紹ぐものぞ。悲憤惆悵、氣狂せんとす。

嗚呼人生何ぞ之れ賴みなきや。噫々人生限りあり、恨極りなし。古來死なる者は幾多高材逸足の士を埋沒し去る噫、天なる哉、命なる哉、然れ共、雅二餘りに慘且つ憺なるに怨言なくんばあらず。吁々果して眞乎眞乎、溫容髣髴として眼前に在り、一代の豪雄、遂に一病魔に勝つ能はざる乎、吁々心を寄するの先輩は仆れ、事を謀るの友は疎し、噫々茫々たる乾坤漂々たる孤身何の處にか適歸せん。二十年夢幻の如く雅二の出處行藏、斯の間に生息する何の意なるを知らざるなり。机席痕あり、暗涙を留む。滿腔の悲痛誰に向つてか訴へん。仰いで南溟の空を望めば愁雲漠たり。噫、先生果して死せるか、吁々人生の事、雅二復た說かざるなり、吾人一日を盡せば足れり。「道旣に形體なく、心に何の拘泥あらん。達人能く明了し、渾て天地の勢に順ふ」と云ふも、雅二達人に非らず、曷んぞ此の心境に在るを得ん、「好しワシントン、ナポレオンを地下に喚起し、宇內を一統して吾が志に報ん」と志は宇內一統に在りと雖も未だ一個の安心を得ず、所謂言ふて易く行ひ難きの事たり。雅二何れにか適歸せん。仰いで天に訴ふるも天應へず、俯して地に哭するも地に聲なし。滿腔の悲慨人知るや否や。兒童は嬉々として婦女は笑ふ。吁々人間の事、雅二復說かざるなり。是と呼び、非と云ふ。遂に底事ぞ。吁々先生果して逝ける乎。

旣にして埴原正直、沖禎介等來り皆少刻にして去る。雅二獨り庵中に跪坐して酒を命じ飲み且つ歎ず。醉少しく廻り、乃ち埴原を訪ふて聊か悲衷を頒つ。相伴ふて歸り、又々飲む。午後三時埴原去り野溝傳一郎來り、宮阪九郎境澤二人も次で來る。九郎大に醉ひ、相抱いて轉々痛哭す。噫々、誰か此の消息を知るものぞ。旻天意あらば先生の爲に一掬の涙を濺げと、果せる哉、薄暮、天曇り夜に入つて驟雨到る。雅二、九郎等を置去りにして埴原と共に尾崎行昌を訪ひ、談少刻、歸途に淸風亭に中西正樹老を訪ふて在らず。其より沖禎介、川崎太郎を訪ふ亦在らず。午後八時歸庵すれば、木片狼藉たり。爐邊に默坐、沈思深更に達す。遂に苦悶を醫するに由なし。遠寺の鐘聲、偶

〻以て我が憂心を增すのみ。

翌早朝田野橘次に托して東方齋の像を畫かしめ、歸つて之を壁に揭げ題して曰く、

落々乾坤氣宇恢　堂々風采禿山堆　除レ君誰克拯二斯國一　眞個神州男子魁

齋戒今より一週日、學科に缺席屆を出して蟄居精進す。

二十、早稻田の生活

一

六時晨起、此の日、約に叛く。男兒の恥づる所可レ戒、特書後日の爲にす。

午後より坂本龍馬の語集を見、其の放膽如レ斗奇警如レ電、遙に俗鱗を脫出して意氣千秋、眼空二天下一の概あるに驚く。然かも讀み去り讀み來れば聊か雅二に類するものあるを覺ゆ。但し彼れ學不レ深、少しく偏見に陷り、品性稍〻粗莽にして未だ大悟せざるにあらざる乎の疑ひあり。若し彼れをして更に十年を藉さしめば圖南の鵬翼を振ひ、世界に橫行せしならん。希代の俊傑なる哉。夜來忽々彼の傳を圖書館に讀み、益々其の天性の愛嬌家なるに推服す。武市曰く㸃（坂本常に莞爾たり故に云ふ）は近頃どうして居るか。定めて法螺を吹き居るならんと。嗚呼海南の俊傑、獨り君あり。歸來、心中欣躍眠る能はず。月に對して沈思夜半に到る。想へば人生は朝露の如し。宜しく一日の事を盡くし出來る丈け快且つ大なる事を、自由自在に成し不朽を期すれば足れり。星と云ひ辰と云ふ。天と云ひ地と云ふ。豈に永久なるものならんや。人間斯の世に不幸にして生存す。萬事多くは兒戲のみ。旻天に對して哄然一番、胸中一物なきなり。蹈破らん乎、蹈破らん乎、宇宙の中。

二

早朝脇元來る。沖等と三士、大隈邸內菊花を觀、邸中を逍遙す。菊花滿開人工を盡くし、天然の美を極む。加ふるに邸內の壯觀美景實に一極樂園たり。嗚呼大隈の傲奢極れりと云ふべし。幼年の八太郎今や天下に重きをなし行動聊か國家の大勢に關するに至る。彼れも亦一の人傑と云ふべきか。是れを維新初年南洲、甲東等に對するに其の事態の變遷霄壤の差ありと謂ふべし。男子斯の世に生れ五鼎に食まずんば五鼎に烹られん。安んぞ屑々として俗人の間に伍せんや。顧みて思ふ。吾れ年正に二十歲、志大ならざるにあらざるも、才智拙劣、德行菲薄、一の以て世人を拔くものなく慙死々々、嗚呼何の日にか宏猷を展べんや。妄想百出。

薄暮宇野と散策、明月に乘じ蕎麥を喫つて歸り、田野を訪ひ十一時就寢。

此の終日碌々深く古人に恥づ。

三

六時晨起、午後南條博士の印度佛敎、林田學士の表決論なる科外講義あり。夕刻、同窓生來る。相共に淸風亭に赴く此の夜同窓茶話會の催しあり。余其の幹事なるを以て之に赴くなり。聚るもの十二人、臺灣料理にて大に飲

む。衆皆醉ひ亂舞放吟自ら他級と異なる。一の梁山泊的風味あるを覺ゆ。愉快、後九時散會、沖、坂本と共に散策神田に加藤、本所に渡邊を訪ふ俱に留守なりき。乃ち村井を訪ひ路傍の濁酒店にて四雄一醉を買ふ時に十一時、其れより尾崎を圓山館に訪ひ、諸友去りて余は玆に宿す。明朝上野に赴くの意あるを以てなり。

回顧すれば去年今日は、破浪萬里、幾多の好奇心と冒險心を齎らして南溟に渡り、基隆に上陸せるの日なり。俯仰一周星、顧みて一身依〻舊落魄、何の得る所なし。豈に月に對して恥づる所なからんや、感無量、人生行路の事。

四

晨起九郎と事務所に赴く。諸役員既に在り。余は記錄掛なりしも別に用事なく、只だ玄關番をなし會葬者の名札を受取るの務めなりき。十時頃に至り、諸役員大抵聚り十一時頃より會葬者の來るもの續々、乃ち休憩所を澄泉寺に設け接應員其の間に周旋す。天下の名士を初めとし青年學生に至るまで無慮數千人、余等三十七人は喪服を着す。詳細は記せず。二時出棺本願寺にて佛葬し、四時終る。斯の間感涙無量、今更云ふも野暮なり。其れより一同喪服を脱し、九郎と共に日本橋一旗亭に飲み、將來を語り互に自己を戒めて亭を去り、中村方に至れば、松原、野溝在り、又一醉して眠る。

此の日は涙を以て始終せり。

五

晨起遠藤は福岡に歸省す。午後稻垣氏の長演說あり。引證明確、論去論來、盛んに「シーレー」學派及英國外交の巧拙得失を說き、終りに我國の實際問題として考究すべき點、六ケ條を列擧し、大に聽者を感ぜしむ。惜むらくは所謂暴に以て暴に代ゆる的の政策にして、萬世不動の大目的を盤石の上に建てゝ其れより打算し來らざることを卽ち相手に對して起すの策たり。然れども大に耳目を爽にせり。五時に至り漸く臺を下る。歸來泥堂光二郎を訪ひ初會の禮を爲す。氏多血單純の人、坐に大澤君あり談少刻、神樂坂に散策、大澤君に別れ泥堂と歸庵談十時に至る。氏去り其れより大鹽中齋の傳を繙て十一時就寢。

專門校小使突然余に語て曰く「昨夜僕は君が荒尾先生の墓前に跪き田野橘治君が剃刀を以て君の長髮を剃るを夢みた」と、余熟思して心大に慙づる所あり。是れ先生余の怠慢無氣力を歎じ、余に東洋に志すもの汝が如き薄志弱行の能くする所にあらざるを地下より戒められたるに非ざるなからんや。奮勵一番せざるべからず。思ひ玆に到りて師に背き、父兄に背き、朋友に背き、鄕黨に背き、晏居夢生せるを見、穴に入りたき心地すなり。

及〻今奮勉せざれば平生の素願は遂に空言に歸せん。

二十一、東亞興隆と荒尾東方齋

高山正之の志節誠忠を以て、林子平の卓識籌略を兼備し、沈毅、堅忍、力行進取、百折不撓以て能く我帝國の爲に百年の長計を建て、能く躬を以て卒先躬行して其の効を奏する者、其の人有らしめば吾人四千萬同胞は誰か其の人に向つて感欽景仰せざる者あらんや。明治の天地に於て此くの如き人物唯一人を觀る。而かも此の人今や

溘焉として逝く矣。嗚呼我同胞四千萬誰れか之が爲に傷心痛悼せざるものあらんや。此の人とは誰ぞ。故陸軍大尉荒尾義行(精)先生即ち是なり。

先生の天資精誠、剛毅絶倫、而して外貌温和、所謂有レ威而不レ猛者也。夙に志を東方亞細亞興隆の業に立て、明治十年以來、專心一意、此の志を鍛錬し、之を計畫する者數年、終に其の實行の方法を決定し、日清貿易研究所を清國上海に建設し、我が日本に於ける有爲の青年若干名を養成訓練して、刻苦勉勵六、七年終に有用の人物百數十名を育成し得たり。明治二十七年日清戰役に當り、我が征清軍隊をして向ふ所連戰連勝せしめたるもの固より我陸海將士の忠勇義烈に由るは勿論なりと雖も、又清語通譯官たる諸士の獻身偵察及び通譯の勞に任じたる結果多きに居る。而かも此の通譯官百數十名中其の最も有爲にして善く我が軍の爲めに耳目と爲り筆舌となり、以て實功を效せしのみならず、其の內十數名は最も力を偵察に盡し、深く敵地に入り熱血を以て國に報ひ難に殉じたる者ありしが、こは是れ皆先生の薫陶に出でたる者に非ざるなし。要するに先生は夙に卓見を以て、對清運動第一線に必要なる人材、忠勇なる青年通譯官を養成し、以て征清の役をして其の成功を奏せしめたる功勞は、寔に著大なりと謂ふべし。當時若し此の如き多數有爲の通譯官其人無からん乎、我征清の皇軍は假令ひ忠勇無比なりとも、亦暗啞聾瞶に等しきが故に、作戰の進行に多少の困難を免かれざりしならむ。然らば則我皇軍をして聾啞の困難を免れしめたる者は實に先生の功多きに居れること明らか也。

日清戰局の未だ收まらざる以前、君は夙に其の終局善後の大計を劃し、清國をして、戰後大に日本に依賴せしむべき籌略を記して、之を當局に建白し、前途東方經綸の恢弘を計らん爲め甚だ勉めたりと雖も、多く當路の採擇する所と爲らずして、罷む、豈に痛惜せざるべけんや。

先生の劃策をして若し當時に行はしめば、日清兩國交際善後の事と東方經綸の恢弘とに於て大に觀るべきものありしならん。其の行はれざりしは命也。

先生は之れに屈せず。更に第二策を劃し首として臺灣新領地に於ける、皇化普及の方法を研究し、終に身を以て臺灣に航し、以て臺灣居住の紳士（清國籍に在るもの）と親しく懇談、交を結び、周旋盡力すること數週日にして終に其の目的の端緒を達することを得たり。我が有力紳商と臺灣紳士社會との交誼協同和衷の端緒は實に先生の誠心努力に依りて、初めて開くことを得しめるものにして、事は本年十月八日に在りし也。是より後、先生は將さに臺灣を出發して支那の南方諸要地港市及び安南呂宋等を巡視して後に歸國の途に就き、以て前途臺灣統治經營の事及び日清提携善後の事に關し、着々實功を奏せむと期せしに、豈に計らんや十月廿八日臺北に於て黑死病に罹り溘焉として逝去せむとは、嗚呼、痛嘆ぞ堪へん。

先生歿すと雖も、其の精神は長く不滅不死同志士人の魂魄に憑り、以て生前の素志を完遂せずんば止まざるべし。同志士人は勿論、苟くも我皇國官民として東洋近來の大勢に鑑み、遼東蹉跌の屈辱を念ひ、臥薪嘗膽して皇威顯揚の精神を抱く者は、宜しく深く荒尾先生の遺韻を懷ひ、其の遺志を紹ぎ、以て東方興隆の事業に勉めざるべけんや。

荒尾先生畢生の事業は東方經綸に在り。東亞隆興に在り。而かも其の事業の計劃は着々として夙に審算熟慮せられ、十分成算の存するあり。不幸にして、當路者の納る所と爲らざりしが、今や內閣の更迭と共に、我が國紀

綱一新の時機に際し、先生の宿望將さに之を展はすことを得んとするの瞬間に當り、忽ち此の訃音に接す。豈に千古の遺憾に非ずや。

雖然先生の誠精は、高山正之に遜らず、卓見達誠は林子平に讓らず、高山、林二子の精神は、永久不滅にして同志有爲者の魂魄に憑仗して以て其の生前の宿志を完遂するの時あるべきや必せり。先生の生前の持論は、滔々たる世上政治家或は策士の論說なる者と大に其の撰を殊にして其の言ふ所は則ち其の必ず行ふ所にして、其の論說は則ち先生の着々實行せる所に非るは莫し。言行一致、表裏一體、終始貫徹するの一誠を以てせる者は實に先生の生涯にてありし也、嗚呼是れ先生が高山正之、林子平を一身に兼備したる所以に非ずして何ぞ。

故に、今や吾人は我が帝國同胞四千萬人中の有志者にして、或は未だ荒尾先生生前に持論を熟知せざる人の爲に其の持論の一端を紹介せむと欲し、玆に其の遺稿中より、左の一編を抄錄し以て之を世に示さんとす。翼くは四方の志士依つて以て先生の志業と其所論とに與り聞き感憤興起する所あらんことを希ふ。

明治二十九年十一月十日認之　荒尾精述（玆に略す）

▽國家百年の長計

二十二、明治二十九歲晩の感

嗚呼二十九年將に終らんとす。此の日豈に多少の落淚なからんや。回顧すれば今年は實に雅二生涯の一大段落たりし年なり。今年一月一日には臺灣の蕃界にあり生蕃と友とし、悠々塵界の得喪を脫却して天眞を養ひ、三月下旬七十里の長亭短驛を徒步、種々の風物に辛酸を嘗め淡水より渡淸せんと欲して遂に成らず。五月空しく歸朝、再び七月東都發、西國より一飛、吳越の地に入り辮髮胡服、聊か大陸的眼光を養ひつゝ九月歸來、所期の如く、學窓の人となり政治經濟を研究して今日に至る。想ふに雅二心界の開拓今年の如く顯著なるものを見ず。窃かに昨年の阿蒙にあらざるを誇らんとす。只だ怨むらくは我黨の先覺者東洋一の俊傑、東方齊先生は十月三十日午後十時十分を以て北邙一片の煙と化し、英魄今は招不得、是れ尤も遺憾の出來事とす。是にかてか余等の責任百倍し來り、余等の奮勉百倍を要すべくして、未だ百倍の憤を發する能はず。吁々、我が天下を奈何せん。誓つて今より精神の滿艱に從はんとす。

上午、冲來る。豕を炙り酒を酌む。夕刻冲去り宇野、田野、埴原來る。爐を燃して飲む。此の夜、五升樽を飾り閑觸髏を机上に祭る。宇野去り、田野、埴原等と談話千々に渡り、野溝等の吟咏亦欣ぶべし。行盃の間に二十九年去る。變な氣持がする。前一時衾を舒べて埴原と同衾細談夜を徹す。氏中々の多情漢なり、盛んにノロケを語る。余氏に對しては最早や腹藏なし。鷄鳴鐘聲、交々耳朶を破りて四時埴原歸校し、余は六時過迄眠る。

二十三、人間學

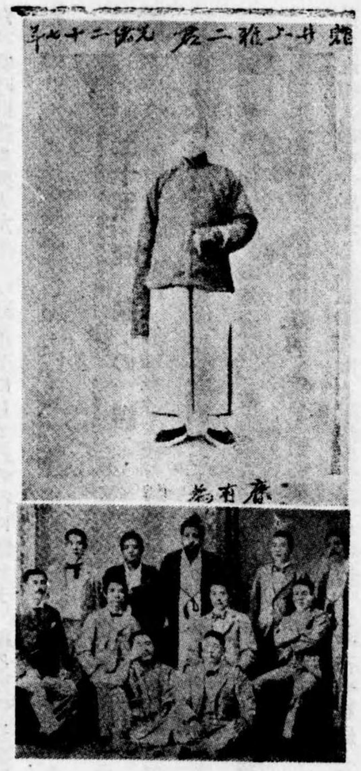
（明治三十年末、年齡二十一歲の思想）

人は萬物の靈長なり。大塊の主人公なり。人を離れて事なく。事を離れて人なし。吾れ今幸に人間に生れ、而か

も西力東侵日に急にして危機一髪に繫るの東洋に居る。天の吾を此時此地に生ぜしむるもの偶然に非ず。五十年の短日月を如何に經濟的に使用し、天下第一等の快擧を大塊の上に試むべきか。人間の精魂固と限りあり。卷ては之を方寸の裡に藏め、舒べては之を六合の中に充たしむる底の明德を明にするは焦眉の急なるは論を待たずと雖も、凡そ天下の事一人一個の能く爲す所に非ず。其の事のより大なる程より多くの人を要す。點滴の水も集まれば大海となり蟻封の土も積めば高山となる。則ち最も多くの人間を撥縱指示し、最も多くの人間に必要視せらるゝ者は最も大なる人たり。吾は如何にして己を知り如何にして他を知り、又如何にして英雄の心を收攬すべきか。如何にして俗人の望を滿足せしむべきか。人間學の必要此に於て乎在り。吾れ人間に生れてより玆に二十一年、幾多の偉人傑士、小人俗子と典籍の間に相見ゆるを得るも是れ枯骨のみ。亡靈のみ。肝を拔いて共に天下の長計を策し、臂を把て共に社會の波浪を凌がんは、之を今人に待たざるべからず。人なるものの研究豈に忽諸に附すべけんや。

人は謂ふ。足下の所謂人間學なるものは如何。答へて曰く人間學は科學にあらずして哲學的なり。抽象的學問なり。人之を造次顚沛の間にも一擧手一投足の際にも常に研究するを得べく、人生の靈妙不可思議なる腦力を最も能く發達せしめて人事の微に入り、人情の細に入り、人心の妙に入り、自由自在に之を使用するに至るを以て、其の卒業の時となす。人長じて各々事物を辨別するの力あるの年に達せば、皆幾分此の間の消息に通じつゝあるなり。而かも吾人身を政界に立てんと欲する者は、殊に此に留意するを要す。

其の研究如何は暴かに言ひ易ひからず。自然の妙に入り、偏する所あるべからず。學びて得べきにあらず。直に識得して神に入るべし。



日支兩國志士と交遊

（上）支那革新派の首領康有爲氏

（下）明治卅二年早稻田に於て支那革命黨の主盟孫逸仙と共に撮影、前列右より安永東之助、宮川五郎三郎。中列右より柴田麟次郎、內田良平、孫逸仙、中野熊五郎。後列右より清藤幸七郎、平岡小太郎宮崎寅藏、述者、原口聞一の諸氏。

智以啓レ財、財以啓レ衆、衆以啓レ賢、賢之有レ啓、可二以爲レ王二天下一矣、

二十四、如何か是れ無用の人

文豪「ゲーテ」の短吟に曰く、

如何なる人是れ無用の人、人に命令する能はず又人に從順なる能はざる者則ち是れ——

人に命令する能はず、又人に從順なる能はず、天下滔々皆な此の仲間なり。宜なり矣、世に梟雄少くして能臣の稀なる。治世の能臣は能く從順なり。亂世の梟雄は克く命令す。亂世に克く命令するものは、治世に能く從順なり治世に命令するもの、亦た亂世に能く從順なるや否やの反問は暫く之を措き、兎に角克く命令する者は克く從順な

り。命令する能はず、又從順なる能はざるの徒は、己れを知らず、時と場合を辨ぜざるの輩にして、終世昏々、自家本來の面目を發揮する能はず、深淵の中に憤死するに非ずんば窮巷に陋處し了らんのみ。天下業に此の徒に用なく、寧ろ進運の蠹害たらんとす。此の徒を斬除せずんば乾坤一清と云ふ可からず。我國には此般無用の人は西洋に比して多きを覺ゆ。是れ爲政家の留意して匡正を要する所なり。

然し此等の徒は根本的に教育を施し人々其の處に安んずるに至らずんば、到底盡くるの期なけん。若し吾に餘力あらば此の徒を一束にして之に與ふるに大牢美屋を以てし、其の尤なるもの魁なるものをして率て以て天年を終らしむ。又一小仁ならざらんや。我は此の徒を憐むで而して之を度し、度して而して直ならざる者は之を養はんかな。嗟呼此徒も亦人たり。天は不公にして此の徒に福せず。斯る稟性を享けしむ。何んぞ直に之を斬除するに忍びんや。

二十五、利創の詩

小閑あり、机に倚つて韓詩を讀む。利劍の詩を得たり。云ふ、

利劍光耿々、佩レ之使三我無二邪心一、故人念三我寡二徒侶一、持用贈レ我比二知音一、我心如レ氷劍如レ雪、不レ能レ刺二讒夫一、使二我心腐劍鋒折一、決レ雲中斷開二青天一、噫劍與レ我俱變化歸二黃泉一、

我れ韓人の中、斯かる雄渾犀利なる思想を有する者ありしや否やを疑ふ。今の韓人、遂に此の趣味を解する能はざらんか、其の心秋霜、其の氣昂々、直に利劍を把て、我が伴侶とせんと擬す。外面貌々、中心烈々の大乘界に入る能はずと雖も、正氣時に百世をして興奮せしむるに足るものあらん。我は此の輩、兩三を獲て側に侍せしめ、其眞言苦諫を聞かんと欲するや切なり。而かも世悖にして哲人遠く逝き、我れ何の處にか此の好漢を求むべき吁々。

二十六、明月

讀者多く我心をして惑はしめ、我をして機心多からしむ。我れ一夜孤燈の下、獨坐して比公時代の獨逸帝國史を讀み比公が苦辛經營、新帝國を建設せしの跡を査考し來て、我帝國の現狀に顧念し、我任の頗る彼に似たるものあるを想ひ、其の重大なる負擔は前後の始末を奈何すべき乎を苦思し煩悶すること多時、神魂昏迷し我我に非ず、目視て視へず、耳聽て聞へず、史を脚下に一擲し走て戸外に出づれば金風颯々として至り、凉氣神を刺し、覺へず彼の蒼々の天を仰げば十五夜の明月皎々として高く冲天に懸り、又た一點黑の空を蔽ふなし。仰視少時、疇昔の我が志想は逝て跡なく、胸中の大虛、極めて透明、天と地と我と一體たるやの感あり。功名何物ぞ、貧貴何物ぞ、天下取つて何する者ぞ。世を救ひ民を濟ふ畢竟何の爲ぞと、大差別界に彷徨せし我は大無差別界に入り、而して我は遂に無差別の心地を以て差別界の現世に處し、兩々毫も相阻礙する所なきを思ふて已む。

仁は曰く無差別。義は曰く差別。人を待つは無差別。己を律するは差別。

昔者德川家康、明月に對して歌ふて曰く、

天が下に心かゝる雲もなし月を手にとる十五夜の空

と我れ頗る此の襟懷に服す。唯だ夫れ襟懷をして大阪冬役後の襟懷ならしめんか我は彼が梟雄たるを認めざる能

はざるなり。

二十七、言必信、行必果、徑々小丈夫哉

吾は斯の如く爲せり。故に斯の如くせざる可からず。吾は曾て此の如く言へり。故に斯の如く言はざる可からずと、言と言と行の果ならざる可からざるは論を俟たずと雖も、余は斯く言へるが故にと、斯く爲せるが故にとの前提は敢て口外すべき者に非ずと思ふ。孔子が徑々たる少丈夫と爲せしは寔に理あり。吾人は口に言はず。行に示さずして萬人齊しく彼は言行一致の君子人なりと信ずるに至らん樣心懸く可し。孔子は斯くの如き人は、智に於て足らざる所あり。以て大事に任ずるに足らずとなせるならん。

誠に云ふ、人事の祕密に通ずる者は最も自然を活用する法を曉知すと。

善を好み惡を惡むは人の性なり。善を爲さんと欲して苟もすれば惡に導かれ易きは人情なり。故に人事の祕密に通ずる者は能く事物の裏面を洞察し無理算段に心神を過勞することなくして萬物自然の情理に從ひ之を利用するを得、天下の情理に離れ自家の意を通さんと欲せば、一時自らの智略により成功すと雖も遂には破れ畢竟無益に了らん。天空して鳥飛ぶに任せ海濶ふして魚の躍るに從ふ。人々各神經あり必ずしも人に服する者に非ず。是等は皆勝手氣儘に働かしめ而して自已と共にするに非ざれば損なりとの一念を存せしむれば足れり。大機あれば天下の凡俗は皆雲合蝟集する者なり。

水は低くに就くの性あり。而かも噴水せしむれば上ること數百尺なるを得。人能く人事の祕密に對手方を赤裸々となし、玆に其の性に從ふて自然的に活用せば皆我用を爲さゞるなし。

二十八、立身の道

佛國の名士バルトルミー・サン・イレール、少年氣鋭の徒、彼に立身の道を問ふ毎に則ち曰く、何事をも要求する勿れ、榮達に汲々たる勿れ、汝のあらん限りの才覺を以て汝の交遊、汝の社會に缺ぐ可からざる一人たるを期せよ。彼等は悅んで汝に向け榮を捧ぐ可しと、吾人も亦然か思ふ。只だ立身は自家辛苦の發現に外ならずと雖も、社會交遊に缺ぐ可からざる一人たるを期するにも及ばず、小慾を去り大慾を期し、衆生を以て自家の赤子と視し、而して彼等の爲めに其の至誠を注ぎ彼等の爲に其の苦勞を取除けば自然に世間は自已を稱揚する者なり。

人に使はるゝ如くして人を使ふ是れ巧者なり。

二十九、一點の私心ある則ち人心を收攬すること難し

吾忠臣藏を繙て何時もながら由良之助が豪傑の士たるに服す。思ふに今日の眼光より看れば彼の行爲は隨分變なる點なきに非ざるも、彼の法令嚴に上下の別甚しき封建の中葉に當り、能く五十餘人を打して一丸となし、敵者の眼を昏まして其の素志を貫徹せしもの、寔に稀有の器量人なり。而して一點の私心なく、未練心なく、夙に一身を君に捧げ、而して成巧を期せん爲めにはあらゆる屈辱を物ともせず、彼の連判帳破りの如き、就中夜討の晝、南部坂に於て亡君夫人に謁する時の如き、其の態度口調能く謹み能く戒め、人知らずして慍らざるの本體を得たるを覺

ゆ。唯だ彼が天稟の高きと修養の深きとに拘はらず、彼の窮境に際し、機微の間に愚痴を洩らせしは亦聖人に非ざるよりは免るべからざるの所たり。彼れ南部坂の夫人の邸を辭せんとするや侍女戸田に向ひ曰く、

世の中の人と莫のよしあしは煙となりて後にこそ知れ

と、而して幾分か眞意の機微を吐かんとして直に諧謔に轉じ去りたる處、余は大器量人たりしと云ふに躊躇せず。

三十、龍馬秘祿を讀む

海南の奇傑と呼ばるゝ坂本龍馬とは果して如何なる人物なりしか、史乘に載する所、傳記の誌るす所、猶な隔靴搔痒の感なきに非ず。只だ吾人は思ふ。彼は階級制度の堅き封建の末造に人となりたるも生得の稜々たる豪骨は躊躇の天地、別に人間の好驅馳場を求めんと欲せし野生的の人物なりしに相違なし。彼が早歳に及んで海援隊を編制して自ら之が長となり、南海西海の灘頭を蹂躙したるもの、其の意蓋し德川幕府の終りを告げ、皇政復古の洪業を爲すを得ば、自己は世界の舞臺に躍出して後半世を世界人の粹となりて終へんとせしならん。彼れが薩長連合に斡旋せしを以て直に彼は大策士なりと云ふ者則ち是れあり。而かも余を以て之を見れば彼の眞意は薩長合同、早く鷸蚌の爭を止めて國運の進轉をなさしめ、一段落さへつけば自己は歐雲米水到る處自由の空氣に浴し別乾坤を拓かんとするの志あり。彼や世上に論ずる如き一片の策士に非ず、擧世眼豆の如きの時に當り、想を乾坤の間に馳せ一氣直に五洲を呑むの奇傑たりしなり。然り余は彼を奇傑と云ふ。彼は此の風雲を呑吐するの氣概あり。而して學識に乏しかりしが故に、野性的發達たるを免れず、稍ゝ下品なる所あり。若し彼れに學識あらしめんか、其跡猶一層光彩陸離たるものありしならん。然し飜て之を思へば其の學識なかりしは彼をして一層快き愛すべきの男子たらしめたる者か。彼の如き天稟は學なく識なきも優に奇傑の班に入るを得。頃日所謂龍馬祕錄なるものを讀むに頗る彼の天眞を窺知するに足るものあり。其の四、五を摘記せんか。

一、我が身、壽命を天地と共にし、歡樂を極め人の○○を恣にし、世の中を自由自在に奔走してこそ生れ來りし甲斐はあれ。何ぞ久しく人の下座にあらんや。

一、世界の人民如何にせば○○しに成らんと工夫すべし。胸中に此勢あれば天下に振ふ者也。

一、世界に播き知らしたる人民又は金銀の類、自在に○○を聽けば天下を掌握するの才ありと知るべし。

一、人に生れて外國に渡らば○○○を以て心とすべし。

彼れが頂天立地其の豪懷を磅礴せしめたるの一端以て見るに足る。

一、死する時は命を天に返し、位高き官へ上ると思ひ定めて死を畏るゝ勿れ。

一、成る丈、命は惜む可し。二度と取り更へならぬ者なり。拙なきと云ふことは露斗りも思ふ勿れ。

是れ彼が人生觀なり。如何に卑近に而かも虛飾なき人生觀なるよ。

一、○○などは夢にも思ふ勿れ。身を縛らるゝ者なり。

一、○○○○と號するも、只執着の私なれば、蠶虫同樣の者にして愛するに足らぬ者なり。況夷人をや。

一、薄情の道、不人情の意、忘るゝ勿れ。是を却て人の悅ぶ樣にするを大智と云ふ。

一、○○抔云ふは人を縛る具なり。世をしめ堅めて吾が掌中に入るの具なり。

一、蜘蛛は網を乾地に張つて虫のかゝるを待つ。士農工商の様、凡て此の虫の如し。

彼れが事功に急にして心猿を自由自在に馳せしめんとしたるの苦心察す可し。

一、日輪の影に最引なきが如くすれば、世は知らず〳〵我に落入る者なり。

一、人に一勝を與へて我に百勝を取るを知らしむ可からず。古の英傑大方は然して豪卒を手に入れたり。

一、人に益を與へて策を施せば、中人以下陷るゝ者なり。

一、涙と云ふは人情を見する色なり。愚人婦女子に第一の策なり。

一、人を懷くるの術、世下り、道衰へて天下の民人貧苦に惱めり之を治するの術は金銀藥種なり。

一、己が欲する所人に知らしむる勿れ。己が惡む所も亦然り。反之他の二情を覺るを英明の器とす。

如何に策士的の口吻なるよ。

一、位とは本末を云ふのみにして恃むに足らず。智と勇とを蓄ふ可し。天下亂れたる時に依りて知るべし。

一、時運を察して人情を曉る可し。衆情の傾くを見て先づ立入る所を知る。

一、天下を料理するは先づ薄墨にて畫くべし。餘り濃く過ぐるは取返しの付かぬ者なり。

大體を得たり。

一、人に對面せば此の奴は如何にせば打殺すべしぞと見取るべし。此の奴打殺すは譯はないと思ふ位な者は智なし。少し六ケ數と思ふ者は智あり。早く欺して味方にすべし。

一、我より身分優る人と年高き人は遙に意外の智ありと知るべし。

一、如何なる臆すべき處にても其の對面の人、彼奴原、婦人に戲るゝ様は如何なる振舞ならんとの意を以て其の容體を見ば論ずるに足らぬ風俗あるべし。

一、形を望んでは下賤と見下し心を察しては凡夫と曉り、動搖せば打殺す小蟬の如く一目、胸中にありたし。

一、愛すれば近づき惡めば去り、與ふれば嬉ぶは禽獸の様なり。人亦何の異なる所かある。

此の如く彼は人を虫同様と感ずるも、

龍蛇混雜と雖も、吾れ龍なれば他に於て氣相求むるの意あり。忘するゝ勿れ、言ひ合して置くに及ばず。

と云ひて同志を殊更に糾合するの必要なく、自己が研鑽さへすれば自然に雲合蝟集すべしと云ふ所、見所あり。

一、衆人皆○を爲せば、我れ獨り○を爲せ。天下の事皆然り。

一、○○と世に云ふ者は予れ世を見るの手遊なり、歷代にさせて心を慰むる所なり。

一、○○は船暈の手習なり。能く心を用て、かりそめに過す勿れ。

一、人を殺すことを工夫すべし。人一人○せば其の靈の乘移つて智もふへ命も延るものと心得よ。

一、○○は軍の工夫、○○は忍術の稽古、○○は反間の習し、○○は任俠の計、○○は人をなつく類の材なり。

と云ふに至つては頗る極端なるも、彼は

一、○○は目玉にして○○は腹なり、目玉は潰れても腹あれば活て居る。

と云ひ、其の本末に暗からざるを知る。最後に彼が學問に對する感念如何と見るに彼れ曰く、

一、學問の道他なし、只だ生死の情を察する而已。

一、陽明曰く六經は心の注脚なり。佛者云ふ斷見と、是は見所あり。

と、以て其の體を得たりとせんか、彼れや遂に碌々に非ざるなり。若し天彼に假すに猶ほ十年ならしめば維新史上更に紅一點を添へしならん、可惜也。

三十一、時雨星、八達嶺頭に反詩を吟ず

――八達嶺は萬里の長城、居庸關の絶頂なり、明治三十一年の秋騎して之に登る――

昔は山東の吸時雨、宋公明、大志を抱て江湖に落魄、未だ風雲の會を得ざりしの時、一夜潯陽江畔の賣酒樓に上り、獨酌低唱、醉ふて覺へず壁上に題して曰く、

心在二山東一身在レ吳、飄二蓬江海一漫嗟吁。　他年若得二凌雲志一、敢謂黄巢不二丈夫一。

彼れ敢て軒昂自ら壯とするの小丈夫に非ず。虛懷能く天下の士を容れ、公心能く天下の善を用ゆる底の俊兒なりしも醉餘、此の作あるを免れず。今は東海の時雨星、志は實に聖賢の壘にに攀るに在り。義として萬邦の安を扶持するの天職を双肩に擔ふて以て斯世に生れながら、醉餘、時に鬱勃の氣を吐くの已むを得ざるあり。八達嶺頭、眉を昂げ唱つて曰く、

朔北之邊西域陲、號レ王稱レ帝任二他爲一、　他年若得二風雲會一、鯤化鵬飛自有レ期、

三十二、大事を做さんと欲す、須らく跡を印す可からず

我れ當世に生れ天下第一等の事を爲さんと欲す。須らく磊々落々日月の皎然たるが如く一點の陰翳ある則ち不可、昔者、石勤は一好事者のみ、猶ほ斯語に啓發する所あるを知る。況んや宇內生靈救濟の爲めに自ら任ずる所ある者、常に此の襟懷なかるべからざるなり。憶ふに事を做すと云ふは天眞の發現に外ならずして朱毫も作爲糊塗の處あらんか必ず跡あり。跡あらんか必ず禍ひ之に從ひ、褒貶之に續かん。故に須らく跡なきの工夫を凝らさゞる可からず。跡なきの妙處に到らんと欲せば、先づ功名を喜ぶの念無きを要す。誠心赤誠只だ已むを得ざるに出で斷じて事を好むの心ある可からず。須らく周公、孔子の事業を以て男子分內の事と爲し、然る後始めて跡なけん。

三十三、快活は男兒の本領なり

凡そ人快活ならざれば一代の儀表として衆生の渴仰を受くる能はざる可し。人情千金の賈も嗇んで以て人に與ふれば則ち人感ぜず。一毛の惠も誠を以て之に施せば則ち人感ぜざるなし。事同ふして效異る者は顧ふに之を爲す所以の意奈何に依るのみ。若し夫れ人あり自ら蹙眉して以て命を發せんか、多く其の事を成し難し。豁然以て命を出さんか、則ち衆服して之に從はん。人を使ふにも之を活使する時ば則ち悅んで之に從ひ、人を死使せば則ち從はず、寔に其の相距る霄壤啻ならざるなり。德川吉宗曰く、凡そ人困して而して俯する者は事を爲す能はず、困して仰ぐ者は能く成功せんと。眞に然り、然れども亦思はざる可からざるは、其の事を爲す常に快活なるも、意人を服す

に存せば、人容易に服する者に非ず。只だ滿腔の精神を做出來して事に臨めば、人自然に服すべし。思ふに能く行ひ難きの事を行ふの人ありて而して又能く行ひ易きの事を行ふ能はざるは、其の精神の過不足に在り。識見の明否に在り。故に識見ありて精神滿腹の者則ち能く大事を爲す。吉宗公の諭は百折不撓の意あるを示せるなり。百折不撓は精神滿腹に非ずんば能はず。是の故に識見ありと雖も氣質柔弱なる者豈に能く事を爲さんや。快活は男子事を成すの最大要素なり。

三十四、多疑は英雄の態に非ず

多疑者無二實之心一とは醉古堂に說く所、思ふに多疑は女性的性質にして、到處事を做すに害なくんばあらず。己れの心事を掩ふて之を知らしめず、以て深遠と爲す者は小人の智也。丈夫の心は常に青天白日の如く事に臨んでは赤心を人の腹中に布き、始めて能く衆をして我に同化せしめ、之を使ふ手足の如きを得ん。然れども其の將に疑ふ可きを疑ふは固より當然なり。只其の間に直截なる見解を附し、事に處して宜しく蕭然放下す可し。

當世に生れて絕代の事功を立てんと欲す。須らく活眼を以て天下の勢を察し、時の利不利に顧念し、勢の可なる時、利あるの時、勇往直前向ふ所皆破るべし。時を知らずして徒に猪勇ある、遂に豪傑の器にあらず。男子七十、爲すべきの時は十年にして足れり。

太田道灌、野路過雨の歌、多く余が意を得たり。

急がずば濡れざらましを旅人の後より霽るる野路の村雨

三十五、支那論と支那子

禹域獨立野人は清國の儒生なり。姓は宋、名は恕存禮と號す。博學强聞、曾て李鴻章相國の幕僚たり。北洋水師學堂に官す。日清戰爭に際して議合はず、爾來窮巷に陋處して白眼一世を睥睨し絕へて脂粉の氣なく、今の支那人中稀に覯るの高士なり。余の上海に在るや常に相往來して議論を上下す。曾て余の支那論を讀み且つ余の長女に支那子と名づけしを聞き一詩を贈りて云ふ。

生レ女名二支那一。壯哉井上子。筆翻二河海一濶。學富二東西史一。過去不レ勝レ悲。未來知何似。中夜讀二君書一。双涙墮難レ止。

三十六、逆浪五周記

明治三十二年十二月三十一日

他人に擬して自己を語る

我に親朋あり、今は禹域に在り。其の交や斷金、知つて言はざるなく、言ふて合はざるなし。頃者一信を寄せて曰く、我れ生れ得て頑迷不靈而かも深く自ら期する所あり。挺身好んで逆浪滔天の中に投ぜしより烏兎忽々早く已に五星霜ならんとし、修養一も見るべきなく蹉跎して玆に歲暮に遇ふ。曷んぞ痛歎に堪ゆべけんや。昔者英のピットは二十四にして宇內最强最大國の宰相たり。漢の孔明二十七、能く三分割據の略を蓄ふ。嗚呼我れ遂に彼れ孺子の下

風に起たざる可からざるか。我れ歳暮に遇ふ毎に必ず一年の行事を追思するの記あり。之れを繰回すること四回、今復た之が記を作すべきの時に際す。而かも想過考來すれば、我れ寔に筆を執るに懶し、爾ち克く我れを知るもの請ふ我に代つて之を作れと、余云ふ諾、乃ち此の逆浪五周記あり。

想ふ彼れ軀幹肥大にして强健比なく、面色黎黑なるも不穩の風見へず、其の風采恰かも水滸傳中の宋公明に髣髴せる所あるを以て人綽名して黑時雨と呼ぶ。性個儻にして大志あり、小事に拘々たらず、俠氣峥嶸、五洲を蓋ひ、一生自家の謀を爲すを恥ぢ、誓つて萬物の化育に任ぜんとす。若し其の器其の志に適へば非常の人傑たるべく、其の器其の志に適はざらんか遂に絶代の癡漢たるを免れず、之を斷ずるは須らく棺を蓋ふの後を待たざるべからず。若し夫れ其の器其の志に適ひ而かも其の時の情勢不可なるありて偉績を垂れ宏業を成す能はざる如きは固より天運然らしむるのみ、以て其の人物を軒輊するに足らざるや明なり。

今を距る五年前、即ち甲午の冬十二月除夜如何なる魔神に魅せられたるか、上官之を止め、同僚之を止め、而して外友之を阻み、一族之を阻み、あらゆる知己皆以て不可となすに拘はらず、自若として、そよ吹く風とも思はず斷々乎として海軍を辭し、孤影蕭條、自ら好んで社會の逆浪中に投ぜり。蓋し彼は深く悟る所あり、厚く信ずる所あり、堅く決する所ありしなり。斯の悟や、信や、決や、遂に彼をして心機一轉せしめ、而かも再轉せしむる能はざるなり。彼は天地一體、萬物一氣の哲理に想到して現在の情態に不滿を抱き、斯の世を圓滿無缺の境に導くは其の天職なりと悟り、而して二十世紀の前半紀に當り、海東の君子國に生れたる彼は其の不撓の氣魄と無比の健軀を以て、能く天職を全ふするに足るべきを信せしなり。乃ち彼は宇内一家の理想に到達せんには先づ、東西文化の混一を要し、東西文化を混一せんには先づ、東亞の衰運を挽回して、文化上、土俵の上に於て西歐と相見へしむるを要し、東亞の衰運を挽回せんには先づ、支那四百餘州を長き眠より醒覺せしむるを要す。而して支那四百州を長き眠りより醒覺せしめ、己れ等之が統率者となり、四千萬の同胞を率ひ四百萬の隣人を提げて、天下の公理と至情とにより、五十年の短日月間に創業を終へ以て子孫紹ぐべきの業を殘さんと思ひ、玆に彼は先づ興亞を叫び、餘力西歐をも提撕善導せんとなすなり。彼の志や寔に壯とすべく、而かも其の功成るの難き豈に尋常一樣の能ふ爲す所ならんや。彼れ深く之を知る。彼れの學、知行合一を主とし言の行と相伴ふを期し、空言徒らに自ら壯とするの徒を憐んで己れ之に墜るなからんと苦慮する者なり。故に彼が夢寐考究して已まざるは如何にして功を奏すべきかに在り。大功業の果は大修養に因す。彼は斯くして大修養を爲さんと決心せり。而かも從來の西洋通の用あつて體なく從來の支那通の體あつて用なきを看破し、茫々たる乾坤一個先輩の語るに足る者なきに顧念し來つて、彼は先づ東亞を研究して後に西歐を研究し、而して先づ手を東亞に下さんと欲せり。我は彼が見解の其の當を得たるを思ふ。

是に於て彼の兵學を辭するや、乙未の三月洛陽鹿ケ谷の洞中に靜養しつゝありし故荒尾東方齋を訪ひ、一夕肝膽を吐露して忽ち舊知の如く、即日より寢食を共にし潛心己を治め人を治むるの學を修む。續て東方齋の發案により一屋を若王山中に賃して延年臺と稱して同志の士數輩を招き、二三先輩も來り合し、玆に愉快なる交情、春の如き一梁山伯は成立しぬ。衣を頒ち食を與にし其の睦しきこと昆季に過ぎ、互に切磋砥勵嘗て人後に落ちず、我は彼が得意、最も此の時にありしを思はずんばあらず。夏過ぎ秋既に半にして略々支那に關する概念を得たるを以て、一旦其の地を蹈破するの必要を感じ、十一月東方齋の斡旋により陸軍省の關係を以て先づ臺灣に航し、基隆、臺北の

間に在る二ケ月、新竹より臺中に至り深く蠻烟瘴霧を披いて生蕃不毛の境を極め、埭里社の別天地に嘯傲することヽ四ケ月、丙申の春五月、返棹東都に引返し、早稻田專門學校英語政治科に入學手續きを爲し、終るや、直に禹域に入つて吳越の野を跋涉し九月歸朝、孜々として政治學の研鑽に從事せり。彼れ早稻田に在るや、鶴卷町に四疊半の小庵をトし名づけて怪庵と云ふ。彼は斯の茅屋を城廓として獨り浮世を外に讀書子となり復た他を顧みず、翌丁酉（明治三十年）夏休暇を利用し、

黑龍之水白頭山、到處山川堪二涉攀一、借問誰能投レ筆去、高吟一劍渡二邊關一、

の句を壁に題し、三尺の孤劍に壯志を托し、朔北露鷺の巢窟を探らんと欲し、七月初旬東都を發し長崎、釜山、元山を經由して烏港より深く東部西比利亞の內地に入り、西はブラゴエチヨンスク府に至り、北はニコライスクに及び、韃靼海峽を渡りて樺太に出で、又轉じてオリガ灣、デカストリー、烏港を過ぎ、ポシエツト、琿春等露淸韓三國の境界を踏査し、日を閱する九旬餘、水陸行程併せて二千八百餘哩、其の佐渡、新潟を經て歸京せしは秋高く馬肥ゆるの候なりき。

旅裝僅かに解けば復た直に讀書子として、螢雪の苦に惟れ日も足らず、同十二月の交より東方の風雲愈々急に、同志相研鑽して他日を期するの必要を感ぜしを以て親朋數輩を語らひ、康南海門下の一秀才をも加へて牛込の榎木街なる舊正雪屋敷の側に一戶を賃し節義相磨し、經綸相策し、優に滿都數萬の輕薄書生に抽んずる所あり、斯くて德孤ならず必ず隣あり、其の奇なる者、僞ならざる者、正なる者、傑なる者、相錯雜して交友漸く加はり、翌戊戌二、三月頃より支那有志の往來漸く繁く、從つて支那の現勢に留意するの念一層を增し、福本日南の歐行に先つて同志深く默契する所あり。茲に五、六先輩を擁して同志の集まるもの四十人餘り、東亞會なるものを組織し、支那革新黨康有爲の徒も多く之に加入す。而して彼れ斡旋少からず、香川怪庵と共に幹事として專ら之に盡し、相互に意氣軒昂、東方問題解決の任は吾黨の双肩に在り、吾と思はん人々は私心を去つて來り合せよと絕叫しぬ。

年の七月夏休暇に際す。彼れ豈に碌々の輩と共に空しく其の貴重なる光陰を過さんや。同志の士にして或は北するあり、南するあり。而して彼は則ち再び禹域に渡りて中原の好山水に豪宕の氣を養ひ兼て支那朝野の志士と議論を上下して後日の快擧に資せんと欲し、破浪一番、上海に渡り、姑蘇臨安の風月に浴し、長江を溯りては金陵紫金山に王氣の鬱乎たるを窺見し、武昌の黃鶴樓頭に蓋世の歌を唱へ、赤壁を過ぎては周郎を弔ひ、潯陽江畔に至つては琵琶の音を偲び、再び滬上に出で、水路烟臺、天津を經て燕京に入り、當時廟堂に翺翔しつゝありし康有爲、張元濟、譯嗣同等と締交する所あり。南海會館裏、語る所は抑も何事ぞ。天下の大計にあらずんば玄妙の哲理のみ、續て一旬の閑日子を得て關山行を思立ち、飽くまで馬を長城の窟に飲ましめ、明陵を弔ひ、西山を覩、覇氣滿々、北京の僑居に歸れば、豈に圖らんや朝局一變、戊戌改變は脚下に起つて西太后の訓政となり、皇帝は幽閉せられ、康以下革新諸士は半ば斬られ半は遁る。是に於てか、在京の二三友人の驥尾に附して此の間に奔走し、梁啓超、王照の二人を拉して太沽に逃れ、我が大島艦に投ぜしめ、茲に一段略を作りて而して彼は歸期已に到れるを以て太沽より便船に搭じ、途次仁川より騎馬京城に入り、倭城臺上より半島朝廷の末路を揣摩し再び仁川に下り火輪一蹴釜山、長崎を經て歸京せしは昨年と同じく秋風蕭々壯心凜たるの好時節なりき。

此次淸國政變に關しては、先輩と共に時の首相隈伯の門を叩いて其の保命に盡力せしめんとせり。是れ時局に適

せるの處置と云ふ可く、而して政變後、支那時局日に切迫し、一道の光明の僅かに暗黑を照しつゝありしもの今や全く望みなくなりぬ、寔に日暮れて途猶ほ遠く、國家を打つて一丸となし之に當るも猶ほ且つ西歐と相驅馳する能はざるの虞あり、苟しくも志を抱いて時艱を救はんと欲する者、其の力を一にせずして可ならんや。是に於て彼れ此機に乘じ諸先輩と謀り、同文、東亞の二會を合同せしめ、玆に尨然たる、而かも實質ある東亞同文會を組織したり、日を經るに從ひ、時勢の急迫と世人の警醒とは漸く同會を信賴し來り、有力の士人多く之に贊し、我が國唯一の民間對清機關となれり。

翌くれば本年七月早稻田三年の研究を終へたれば、彼が所謂先づ東亞を研究して而して後、西歐を研究せんとするの順序よりして西歐に渡るの時機に到來せるを以て、昨年以來聊か計劃する所あり、本年に入り稍ゝ成算あらんとして破れ、更に一兩年の後に待たざる可からざるに至り、小島界裡に在つて俯仰せんよりは禹域の大陸に嘯傲して時機を待つと同時に歐行の準備を爲すに若かずと思惟し、且つ同文會創業の際、一臂を奮ふの最も必要なるを感じたれば諸先輩と役員諸氏の推薦により清國に派遣せらるゝことゝ成り、十月、東都を發して同月十二日上海に着せり。蓋し同志の士村井啓太郎が北京に赴きしを以て、其の後を襲きしなり。

彼が五周年間の行動略ゝ此の如し。是より先き、同年四月の交、彼が日暮里の某寺に宇居せるや、府下有爲の士八十餘名を同寺に會合し懇親を結びたることありき。是れ後日に資せんが爲めにして、同夏の候、五・六の士と謀り東亞倶樂部なるものを設けて、對清時論の中心點たらんとせしも果さゞりき。要するに彼が從來經來りたる閱歷は、先づ其の順序を得たるが如く、勉めて懈らずんば幸に人たるを得んか、只だ其れ歐米の山河を踏破して彼の地の俊髦と一堂に會して議論を上下し、其の國の起仆興敗の跡を究むるにあらずんば、未だ以て大に語るに足らず、彼の歐行は彼をして其の前途に光明を放たしむる所以、區々の小利害に拘はりて大局に處するの經綸を養はざらんか、彼や正に空言徒論の徒のみ、我れ決して之に與せざるなり、往け矣、歐米の天、而して後歸り來つて盡せ東亞興隆の業。

第三　晩春　自明治三十三年至同三十七年　五年間　二十三歳より二十七歳　十八件

一、我が送別會

（明治三十四年四月二十日）

余の此次歐行を企つるや、先輩知友皆贊同の意を表し斡旋訓戒し呉れたるは余の切に感佩する所なり。中には刻下、東亞の危機迫る宜しく此の事件落着を待つて西行するも遲しとせざるなりと云ふ友もありつれど、之は二三子のみにして、百中九十九迄は余の黃吻未だ爲すなきを知り、西歐に航して一段の修養を爲さんことを望めり。而かも余は年少種々の階級と交りを結び居り、先づ比較的交際廣き方なりしかば、諸友の相謀りて我送別の宴を神田金清樓に開き呉るゝや、來會する者七十餘名、役人あり、學者あり、軍人あり、商人あり、政治家あり、新聞記者あり、學生あり、浪人あり、頗る多趣多樣にして、來會者互に未見の士多かりしに見受けたり。當日余は意を用ゐ居

りしを以て毫も醉氣なかりしも、來會者中には歡極つて放歌亂舞し、遂には一騎打を爲すものもありき。

余は一介の書生才疎に力足らざるも、濟々たる多士斯の如く多きを思ひ、衷心壯快に堪へず、此の諸豪と天下に處す、以て四方に號令するに足るの感あらしめたりき。

席定るや、老雄中西正樹氏は二十餘年來、支那大陸の風雪に曝らされたる銅顏を振立て銀の如き白髯を撫しつゝ發起人一同に代りて開會の辭を述べられ、余の簡單なる挨拶終るや、酒は始まり美妓其の間に周旋す。見渡せば天下の豪傑一堂に集まり、彼處此處に蟠居して天下を論ずるあれば、美人を評するあり、絶へて浮華の氣を見ず、暫らくして佐々木照山座の中央に立つて曰く「雅二は灰殼になる心配なし、否な灰殼たるの資格なし、安心して歐洲に放つを得」と云ひ、其の送別の詩を高吟せり。

送二井上君之二海外一

大鵬鼓レ翼宜レ使二凌雲不レ可二抑留一。九萬前程那須三區々抱二杞人憂一。連雀街頭笑二燕雀一。斗酒送レ君金淸樓。人道之子有二靈骨一。豪氣何時發二縱橫一。聞說海外仙洞珊瑚枝々綴二寶珠一。誰投二鐵網一拾二明月一。白浪滔天黃河悉濁流。深淵無二日不レ聽二鮫客愁一。行矣坤輿將レ有レ事。如レ毬天風吹二客舟一。

伊東正基は次に起立してドラ聲を放つて云ふ「西洋は夷狄の邦なり、雅二今夷狄に往く、是れ悲むべきか、將た喜ぶべきか、衆皆な此の會を以て喜ぶべしと云ふ。而かも余は悲しみを以て彼を送らん」と稱へ、酒間有名なる筑前琵琶法師なる橘知定の悲壯淋漓たる彈吟あり、川中島の一曲、人をして肅然色を正さしめ、城山の哀吟は人をして暗然涙を催さしむ。續て依田呑海の劍舞あり、衆之に和し、起つて舞ふあり、衆皆な快を盡して散ぜり。大半散じて後に組打つもありき。醉後の惡戲亦一快なり。

因に言ふ發起人は高田早苗(專門學校)、戸水寬人(東亞研究會)、柏原文太郎 東洋倶樂部)、內田甲(黑龍會)、中西正樹(東亞同文會)、佐藤虎次郎(櫻田會館)、陸實(日本新聞)、松本正純(青年國民黨)。

來會者は根津一、郡司成忠、戸水寬人、三宅雄二郎、福本日南、佐藤虎次郎、小川平吉、中井錦城、箕浦勝人、陸實、大內暢三、岡部二郎等七十餘人。

鄕里の先輩、田健次郎、田邊輝實等諸氏は二十五日偕樂園にて會合送別會を開き吳れたり。見送りにも佐々友房戸水寬人、中西正樹、恒屋盛服等六十餘人あり厚情深く謝せざるべからず。

二、康有爲と馬來半島彼南(ピナン)なる英知事官舍に談ず　五月二十五日

余の康有爲と始めて相見へしは、去る明治三十一年九月、彼が光緒帝の殊遇を蒙り、奔馬空を往くの勢を以て北京に在り、變法自强に熱中せるの時なりき。彼は余が日本にて徐勤等と交りあり其の門生たる羅孝高と同居し居りし等の因緣よりして、余が瀧川海軍大佐(當時中佐)等と彼を南海會館に訪ふや、彼が余に對する言語率直、肺肝を披瀝する所ありき。其の後、彼が政變に遇ひ包胥の哭を學んで我が邦に流寓するや、大隈伯、犬養氏等に依り牛込加賀町に在り、余は彼を慰すること數度なりき。其より彼は一たび米國に航し、更に轉じて新嘉坡に至り遂に面語の機なかりしが、今次歐行に際し、途ピナンに至るや、上岸直に彼をガバノア、クオーターに訪ふ。英兵二十名

晝夜警衛を爲し、容易に人と會せず、而かも余の訪ふや、直に出でて、樓上に招じ久濶を叙し、談正午より夕刻に至り、晩餐を喫し、別るゝに臨み悄然として云ふ、君と我とは交り最も深く、我の志を得ずして貴邦に奔るや、貴邦人我が包胥の哭を笑ふもの多く、さも遺憾の情あるが如しと、且つ云ふ、英政府僕を優遇するに至れり盡くせりと雖も、容易に我が志を成さしむるものに非ず。同文同種の貴邦さへ我に厚からず、豈に多きを英國に望むべけんやと、彼の意見は同文會に報告したり。就て參照すべし。

井上雅二君遠遊匈加利(ハンガリー)道經庇能(ピナン)語レ奮、卽以送別

萬龍轟闘環地球。四海水立動五洲。爭存國種視旗旒、匈牙獨立氣横レ秋。日東志士與同レ憂。萬里遠赴急同仇。横劍長嘯海天樓、兩軍會見壯氣遒。横睨故國涕横流。虎豹守レ關結蛟蛇。不レ能扶救爲吾羞。破浪乘風羨遠遊。三年會見海山上、劃然天地破レ霾幽。

三、以て天下に王たる可し

「智以テ財ヲ啓キ、財以テ衆ヲ啓キ、衆以テ賢ヲ啓ク、賢ノ啓クアル以テ天下ニ王タルベシ」

の句がある。人間學に興味を持つた自分は、次のやうな告白をしてゐる。

人は萬物の靈長である。地球の主人公である。人を離れて事なく、事を離れて人なし。自分は人間と生れ、而も西力の東漸日に急にして、危機一發の東洋に居る。天が此の秋、此の地に生れしめたるもの、偶然ではない。五十年の短い生涯を、如何に經濟的に使用し、天下第一の快擧を地球の上に試む可きか。人間の精魂には、もと限りあり、天下の事、一人一個の克く爲す處ではない。點滴の水も集れば、大海の廣きに至る。卽ち最も多くの人間を指導し、最も最くの人間に必要視せらるゝは、最も大なる人である。自分は如何にして己を知り、如何にして他を知り、如何にして英雄の心を收攬すべきか。如何にして俗人の望を滿足せしむべきか。人間學の必要が此處に存するのである。自分は人間に生れて二十一歳、幾多の英雄俗物と、典籍の間に相見るも、此れは枯骨のみ、亡靈のみ。肝を披き、肘を把つて共に天下の長計を策し、社會の波亂を防ぐは、此れを現代人に俟たざる可からず。人間學の研究、豈に忽諸に附すべけんや。

四、如何なるか是れ無用の人

青年時代には、專ら精神の鍛錬、理想の追求に向つて精進したので、當時の記錄を繙けば無數の題目が浮かんで來る。

文豪ゲーテの言葉を引用して、如何なるか是れ無用の人。「人に命令する能はず、又人に從順なる能はざる人。」と言つて居る。自分はかゝる人間の仲間に入らないことを期待して、此の言葉を日記に書きとめ、後日の戒めとしたのである。

五、時を知れ

當世に生れて、絶大の功を建てんと欲せば、須らく活眼を以て、天下の勢を察し、時の利不利に顧み、勢の可な

る時、利ある場合は、直前向ふ所皆破るべし。時を知らずして、徒らに猪勇する、遂に豪傑の器に非ず、男子七十歳、爲すべき時は十年にして足れり。太田道灌の歌に

「念がずば濡れざらましを旅人の後より晴るゝ野路の村雨」

此のも其の頃の日記の一節である。自分は六十歳を越へて、始めて人生の眞生活に入つたと感じてゐるが、二十代の青年時代にもこんなことを書き止めて居る。三ツ兒の魂百まで、とも申す可きか笑ふに堪へたる次第である。

六、荒尾先生を憶ふ

歐洲留學中には、或は獅子を見て心機を壯にし、或は初雪を郊外に賞しては故郷を偲び、或は學生討論會に出でゝ日本精神を宣揚し、或はダニューブの夕、コーカサスの朝、到る處山川風物に接して、豪快の氣を養つて、興亞の立志實現の準備に精進したることは、思ひ出の種子が多々あるのである。就中、明治三十五年二月十日、ウキーンに於て、陰雨蕭々の夕、東方齋を憶ふて書き止めた一節を茲に露呈して置く。

正に四十三年前の感想である。

墺國陸軍中尉ホフリヒターと、今夏を以て中亞遠征を企て、胸中の韜略を吐いて、牧野公使に計る處あり。公使快諾、此れが遂行に助力せんとのことに、欣然「ラザレツト」の居に歸れば、机上に新著の「日本人」あり、披いて福本誠君の「一代の人物」なる論評を見るに、一代の國士として西郷、大久保、副島、勝を擧げ、一代の政治家として伊藤、大隈を擧げ、而して最後に一代の豪傑として西郷從道、川上操六、山本權兵衛、星亨、荒尾精、頭山滿、櫻井一久を擧ぐ、我れ幸にして伊藤、大隈とも一面識あり、川上、山本、荒尾、頭山、櫻井をも知る。而して再讀三讀して感慨に堪へざるは、荒尾に對する批評なり。福本曰く、

「若シ夫レ志業未ダ伸ビズ、不幸中道ニシテ沒シタル者ニ荒尾アリ。海內ノ健兒、今ニ至ツテ君ヲ憶フテ止マザルモノ、其ノ器ノ尋常ナラザリシヲ知ルニ足ル。吁、臺天ノ訃音達セシヨリ已ニ八年、東方齋ノ墓木、已ニ拱ヲ爲スモ、君ガ日夕、口ニシタル迂直ノ計、尙耳ニ在リ。念フテ此處ニ至レバ、中夜悵々ノ情ニ堪ヘズ」

と。流石は日南氏なり。東方齋を以て未成の豪傑、未成長の英雄とせり。我れ東方齋と知りてより、友人我を以て東方齋に擬すといふ者あり。又、東方齋に似たりといふ者あり。友人の毀譽に連れても、如何に東方齋の感化を受けし事の大なりしかを見る可きなり。爾來幾多知名の士と語るの機ありしも、未だ東方齋の如くに深く我を感激せしめたるものあらず。東方齋が如何に青年に感化を及ぼすの力偉大なりしかを知る可く、その訃報新聞に現ばるゝや、始め之を眞とせず、之を根津先生に正し、之を中西氏に正し、漸く其の然るを知るに及んで、宮坂九郎等と酒をかぶりて痛哭禁ずる能はざりし、今、當時の日記を筐底に探りて披見するに、左の如きものがある。（日記は前掲に付茲には省く）

七、獨帝の青年に對する理想

本年四月獨皇太子の「ボン」大學に入學し給ひし時、帝は太子を伴ふて二十四日同地に幸せられ、壯嚴なる入校式を擧げ賜ひぬ。此の時の青年に述べ賜ひたる演說の一節に云ふ。

爾等ノ前ニハ獨逸帝國アリ、喜ト榮トハ爾等ガ胸ニ滿チ、確固タル決意ハ爾等ノ心ヲ高フセム、獨逸ノタメニ盡セ、將來ハ爾等ヲ待チ、爾等ノ力ヲ賴マン、世界主義ノ夢想ニ耽ル勿レ、偏愛心ニ迷フ勿レ、國家ノ思想ト理想トノ確實ヲ念トセヨ、是レ神ノ名ニヨリテ獨逸ノ得タル所、「ポンフユース」、「ワルテル」ヨリ「ゲーテ」、「シルレル」ニ至ルマデ皆此ノ爲ニ盡セシナリ、彼等ハ全人類ノ光ナルヲ、マタ全人類ニ福ヲ授ケキ、實ニ彼等ハ世界的ナリキ、然レドモ儼然トシテ獨逸的タルヲ失ハザリキ、今ヤ斯ル大人物ノ現出益々急ナリ、爾等斯クアランコトヲ務メヨヤ。

然レドモ、如何ニシテ斯クアルベキヤ、爾等ヲ佐クル者ハ誰ゾ、コレ尊キ一人ニシテ、辱ナクモ吾等ガ罪ヲ負フテ之ヲ清メ玉ヒ、又我等ガ側トシテ世ニ住ヒ玉ヒキ、吾等ガ主キリストハ吾等ニ道義心ヲ植ヘ玉ヒヌ、左レバ爾等ノ血ハ永久ニ清ク、爾等ノ目的ハ永劫ニ壯嚴ナラン、斯クシテ爾等ハ一切ノ誘惑ニ勝チ、猜忌ト虚僞トヨリ離ルベシ、斯クシテ爾等ハ安ラケク

吾曹ハ只神ヲ懼ル、世ニ恐ルベキ物絶ヘテ無シ、

ト歌フヲ得ン、斯クシテ吾等ハ世界中ノ强國トシテ立チ、文明ヲ扶植シ得テ、朕ハ安ラカニ永眠スルヲ得ン、朕若シ斯ルイミジキ國民ガ朕ガ子ノ周圍ニ集ルヲ見バ、コレゾ獨逸帝國ノ萬歲ナリ、爾等斯クアランハ朕ノ疑ハザル所ナリ、玆ニボン大學ノ萬歲ヲ祝ス。

と、式場は歡呼の聲を以て溢れたりと、是れ蓋し帝の青年に對する理想なるべし、帝が英邁にして一瞬一刻も休まざる精神は常に眼を八方に配り、曾て皮膚病學會に列席せし某醫學士より聞くに、帝は此の會に列席せられて皮膚病の講譯ありきと、何等の滑稽ぞ、帝は何事にも意を用ひ、何事にも關はりて國威の發揚に力めらるゝの風、以て見るべし、留意すべきは獨帝の消息なる哉。

八、百獸王

十月十五日

げに獅子は大王なるかな、睡れる獅子は温乎として狃れ易きの風あり、餓たる獅子は一吼百獸の腦を破裂せしむるの概あり、我れ曩きにシエンブルンに遊び、動物園に入りて睡れる獅子を見、今日再び往いて舊知已を其の食時に訪ふ。唸りつつ、飛びつつ鮮血したゝる肉を喰ふ所、餓へたる獅子と云ふべく、其の風堂々として猛氣骨に滿てるも、どことなく王者の氣品あり、彼の虎豹の餘裕なきに似ず、彼の鰐魚の隱鬱なるに似ず、顧みて四方を見れば熊、狼、象、牛、馬、猿、麒麟、狐、狸、虎、豹等千百群を成し、各々其の性格を顯はせり、我れ東京に在るや、讀書倦み來れば上野に走りて虎を睨むを以て一快心の事とし居りしも、竊かに獅子に接せざるを以て恨とせしに、シエンブルンには、

四歲の者一夫婦。二歲の者二夫婦。五ケ月に過ぎざる小供三疋。

都合九疋あり、大に我が心をして壯快ならしむるものあり、群兒の嗷々たる所、一大人の顧盼して百方を號令するに足るもの、人に於て拿破翁を推し、獸に於て我れ此の獅子を推さんかな、而かも檻中、方數尺の間に蟄屈して千里の野に馳驅を恣にする能はざるは、猶ほ拿翁の聖邊列那（セントヘレナ）に囹圄の身たるが若きか、檻中の獅子、我れ亦一掬同情の涙なき能はず、彼等が終年終月欲する所は只だ一團の肉のみ、人間も如何に豪傑なりとて檻中の獅子となりては

最早「ヲシマイ」なり、留意すべきは世の潮流に逆はざる事か、勢を制し勢に乘ぜずんば人間渺たる一疋、到底破天荒の事も出來ぬなり。

九、天長節　十一月四日

正午渡邊無邊子の招待により「ホテル、クランツ」に會食す。集まる者、公使、書記官、武官、名譽領事、石井君と余の七名なり。俠禪斯んな句が出來ましたとて余に示せり。

遊二美水宮一

逸氣當年壓二大空一、浩然橫レ槊立二西風一。覇圖無レ跡秋蕭瑟。落木霜寒美水宮。

維納客舍

龍驤虎擲夢悠々、腸斷多腦川上秋、思殺當年蔑的爾、只今獨有二水東流一。

一昨夜は約四時間餘對談したるが、中々面白く、政權爭奪の實況を說明せられて大に益する所ありたり。後七時より公使館に赴き御眞影を拜し、終つて立食の饗應あり。集者興を助く、會する者意外に多く、渡邊子一行、其の他の旅行者を合せて廿六名、隈氏一人の病氣の爲め出席せざりしのみ、天涯萬里にあり同胞と共に、聖壽の萬歲を祝す、快哉んぞ窮まらん、十一時散じて後、鹽川、渡邊令息、森山海軍大尉と共に某珈琲店に麥酒を傾け古今を論じ、東西を評し、前四時に達す。近來の痛快事。

本日子爵一行匂加利に向つて去る。乃ち送つて火車頭に至り、且つ千冬、鹽川、井に森山の三氏に蕪詩を送る。

今其の一を錄す。

三尺孤劍托レ壯志一、來探中原虎狼地、虎狼之輩何足レ言、客遊君是天下士、卒爾相遇快不レ禁、傾談徹宵自古今、止レ問交際新與レ舊、吐二來肝膽一思二知音一、八千里外甘二飄泊一、雄心落々橫二寥廓一、丈夫須レ先天下憂、丈夫須レ後天下樂、奈何人生有二去留一、浩歌君將レ續二壯游一、別離畢竟不レ用レ悲、願東西遙得二相酬一、

十、初雪　十一月二十八日

此の日初めて雪降り積ること數寸、例年に比して遲き樣子なるも亦一快、下宿の老婆十七年來最愛の飼犬、病に臥せりとて狂氣の如く、醫者を呼ぶやら、涙聲にて駈け來り金を借せと云ふやら、平日は虎の如き聲を放つて下女を叱咤する程の元氣婆なるに左りとは、己の愛する處に偏するも亦人情なるかな。

曩きに〇〇より、日本社約束の如く報を拂はずとて報じ來りしが、今又社長陸氏の信あり、社の經濟不如意にして、約束の月額を支給する能はず、本年は根津氏と相談して約の如くすべければ、來年よりは毎月〇圓なる社則の通りにして呉れ、社員數名を減じて整理する際、獨り貴兄のみに特典をなすわけに參らずと、余は稍々當惑せしを以て同氏に其の旨承知すると同時に、好法を案出されんことを申送りたり。萬里天涯に在り、賴む所は一阿賭物のみ、元來財囊裕かならざるに今此の報あり、天我を苦しめ以て大任を下さしめんとするか、困窮我に於て何かあらん、唯だ爲に研究に多少の無理を生ずるを恨みとなすのみ。呵々。

十一、學生討論會に口演す

講堂に於て、突然余の日本人なるを知り、討論會に於て東方問題を演ぜんことを依頼し、更に昨日、會長の名を以て余を招請し來りしを以て、余は喜んで之を諾し、英文にて草したる「支那問題の概見」なる一篇を懷にして本日午後一時所定の會場に至る。集るもの廿餘名、中には學士連もありしが、多くは法科學生なり、余は當國の例に倣ふて之を徐讀し、ロゼンベルグ氏之を通譯し約四十分にして終へ、其れよりスミード氏の「東方に於ける列國の兵力」を演ずるあり、日露兵力の强弱を論ずるに及んでは、云ふ所多く正鴻を失し居たれば、余は知れる限りに於て之を諸君に報ぜんことを以て答へ置けり、其れより酒を飲み茶を喫し、相互傾談、後七時散會、次回には滿洲案件を論ずることゝせり、會員中には駐日本書記官の子息もあり、皆東方の問題を研究せんと欲するものゝ如く、研究の範圍は、東方問題、パンアメリカン問題等なりと。

十二、明治三十四年の除夜

一　絶

五洲之大有二知音一、蠖屈何傚梁甫吟、凍月霜寒多惱夕、照吾二十五年心。

「ラザレツト」日本婆の處に明治三十四年の除夜を送るもの。

山崎直方　理學士、今村新吉　醫學士、竹內徹　少佐、大塚專一　理學博士、田中松太郎　美術家、石井循二郎

農學士、島村鐵太郎　ドクトル、井上雅二、

の八人、衆晩餐を終りて骨牌將棋抔を弄んで嬉々たり。島村「ドクトル」云ふ。吾れ慷慨を嬉び胸中常に燃ゆるが如く、爲に學業に支障ある尠なからず、和歌を學んで以て聊か其氣を寛ふすと、余乃ち三十四年の唸り終めとして古詩數篇を朗誦し島村は和歌を低唱する少刻、刻十二時を過ぎて新年第一日に入る。依つて衆團坐して又酌み且つ談じ、各々幸福の夢を齎らして床に入る。

顧みれば、本年は平凡の年なりき、一月以來歐行の準備に忙はしく四月末、東京を發して渡歐の途に上り、萬里の鵬程恙なく佛國マルセーユに上陸せるは六月末なりき。爾來當府に在ること六ケ月餘、仲秋に一度、巴幹(バルカン)の風雲を探るの擧ありしのみ。日又日、獨逸語の研究に追はれ而かも未だ熟せず、十二月初めを以て法科大學に入學して より學生諸氏と相知るの機を得、東邦問題研究會員となりしは、聊か平日の抱負を吐露するを得るとして賀せんか他は多く語るに足らず。

語學は第一資格

學資餘裕なくば到底充分に事情に通ずるの機を得難し

吾れ此の二點に於て共に缺ぐる所あり。久しきを持して大に奮勵するにあらずんば、何を以て所思を達するを得ん。日暮れて道猶ほ遠きの感あり。年末に際して一言前途を規す。

十三、明治三十五年一月元旦

夜、公使館の晩餐に赴く、會するもの、二十餘人。

朝比奈知泉、鈴木臺灣法院長其の他二三氏の新に來着するあり。常住諸氏の外此等新客を加ふ大に快。

餐終つて福引の披露をなす。

一等賞　島村ドクトル、「ショテンリング」（維也納の市街）

二等賞　山崎理學士　「天下一等の美人」（鏡）

三等賞　牧野夫人、「羅馬の建物」（フルイ〳〵）

坐中「井上平原君の親友」なる題目を掲げたるものあり。何かと見れば「豚」なりと、此の出題者は山崎君なるが、朝比奈碌堂氏直に解して曰く井上君は支那通なり、支那人と親炙す、故に豚と云ふならん。且つ君は身體肥滿、是れ亦豚と兄弟なる所以と衆皆一笑。

明治卅四年歐洲ウキンナ留學時代の述者

余の題目は、

達磨直傳平原流解熱劑

中には骸骨を包み。且つ書して云ふ。

美骨侫骨、俠骨傲骨皆爲二枯骨一。神武自レ起二千年、億萬心魂碎爲レ煙、美人英雄俱白骨、眞個浮世値三錢。

餘りに物にならざりし爲めか、落第せしも可笑。

共れより「カルタ」取りをなしたるも余の極拙なる爲め、味方の不利を來すこと多く、余は唯一回にして他の豪者に讓る。

花牌をなすや、余、全く之を解せず、而かも衆の誘により之に列せしに、偶然にも僥倖にも余は大勝を傳したり。是れ亦一笑。

前一時、辭して歸館、臥床。

十四、東方齊を想ふ　二月十日陰雨蕭々の夜

墺國陸軍中尉ホフリヒダーと今夏季を以て中亞遠征の計畫を立てんとし、胸中の韜略を吐きて牧野公使に語る所あり、公使快諾、之が遂行に助力せんとの言を得、欣然「ラザレツト」街の僑居に歸れば、机上新着の「日本人」あり披て福本誠君の「一代の人物」なる論を見るに、一代の國士として西郷、大久保、副島、勝を擧げ、一代の政治家として伊藤、大隈を目し、而して最後に一代の豪傑として推す者七、曰く、西郷從道、川上操六、山本權兵衞星亨、荒尾精、頭山滿、櫻井一久、我れ幸にして伊藤、大隈とも一面の識あり、頭山、櫻井二氏も我が最も推服する所、日南氏の言ふ所の如し、而かも再讀三讀して感懷に堪へざるは、荒尾氏に關する一節なり。

若し夫れ、志業未だ伸びず、不幸中道にして沒したる者には、荒尾精あり、海內の健兒今に至り君を思ふて已まざるもの、其の器の尋常ならざりしを見るに足らん、吁、臺天の訃音達せしより旣に八年、東方齋の墓木拱を爲すも、君が日夕口にせし迂直の計尙ほ耳に在り、念ふて一たび此に至れば、中夜悵々の情に堪へず。

流石は日南氏なり。東方齋は眞に未成の豪傑、我の東方齋を知りてより、友人或は我を以て東方齋に擬する者あり、又東方齋に似たりと云ふものあり。友人の毀譽に連れても、如何に我が東方齋の感化を受けし事の大なるかを知るべく、爾來、玆に數年幾多知名の士と相語るの機會ありしも、未だ曾て東京齋の如く深く感化を受けたるはあらず、之れ一つは我が年少（當時二十前後）思想堅固ならざりしに因せんも、又以て東方齋に强有力の引力ありしを知るべく、東方齋の訃報新聞に顯はるゝや、始め以て眞とせず、之を根津氏に正し、之を中西氏に正し、漸く其の然るを知るに及んでは宮坂九郎等と酒を蒙り痛哭するを禁ずる能はざりき。

十五、中央亞細亞、波斯、土耳其方面遠征の計畫　二月十五日

余今夏を以て、中歐、巴幹（バルカン）、土耳其探査の志あり、偶々友人墺國參謀本部出仕將校ホフリヒーター君の八月を期して高加索（コーカサス）、中亞方面へ旅行するに決するあり。余は好機逸すべからずとなし、同行を約し、刀ち一面參謀本部より調査上の囑托を受けん爲め福島少將に委曲其の旨を通じ、又一面每日社の補助を得んため小松原英太郎社長幷に社中二三氏に依賴したり。牧野公使大に贊同せられ、公使よりも福島、伊知地、兩將軍幷に小松原氏へ推薦狀を送り呉れ、隈監督も亦福島少將へ余が爲め斡旋さるゝ所あり、余は其の必ず成功せん事を祈るものなり。ホフリヒター中尉は頭腦頗る明晰精密、我と共に旅行計畫に就て考慮する所あり、本國よりの返信奈何を俟つて更に講ずる所あらんとす。

チツケスのンマツルザ

中央亞細亞探檢に先だち遠者の寓居に於て
ホフヒタ一中尉と中亞の地圖を案ずる所

十六、月世界にても遊ばんか

余の洋行計畫も久しいもので、東京專門學校を得業したら直ちに飛出さうと思ふて、種々奔走したが、人を相手の仕事なれば中々甘くは運ばず、去つて禹域に遊ぶこと一年餘、漸く昨年春（明治四十四年）に至つてどうかこうか、羽が生へたから遠く歐羅巴へと渡つて來た。顧みれば紫髯綠眼の奴等と雜居して「チンプンカン」をやり始めてから、もう一年になるのだが、何の得る所ありしや、薩張り乃公には判らない。

初めは恐ろしいと思ひし白色のメスも今では身振ひする程の美人に見へ、時には御世辭上手にからかうことも出來る樣になつたが、此の外に何の贏ち得る所ぞ、日耳曼（ゼルマン）の森林に自主獨立の源を探りて見てもとんと面白味もなく

匈加利の首都に蒙古の遺族と話して見ても、何も別段親戚呼ばりをする程でもないので、本年夏は同行者あるを幸ひ、中亞の方面を探討して聊か風餐露宿、平生の傲骨を練らんと思ふて居ても、天我を助けず、今の模樣にては蹉跌しそうである。何んとか決行して見たいものじや。

ぐず〳〵と斯の模樣にして寢喰して居ては三年の滯留も誠に得る所尠なからう。其れに近來は少しく頭腦が馬鹿になつて來た樣である。どうか此の關門を速く逃出して天空海濶の天地に逍遙したいものじや。

アハハ……アハハ……。

浮世が面倒臭くなつて來た。孤身飄然、赤松子に從つて月世界にでも出掛けようかしろ。

五月十二日馬關出帆後滿一年の今日、ウキン府の客寓にて誌す。

十七、天下の珍品獨逸詩人ケルネルの文と詩

千八百十二年五月二十日ケルネルが二十二歳の文

一、兒女の情

拜啓　胸襟を開ける友に對してすら、性來何事をも打明け候て隱くし立て致す事を忌み厭ひ候、私は幼時より大小悉く御耳に入れ候父上に對して、何をか包み申すべき、況んや今般御知らせ申上候事は、豚兒の大幸福、大慶事に有之候をや、父上よ、私は吾が碇を下すべき目的物を發見いたし候、この嬉しき情を胸に抱きて父上の御眼を仰ぎ見れば、父上よ私は戀ひ居り候、一人の天つ乙女を愛し居り候と申上ぐることを得る私は、いかに誇りに候ぞや、唯一目その乙女を御覽被下候はば乙女が明眸皓齒、いかに麗しく候かを御感じ被遊候て、私の魅せられしやうに、父上も魅せられ玉ふべく、双つの眼より溶ける樣な春風には私の醉ひし如く、父上も醉ひた玉ふべきや、左なくては吾が幼な心にも父上と私とは同心一體たるべしと夢み候ことの、凡ては雲散霧消致し、覺めし現は苦しき穢なき厭らしき世と相成申候。父上よかの乙女が私を迷はせし如く、また父上をも迷はし申さんことは私の保證する所に有之、その保證こそは卽ちまた私の愛、私の撰擇の誤らざる保證に御座候、若し彼の乙女微つせば、私は私の周圍を圍繞せる大旋渦中に捲き込まれ居りて申候、そは赤面することなく私の白狀し得る處に御座候。子を知るもの親に若くものなしと申す如く、父上はよく〳〵私を知り玉ひ、私の溫情、私の剛毅、私の高想等、凡て御知悉の事と奉察候、樂みは百花と咲き亂れ、喜びは靈香と薰じて、妙なる音樂四方に聞ゆる御園に住せる、私の得意御想見被下度、私が彼の天つ乙女に於ける戀愛は、私をして大衆の中より躍り出でしめ、世の濁れる慾に汚れざる清淨無垢の男兹に一人ありと大聲疾呼せしむる程、私を大膽ならしめ申候、父上よ此の如きは書面に認めて父上に申上ぐべきことに非ざるべきは私も存じ居候、また世間の子たるものが父に向つてかゝる書狀を送りたる例も私の未だ聞かざる所に有之候、父上が乙女に御逢被遊候迄は何事も申上げざるが至當なるべきに、この躍る胸はこの思を友の中なる友たる父上に申さで叶はぬばかり、燃へ狂ひ居り申候へば、憚る處なく御清聽を汚がしたる義に御座候。父上よ私は戀ひ居り候、愛し居り候、長へに戀ひ居り候、無限に愛し居り候、千代八千代まで焦れ居り候、あわれこの思ひ、世のいかなるものにか譬ふべき、父上は能く〳〵私を知り居られ候へ者、私のいかに戀ひいかに愛し居り候

かは御推察の事と奉存候、不思議なる事には、吾が愛する人の面影は母上に生き寫しに御座候、偶然の事ながら父上のためにも、私のためにも嬉しき限りに御座候、唯今にてさえ私の幸福、私の喜悅はかやうに候ものを、やがて父上參られ候て、かの「トニー」を御覽被遊『出來(でか)した倅天晴な花嫁ぢやぞ』と有難き御言葉戴き候節の私の幸福私の喜悅、はた、いかばかりやに候べき、その折にこそは「トニー」も亦父上の御情ある御言葉を蒙り得べく候……これはしたり、言はじもの事まで申上候、父上よこゝまで筆を運び申候も、後は眼に浮び申候あわれこの嬉しき刹那に父上に御目に懸ることを得候はゞ、私は世界と替ゆるも惜しからず候、軈がて父上の御許諾を得候て目出度「トニー」と婚するを得候ばん時は、これ皆偏へに父上の御蔭に候、また善き貴き母上の御蔭に候私は餘りに女々しく相成候まゝこれにて擱筆致候、御機嫌よろしく入らせられ候やう祈上申候、父上は幸ある兒を持たれ候、嗚呼神よ兒は幸なるべきをや。

次で那翁戰爭起るや、蹶然、萬難を排して從軍、身を鋒鏑の間に委せたり、曰く

今や獨逸は起てり、普國の大鵬は青天を負ふて高く昇れり、兩翼を擧げて颱風に搏てり、普國の人心は擧つて大望を抱けり。大望とは何ぞや、唯一の獨逸の自由、少くとも普國の自由是れ也。兒は夙に神國の藝術に渴す、希くは兒をして祖國藝術の徒弟たらしめよ。最も敬愛する兒の父君よ。兒は今や兵士たらんと欲する也。此の地に得たる幸福なる、自由なる、生活の樂園を擧つて之を一擲し去らんと欲する也。何の爲めと問ひ玉ふこと勿れ。兒は之が爲に兒が生命を失ふことあらん。而かも何の惜しむ所ぞ。祖國の自由を、戰つて而して得んが爲に非ずや。之を以て輕卒とのたまう勿れ、傲慢とのたまう勿れ、粗暴とのたまう勿れ、事若し二年前に出でなば兒自らも亦之を粗暴と笑ひ、傲慢と罵り、輕卒と叱したらんやも知るべからず。今は則ち然らざるなり。人生の美はしき花は兒が一身に咲けるは今に非ずや、幸運の衆星は麗はしき光を放つて兒が一身を照せるは今に非ずや、その美はしく麗はしき今に當つて兒を驅つて戰に赴かしむるの情は貴き情也。その樂しきをかしき今に當つて邦家の自由のために人類最高の財產たる自由のためには如何なる高價の犧牲を以てするも高きに失することなき所以を確信せるは強大なる確信也。父君の情を以て論ずれば恐らくは次の如けん、「テオドオル」は戰士たらんよりも猶大なる使命を帶ぶ。彼は戰場以外の戰場に於て戰よりも重且大なる事業を成し得る大丈夫也。彼は戰爭以外の法を以て、人類に對して拂ふべき多大の義務を有すと、然れども父君よ、兒の思ふ所は正に左の如し。邦家の名譽の爲に死し、國民は自由のために一身を獻ずるば、その何人たると問はず、善きに過ぐることなし。否な〳〵世間多くの徒は常に惡きに失するの輩のみ。父君の教導養護の下に練磨し得たる兒が精神にして、若し尋常以上の呼吸ありとせば、そもいつの世、いつの時に今日を外して、その精神を發揮し得べき、大なる時代は大なる人を要す。而して國民の大洪水とも謂つべき今日に當つて、國民を救ふべき一大岩礁たらんは兒が心竊かに期する所なり。兒は出でざるべからず。出でて而して大颱風大暴雨に向つて我勇敢なる胸を試みざるべからざるなり。空しく樂園に潛んで戰勝の同胞に向つて唯々、熱心に萬歲を三呼する如きは兒の能く堪ゆる所に非ざる也。自ら勇と力とを懷きながら嬉劇場裡の樂屋に隱れて見すぼらしき嬉劇を草するは兒の能く堪ゆる所に非る也、悲壯劇の大活劇場は夙に兒が容喙するを待ちつゝあるに非ずや、父君は胸裡常に不安を感じ賜ひ母君は常に泣き王ふべし。こは兒の夙に知る所也。在天の神靈よ、願くは我が父母を慰め玉へ。嗚呼大義親を滅す、兒は實に父の苦衷と母の涕泣とを顧慮するの遑なき也。生れてより

今日に至る迄、兒は兒の幸運なるを誇れり。如今猶且然り、嗚呼兒は幸運兒なりき。また幸運兒なり、兒今や生命を賭して出でんとす。生命を賭するは易々たるのみ。唯々兒が生命は愛情の花冠を以て飾られ、友誼の花冠を以て飾られ、幸福祝喜の花環を以て飾られたるを思ひ玉ひ、而して父君をして不安の念なからしめ、母君をして涕泣せしめざらんがためには、兒が鐵腸も軟化すべきものならんを、奮然蹶起して遂に戰の人たらんとする兒が覺悟の動かすべからざるを思ひ玉はゞ、兒が生命の高價を以てするも猶且足らざるを覺ゆる邦家の一大難を諒し玉ふべし。

千八百十二年三月十日　　テオドウル

父　上　樣

此書翰のみにても、ケルネルは不朽の名を荷ふに足る。前後相對して眞に彼が一生は短命ながら、花も實もあり世の瞶々者、道學者流を慙死せしむるの價値ありと云ふべし。

十八、磯谷小介を悼む　十月二十八日京城に於て

本日東都よりの雁音は、小介磯谷君變死の報を齎せり。果して眞乎眞なるべし。生は寄なり、死は歸なり、天命の定ある所、竟に人力の如何ともする能はざる所なりと雖も、想ふて疇昔の歡語に到り、追ふて疇昔の温容に及べば、哀悼痛恨、轉た涕淚の滂沱たるを禁ずる能はざるなり。噫嘻傷しい哉。哀しい哉。

想ふに二十八年乙未の夏、君と篠山城下に始めて相識りしより、春雨秋風茲に十年出身其の道を異にし行藏其の時を同ふせず、加ふるに我は多く海外に放浪して在京の日稀に、君と相遇ふの機に乏しかりしと雖も、一片相思の情は天涯地角曾て相渝らず、文章に口頭に機あらば則ち提撕し戒飭して、毫も掩ふ所なく、君亦我に傾倒頗る深かりしが如く、偶々相遇ふ毎に君が識見漸く高く、君が性格漸く成りつゝあるを感得し、心竊かに他日の大成を期したりき。

最近三年、我は遠く歐洲に在り、關山萬里、消息相通ずる稀なりしに、昨秋歸朝して駿臺に假寓するや、君一日我を訪ひ、我は忙中の身を一擲し、君を伴ふて不忍池畔の秋色を賞し南洲像後の一旗亭に上り、房總の平野を下瞰して置酒興會來往を談じ斯道を論じたりしに、君は舊に依つて聲色共に勵しく凜として生氣あり、好箇海國男子の眞骨頭を思はしめたりき。君は其の翌日を以て乘船すべしと云ふに、更に相携へて歸寓把手傾談深更に及びたりしが、思へば最後の別れとなりしなり。今夏、要務を帶んで乘槎歸朝の途次、君の學友某氏より、君が神戸の寓居を聞知したるも、旅中匆々遂に相遇ふの機なかりき。冥想すれば音容恍として猶ほ眼前に在るが如く、而かも君や既に白玉樓中の人たり。

嗚呼傷しい哉、哀しい哉。

今や帝國は振古の大難に遭遇し、闔國の物資を提供し、闔國の生血を傾倒して暴露膺懲に從ひつゝあり、戰局の果して何の日にか克く終結すべきや、豫トすべからざるも、戰後の日本は大活動の日本なり。大活動の日本たらざるべからず。高材逸足の士、智辯有力の徒は須らく滿腔の心血を濺いで今より、各其の志す所に忠に、其の職とする所に力め國本を培養し、國光を宣揚し、盛んに經綸を宇內に行ふを期せざるべからず。斯の大有爲の會に際し、吾人同志を思ふ轉た切なるの時、君は忽焉我を棄てゝ逝けり、之を傷み、之を哀しむもの豈に一片兒女の情ならん

明治卅六年夏歐洲より歸朝芝紅葉館に於て　前列右より犬養毅氏、
榎本武揚子爵、一人おいて長岡護美子爵、孔子の遠裔衍聖公、
後列右より三人目述者、島津伯爵、岸田吟香翁

や。

駄句以て君を弔ふ。

落月斷雲欲二暮秋一、
訃音斯夕不レ禁レ愁。
惜君未了十年志。
拋去崎陽港外舟。

第二篇　壯年時代

自明治卅八年、至昭和十年　卅二年間　二十八歳より五十九歳

百七十八件

||人生の夏||

第一首　夏　自明治三十八年至同四十三年　七年間　二十八歳より三十四歳　二十二件

一、男子三十未平國、後世誰稱大丈夫

明治三十九年正月元旦の試筆として、左の句がある。

一、小處不二滲漏一、暗中不二欺隱一、末路不二怠荒一、纔是個眞英雄。

二、白頭山石磨レ刀盡、鴨綠江水飲レ馬無。男子三十未レ平レ國、後世誰稱二大丈夫一。

本年は正に三十、而立の歳となり、而して平生の宿志は、毫も酬ゆる所なく、年少、天下第一等の人たらんと期せしもの、碌々今日の境遇に居る。良心に對して慚愧に堪えざるなり。而も前途は猶遠し、今日に及んで疇昔の志を以て、切磋卓勵、自己を磨き、才識を進め、德器を成さば、自ら事の成らざるを憂へず、本年初めより面目を改めて、大奮勵する所あるを期す。

一、時間を惜しむ。

一、友を撰ぶ。

一、身心を高潔にして酒色を慎む可し。

一、身、官途に在るを忘るゝ勿れ。

一、勤儉以て精神を養ひ、浪費を嚴禁す。

一、信實なれ寛大なれ。

此れに就て思ひ起すのは、昨年九月蒙古のトルハト王殿下が、京城を經て北京に赴かれることゝなり。其の旨、釜山、山岡稅關長の電報に接したので、早速成歡の驛に迎へたが、舊友の照山佐々木安五郎君が隨行してゐた。王は二十四歳の青年であつたが、颯爽たる風骨の持主で、ピートル大帝の壯時を以て自ら擬し、外蒙古を堅壘として以てロシアの南下を防ぎ、東方大局の和平を維持せんとするの志を抱いて居られた。其處で同じく朝鮮在留中の內田良平、佐藤寛、伊東祐侃と自分の四名が發起人となつて、殿下の歡迎會を開き、大小の有志會するもの四十餘名大に飲み且つ談じて、愉快であつたが、自分は更に佐々木、內田の二人を拉し、殿下と共に二次會を他の旗亭に試み、歡を盡くして夜半相別れたが、殿下は翌二十九日午後十時、御出發遊はされた。其の際本標題の南將軍の詩の轉結二句『男子三十未〻平〻國、後世誰稱大丈夫』を書いて頂いた。墨痕淋漓として、眞に躍動して居るやうな健筆で、其の後、此れを壁間に揭けて朝夕眺め樂しんだ。そこで、結末に『他年一日、蒙古に遊ぶあらば、大同の壯擧を策し、外藩を固めてロシアの南進を防ぐ可きこと』を附記してある。

二、責任の人となる

三十八年九月三日夜窓外蕭々の雨を聽きつゝ

海軍の學窓を辭し、京都に東京に將た歐洲に螢雪の苦を積み、歐亞兩大陸を普く蹈破し、見聞を廣め異日の大用に資せんと腐心すること十有一年、我は本年九月一日を以て財政補佐官として韓國經營者の一人となれり。經營の根本にして最難件たる財政の整理振作の責任者の一員となれり。

或る友は我に江湖の氣多き、到底一吏僚たるに堪へずとして我の任官に不同意を唱ふるものあり。然れ共我が先輩及び友人の多くは我が多年の有志家的位地より一轉して、責任ある實行的境遇に轉じたるを祝し吳るゝなり。我れ自身に於ては昨春渡韓以來の希望にして批評界より去つて實行者の仲間に入るの前送の爲め尤も必要なるを信ずるを以て、斷然薄書堆裡の苦を忍んで他日の雄飛を期するに決心せり。

故に昨春以來、同情ある我が先輩、往々にして我を滿洲に派せんとし、我を北京に遣らんとて忠告せられしも、我は第一着に韓を經營し、第二に支那に入らん決心にて之を辭したり。

冥想すれば我の使命は日本帝國發展の先導者となり、大陸經略の勇者として支那大陸の死命を制するの位地に立たざるべからず。我の任は重且つ大なり、我れ一日も支那大陸を忘れたるにはあらず、唯だ帝國發展の順序として又日露戰爭の原因よりして韓の經營を全ふし、韓の人文を進捗して我帝國の根據となすは尤も眼前の急なるを以て我は今後第一期の經營成り我の根底相立つ迄は韓に在るに決せり。其より進むべきは固より支那に在り。中亞に在り。

韓に在り責任の地位に在る間、我の身邊と精神は最も周密なる注意と忍耐を要す。

公平無私なれ。

京畿道府尹郡守會議

勤勉方正なれ。

常に大處に着眼して、俗吏の風に染むる勿れ。

我は天下第一等の人格たるべきを常に念頭に置け。

同僚に親切なれ、長官に敬意を表せよ。

時に年二十九歳。

三、京畿道管内地方官會議

一、明治三十九年五月一日より三日に至る三日間觀察府にて開會し、訓示及び諮問事項の草案說明共に余之に任ず。

一、列席者、觀察使李根洪以下三府尹二十九郡守、計三十二名殘餘の六名は病氣其の他事故の爲め缺席せり

四、眞正の友　一月十日夜識之

我は眞正の友を要す。誠實なる友を要す。如何なる友

が是れ眞正なる友ぞ

我が心を讀み得る友、我が身を重んずる友。

我が胸中を吐露し、我が祕密を托して安心なる友。

我を照し我を導く賢明なる友、我が非運を見て去らず、我が不幸を見て棄てざる忠誠なる友、

信任すべき友、堅忍なる友、

永久持續すべき友。

嗚呼是れ實に眞正、誠實なる友なり、此の如き友ある者は貧苦をも悲まず、患難をも恐れず、財寶を失ふも亦顧みず、蓋し彼こそ天下の至寶なればなり。

「萬人の友は何人の友にも非ず」とは味ふ可き言なり、八方美人主義の者は信任すべきの友に非ず。

一心可ニ以交ニ萬友一、二心不レ可ニ以交ニ一友一。

五、伊藤博文公と語る　明治三十九年八月六日識す

伊藤公と始めて相見しは明治三十一年夏、北淸を漫遊し天津日本領事館に於て公の歡迎會を開くや、余も漫遊者の一員として招待せられたる時に在りき。當時公は在留官民に擁せられ、演說を强ひらるゝや傍の大岡育造氏を顧み、演說の上手は此男なり僕は辭せんと云ひ、又在留民某が閣下は京城にて官妓を聘せられたるやに聞けるも此を去つて北京に入れば官妓以上の美目巧笑多し。御用心あれと戲るゝや、公はイヤ昨夜も官妓を夢みたりとて呵々大

笑せられたり。爾來稠座の間に於て公を見ゆること數回、本春三月統監府開廳式にも公が統監服を纏ふて立食後、美人を左右に擁し大杯を手にし、床机に踞して傲然美人の劍舞を見物せるを見たりしも、親しく相對して語を交へだるゝとなかりしが、先月樺山伯爵來韓し一度統監に謁して地方情況等を詳語すべしとの慫慂もあり且つ木内總長も會見を薦められしかば、昨五日後五時過ぎ、獨り驟雨を犯して公を南山麓の官邸に訪へり。

刺を通ずれば給仕の「上れ」との語に應接室に通れば公は既に在り、長椅子に倚り一揖坐を命ぜり。其の態度極めて傲然、余を小兒視するが如く、余は恭しく遠くの椅子に就く、公は先づ問ふに地方の財務情況を以てし、余は其の概要と宮内府と政府の財務關係、民智の程度等を述べ又二、三の注意事項を披瀝して其の留心を望めり。相語る二十分間、此間公は多く聞き、余は多く語れり。是れ伯爵の添書に余に就て地方事情を聞知せられよとありし爲めなるべし。

公に接するものゝ言に據れば、最初は多く語らざるを可とし、二回、三回に至つて漸くに其の所見を吐露し且つ謹んで公の高説を敬聽するに力むべしと、余の昨日の會見は尋常一樣の會談に過ぎず、當に第二次以下を待つて所見の一端を具陳するの機に到達すべし。要するに余の見たる公は態度極めて鷹揚に余の談の要點に至る毎に力ある語氣にて「ヨシ、ヨシ」と云ひ、如何にも百も承知と云ふの風あり。

天下に於て一番の物知りとし、一番の人物と自信せるの風見ゆるも、自己の虚榮心と包容の量を示さんとてか、衆智を集むるに吝ならざるが如し。

聞く公、近來極めて神經過敏となり時々意に滿たざるあれば則ち激怒して往々其の嬖親の士の頭上に手を加ふる事ありと、壯心轉た凛たるが如きも、竟に老境に入りたるは掩ふべからざるなり。此人に多大の望を屬するは屬する者の不明なるべし。

六、余の知れる重なる日本人士（現在）明治三十九年八月二十二日夜誌す

大隈重信伯、明治三十三年以來多少の相談も出來る、伊藤博文公、三十一年以來。

第一、多少相談も出來る位に相識れるもの（内には別懇の人も在り）

大隈重信、犬養毅、大石正巳、渡邊國武、青木周藏、大浦兼武、高田早苗、田健次郎、田邊輝實、福島安正、根津一、樺山資紀、岡部長職、○牧野伸顯、戸水寛人、箕浦勝人、平岡浩太郎、陸實、櫻井一久、木内重四郎、長森藤吉郎、本鄕房太郎、松石安治、加藤增雄、野津鎭武、林權助、小松謙次郎、關宗喜。

第二、相識るも交未だ淺くして懇親と云ふに至らざるもの。

伊藤博文、鶴原定吉、田邊貞吉、平賀義美、板垣退助、○岡喜七郎、丸山重俊、荻原守一、稻垣滿次郎、池邊吉太郎、○頭山滿、梅謙二郎、本田幸介、山座圓二郎、○松方幸次郎、中橋德五郎。

第三、交、稍深き友人及深かりし友人。

○山川端夫、白岩龍平、○鈴木貫太郎、○菊池謙讓、○大内暢三、○田鍋安之助、中西正樹、田中耕太郎、○夏秋龜一、○權藤四郎介、○岩邊季貫。

第四、交最も深き友人、及深かりし友人。

○村井啓太郎、渡邊千冬、○藤江逸志、○木村貫一、○小幡酉吉、○宮坂九郎、木塚常三。

第五、普通に相知れる知人。

○增田義一、○本多熊太郎、加藤本四郎、有吉明、○松井茂、○俵孫一、三浦彌五郎、○兒玉秀雄、金山尙志、頭本元貞、○森山慶三郎、田中唯一郎、小川平吉、園城寺淸、菊地謙二郎、○幣原坦、吉田增次郎、○磯貝正吉武藤信義、伊集院俊、內藤虎次郎、白鳥庫吉、○中村久四郎、阿久津三郎、國分象太郎、水野幸吉、赤塚正助、畑良太郎、西源二郎、吉田作彌、松村貞雄、三增久米吉、若松兎三郎、瀧川具和、竹內平太郎、松波秀實、○加茂嚴雄、船橋善彌、伊藤萬太郎、○高木草寬、○石井淳二郎、○今村新吉、森波繁、隈德三、佐々木一郎、倉田利七、松本雋、落合豐三郎、小澤德平、宇都宮太郎、齋藤力三郎、○鹽川三四郎、井上辰九郎、○小山田淑助、森　茂、森岡眞、○井上敬次郎、山口熊野、日向輝武、小美田利義、杉山茂丸、峰岸繁太郎、伊東乙次郎、栗田直八郎、川村正彥、○川島浪速、小村俊三郎、○古澤北溟、○河野通久郎、○上田僊太郎、奧田貞次郎、加來榮太郎、和田常市、中村再造、中井喜太郎、中野二郎、山縣勇三郎、大原義剛、松岡長康、江藤哲藏、松元剛吉、濱口擔、○河合鉦太郎、浮田和民、兼松習吉、松村純一、野口興國、○小田切延壽、大沼龍太郎、齋藤恒四郎、○菅沼周二郎、齋藤七五郎、渡邊勘十郎、堀貞、田邊勉吉、○尾崎勇次郎、小橋一太、國友重章、○佐々木四方志、久芳直介、鈴木穆、不破重兼、○佐藤藤佐、山田周藏、石原半右衞門、箕原貞明、井戶川辰三、渡邊千春、○篠田治策、丸山長渡、橫田千之助、○荻田悅造、望月銀吾、本野英一郎。

（○印の人々は時を距る三十八年、昭和十八年十二月にて健在の方々）

七、男子の出處進退

明治三十九年十一月六日附で、『男子の出處進退』と題して、次の如きものが出て居るが、立志の當初より、自己の出處進退を苟くもしなかつた自分の氣持が、一種の精神的切斷面を示して、よく露呈されて居る。曰く、

十月四日飛電あり、光州府在勤を命ずるに付て、可成速に出發す可しと。管稅官制公布せられ、顧問支部擴張の結果、今回の大更迭となりたるなり。

始め此の官制の發布せらるゝや、財務官の權限縮少し、內地の稅務官の如きものとならざるやに疑を存し、果して此の如くなれば、我は任官當初の趣旨と、從來の權限が頗る廣大なりしに鑑みて、此の際寧ろ勇退するを男子の本領としたりしを以て、六日上京し其の眞相を確めんと欲せしも、偶々目賀田顧問は平壤に赴きて在らず、統監府の友人先輩は、今回の改正を以て自ら權限の縮少なりと感じ、且中央政府と遠く離るゝを、余に取つて不得策なりとし、水原留任につき多大の同情を表せらるゝあり、本田博士（幸介氏）、町田學士（唉吉氏）、俵書記官（孫一氏）の三氏は切に余に中央に留まる可しと言ひ、木內總長（重四郎氏）に謀りしに、木內氏は『目賀田氏に面會して、此等の權限に就て問正し、又、君の中央に在るは同氏の爲めにも利益なる旨を談ずべし』との好意的挨拶あり。斯くて一方に於て久芳（直介氏）、鈴木（穆氏）等諸氏に會ひ、其の眞相を探聞するに、決して左る權限の縮少にあらず、寧ろ從來より一步を進めたるものなりとの言あり、且つ全南は、稅額に於て第一位を占め、將來施設すべき事多く、新に財源を發見して、開發經營すべき餘地多し、「タツクス・コレクター」（收稅官）に非ずして、「タツクス・

メーカー」（稅源涵養官）なりとのこと、斯の言寔に理あり。我が心旣に快く赴任と決す。依つて十一日、更に上京して、先づ木內氏を訪ふに、氏曰く「目賀田氏と兩回會見し、君の中央に止まるは、同氏自身の爲めにも利益なることを忠言せしに、此れに就て氏は心に期する處あり。永く井上を彼の地に留めざるべし。且全南は頗る手腕を要するの地なるに付、暫く井上の苦心を欲するなり。君よりも井上の赴任を勸誘し呉れよとの事なり。此れを以て今回、快く赴任せば、明春にもならば自ら中央に歸る機會あるべく、目賀田氏も棄て置かざる可し」と、續いて目賀田氏を訪ふて、權限の奈何、改正の精神等を聞くに、氏は語ること娓々、充分手腕を振ふの餘地あるべきを言ひ「水原は餘りに樂なり、君をして今少しく苦しましめん」と、此等の言、頗る味あり。而して一方理事廳の新設も地方官々制の改正に基くものにして、分掌規定に施政改善に關する事務を掌るとあるは、文書課長の如き連絡に當るものなりとの事なるを以て、旁余は辭職の必要を認めず、又其の理由を發見せず、中央を去るは聊か不利益なるが如きも、形勢は更に進轉すべく、暫く全南の富源に於て、快手腕を揮ふも亦可なるを思ひ、乃ち赴任に決せり。此れは士節に於て當に然る可き所なるを信ず。

八、明治三十九年歲暮の感

本年は波瀾なき平凡な歲なりき。二月京城を去つて水原に居り、京畿の財務を擔當する八ケ月、多少の痕跡を留めて南韓未開の鄕に入る。公事總て創痍に屬して、精勵事に當るも、未だ此れが端緖を見るなくして、歲玆に暮る。顧みて年中行事を想へば多少の感なくんばあらず。

一、公生涯としては一日の缺勤なく、自己の心事公明、天地に愧づるなし、唯職務に熱中するの餘、往々にして寬容の量に缺くる所ありして免れず、可戒也。

一、本年に入り木內重四郎、峰岸繁太郎等二三快心の友を得、京仁の同人亦交情舊に依り濃かなり。人に對して多少の德を施したるも、固より以て自ら矜すべきにあらず。只人に屈して憐を乞ふことなかりしは、竊かに歲暮の快感を覺ゆる所なり。

一、官吏として下を馭し上に對する天空海濶を旨とするは、余の本領なるも、此の正道以外に、多少人を見て法を說かざるべからず。平生の短刀直入的性情は、聊か此の點に於て包容の量を缺くの嫌なからず。以後戒むべし。唯統監にも進言の道を得、所屬長官も、漸く我を知るに至りたるべく、同僚とは固より一人として疎隔の痕なし、水原を去るに際し、日韓官民の至情、我の留任を望み、總代の留任請願となり、觀察使の留任報告となりしが如きは些細の事、固より以て喜ぶに足らざるも、一片の至誠、多少上下の解する所となりしの徵として、意稍々安んずる所なくんばあらず。斯の心、神明に誓ひ、正廉、勤勉、氣力、包容、膽略、經綸の諸德と識見を養ひ、他日雄飛の地步を作らざるべからず。

一、由來浪費の風あり。敢て酒色に浪費するにあらざるも、客を好み、客に散じ、囊中常に空乏し、歲末に際し不足額數百金あり。此等の多くは自己の虛榮心と克己の乏しきに基づくものにして、能く散ずべきは散じ、能く儉なる可きに能く儉なるの道に於て、稍々缺くる所あり。此の點に關しては更に大なる決心を以て、節儉の實を擧ぐべし。

一、寸陰を惜む者は千古を凌鑠するの志あるべし。天下に事を爲さんとす寸陰を忽にすべからず。此の點に於て更に大に訓戒して、時間を最も經濟的に使ふことを心掛けざるべからず。敢て讀書と云はず、敢て談話と云はず、取て遊行と云はざるなり。要は森羅萬象、皆我が學問に資し、造次顚沛にも自己を啓發するに留意せざるべからざるなり。

一、一年を回想し、双親舊に依つて健に、阿兄、阿姉亦異事なく、妻は渡歐勉學の手段を得、阿弟戰功に依り殊勳に列し功五級に叙せられたるは一家の慶事たるを失はざるも、父母年老ひ、遠く離れて膝下に孝養を盡くす能はざるは、尤も遺憾とする處にして、明年以後に於て大に此の缺を補はん事を期す。

一、十年來多少の庇蔭を受けたる平岡浩太郎氏を失ひたるは、心中哀悼に堪へざるところ、亦長岡子爵、佐々友房、神鞭知常諸先輩の長逝は、余の大に悶々の情ある所なり。回顧せば荒尾東方齋逝きてより玆に十年、天下幾變遷して名士の物故年に月に多し。後進の余も玆に三十の馬齡を加へて、漸く世海の風波に乘ぜんとす。此身容易にあらざるなり。

明治三十九年十二月三十一日、夜半十二時、全南無等山下に於て認む。

九、明治四十年元旦

明治四十年元旦には、次のやうな記事が認められて居る。

歐洲より歸朝してより既に四回の元旦を迎へ、明治は四十年となり、韓國の經營も漸く其の緒に就かんとして、我々の大に研究すべき題目が多い。中でも保護國、植民地の經營は最も政治家として注意すべく、支那の前途も亦容易ではない。そこで、本年の夏は賜暇を得て、約三ケ月の豫定で支那、安南、シヤム、海峽殖民地方面を視察に決し、準備にとりかゝらねばならない。準備の第一は調査資料の蒐集であり、第二は旅費の調達である。

後の日記を見ると、旅費の調達は出來たが、調査資料の蒐集は、公務多忙の爲め、容易ではないと書いてある。

自分は歲末には過去を顧み、元旦には將來を思つて自ら戒め、向上の一路を辿るを習慣として來たつた者であるが、此れも其の年の計畫を豫め書いたものであらう。然し此の年は遂に長期の休暇を得る能はず、乃ち海外旅行を止めて內地へ歸り、西園寺公、大隈伯其の他の先輩友人と會同し、各種團體、學校や時事、萬朝等の乞に應じて韓國施政改善の實際を披瀝し、又講演會、座談會等によつても朝野の啓蒙に資したのである。

其の年の內地歸省の記の末段に、「斯くて風雲江湖兩樣の氣を吞吐し、意氣浩然たり、四十七日間滯在中、散ずる所千餘金、負擔重し」

と記しているのも今から顧みて笑草である。

其の年は、斯くして欝を散じたのであるが、翌四十一年夏には一ケ月の休暇を得、曾禰副統監より慶親王其の他への贈物を携へて、北京にて福島將軍と落合ひ、其れから共に陸路、漢口に出で長江一帶を調査した事も思ひ出すのである。

十、無等山に登る　明治三十九年十一月十八日

此の日一天快晴にして秋高白露の好季節、尤も郊外の遊に適せり。乃ち水口、山室、藤瀬、井筒諸氏を誘ふて無等山の遊を爲せり。未明結束して出で山麓、證心寺に到る一里半、之より本嶽に入る。山は海拔約四千尺、全南第一の高山たり。嶺に達する約二里、四時間にして達す。

山巔に巨巖怪石、屏風の如くに駢立し、立つて四望すれば遠岳近峰兒孫の如く群列し、脚下一帶の平野は遠く羅州に連りて所謂湖南の富源を爲す。遠望俯瞰の快云ふべかからず。衆團坐し、玆に觴を開きて一酌し頻りに健啖すれば登攀の苦も何時しか消へて跡なく、意氣豪然天下を小とするの氣、禁ずべからざるを覺ゆ。

山上に逍遙約二時間にして歸途に就き、途に火を點して枯草を焚くに燎火延ひて、方一里餘に及び、山又山を嘗め盡して壯觀を極め、薄暮歸府する頃、猶ぼ炎焰天を焦すを見たり。

此の遊、上下約七里、前八時に發し後六時に歸る亦一日の壯遊なり。

十一、滿三十歳の我

明治四十年二月の日記に「滿三十歳の我」と題して、左の如く認めている。

戸籍面の生年月日は、明治九年六月なるも、此れ兵學校受驗の必要上、八ケ月を早生せしめたるものにして、實は十二年二月なるを以て、本月に於て滿三十歳卽ち所謂而立の年に達せしなり。而して顧みて今の我は如何、韓國聘傭の一財務官として、財政顧問に附屬し、一道三十二郡の財政を指導監督し、月俸二百二十圓舍宅料三十五圓の薄給に衣食する一微官のみ、志徒に大にして才德俱に足らず。韓國經營の至難事業は財政整理に在り。刻下の我が職務は收稅にあらずして、稅源涵養にあり、租稅製造にあり、卽ち農工銀行を監督し、手形組合を監理し、地方稅を建設する、皆我が分內の事にして、無識なる韓官と無智なる韓民に對して、國本培養、國家機關の運轉を說明し實行せしむるの任に當り、豫て帝國が韓國を保護するの本旨に副ひ、帝國の利權を確立し、帝國の大陸に於ける地步を確定するに在るを以て、聊か以て自ら寬うするに足るものあるも、我の天分を發揮するは更に好適の地位と十年の歲月を待たざるべからず。天は自ら助くる者を助く。我れ今、僻陬に蟠居し、四圍の寥圍氣の朦朧たるに伴ひ勤學力行を懈るあらば、遂に爲すなきに終らんことを恐る。宜しく公務に奮勵し、其の責任を完了すると同時に、朝夕の寸閑を以て其の志す處の書を讀み、必要の素養を重ねて、大に潛勢力を蓄へ、他が熱鬧界裡に擾々たるの間に、靜に他日大雄飛の地步を今日に築く可し。我の力む可き事左の如し。

一、衍氣を根絕せよ、天眞なれ。
一、成功を急ぐな、時を待て。
一、大度なれ、寬容なれ。
一、自らを信ぜよ、人を恃む勿れ。
一、益々俠心を養ふ可し。
一、時務を識ると共に品性を養へ。
一、讀書、靜思の日課を怠る勿れ。
一、常に天下第一等の人たるを期せよ、天下第一等の官たるを期する勿れ。

興亞の基地朝鮮にて（右上）宮内府書記官時代禮服の述者　（左上）同じく官舍の後庭にて馬上の述者
（下）三十二年後の最近京城朝鮮神宮參拜の述者

十二、歐行の計畫

明治四十二年一月二十八日附で、近く歐行の計畫を建てゝ居る。

愚妻本秋を以て米國より英國に航し、明春、佛、獨、露を經由して歸朝の筈に付き、此れを迎へん爲めと、一は在韓六ケ年蠢爾たる小天地に踢蹐したる隋氣とを一掃し、六年振りに歐洲新鋭の大氣を呑吐して自己の發展に資せん爲めに、明春、四、五月の交を以て韓京を辭し、三ケ月の豫定を以て賜暇を得、露國より獨逸に入り、佛英をも一瞥して更に西伯利亞線に依り歸韓するの計畫を立つ。今後一ケ年間は其の計畫に依つて勉勵すべき事を誓ふ。

一、東亞經略は我が志なり。

最後に「天下第一等の人たるを期せよ、第一等の官たるを期する勿れ」と言ひ、「東亞經略は我が志なり」とあることは、三つ兒の魂百までと申さうか、少年時代に興亞の夢を見てゐた自分が、人生の夏へ入つても相變らず同じ信念を記して、自ら省みたのであらう。

我れ年齒既に三十有二、碌々として燕雀の群に伍するは恥づべきの至りなり。非常の事を成す。非常の力なかるべからず。日々に新ならん哉。

更に二月二十日附を以て、次のやうに附け加へてゐる。

一月二十八日を以て、別項歐行の計畫を立て、此れが實行を心に誓ひたるも、飜つて目下の境遇と當國經營の前途に鑑み、更に百尺竿頭一歩を進め、先づ歐洲に渡り、日進月歩の形勢を看取したる後、亞細亞及び亞弗利加の各保護國各屬領地、各植民地を一巡して當來の經緯に資せん爲め、約六ケ月の日子を費すに決し、此れが計畫に就きて一半の資力を某所に計り、略其の內諾を經たり。依つて此れより此れが準備として、語學の練習と視察の下研究をなす事に決し、直に此れが手筈を爲せり。

果して六ケ月以上の休暇を得べきや如何は、其の時の境遇奈何に依り決すべき問題なるも、現狀の儘ならんか。或は在官の儘、統監府其の他の囑託としてこれに當るを可とすべく、要は歸來其の抱負を實施し得るの地位に當るを必要とす。人間、希望なかるべからず。希望なき所に生命なし、余は今後一週年、此の希望を抱いて日夕奮勵する所あらんとす。記して以て後日の證となす。

斯の如く最初、三ケ月の豫定のものが六ケ月となり、其の準備として視察に要する調査研究や英語の練習を始めたのであつたが、此れが更に展開して、翌四十三年初官を辭して、統監府韓國側並に我が中央政府の囑託として一ケ年に亘り、廣く第二回世界週遊を試みる事となつたので、拙著「四大陸遊記」は此の行を記念してゐる。而して其の結果南亞細亞の經營に身を轉ずることゝなつたのである。

十三、英語と乘馬の稽古

遠征の計畫一決したので、二月十六日の日記を見ると、其の日より救世軍司令官ホガード大佐の息、リチャードホガードなる青年を聘して、英語の練習を開始してゐる。卽ち一週六時間、午前九時には出勤せねばならぬから、毎朝午前七時四十五分から八時四十五分まで、日曜を除いて會話の稽古をしたのである。

又、四月十五日の日記を繙くと、乘馬の稽古をも行つてゐるが、其の理由が自分の面目を躍如せしめて面白い、曰く、

近來世風、日に頹廢し、志氣の振はざる際限なからんとす。我等苟くも先憂の志ある者は剛健質實以て社會の風紀を刷新するの心掛けなかるべからず。余が禪道に心を傾け、又東洋協會專門學校分校にも柔道の開始を慫慂するも之が爲めなり。余は玉突に耽らず、圍碁を爲さず、終日爲す所は讀書と會談のみ。此處に於て乎、騎馬の稽古を開始せり。

と云ふのである。幸に長谷川軍司令官（好道大將）より、大きなオーストリヤ產の馬を割愛して貰つたので、爾來、乘馬にて宮內府へ出勤したのであつた。日記の終りに、又笑はせる文句があるので、次に揭げることゝする。

「他年一日蒙古の大漠を馳驅し、中亞の平原を跋涉するに當り、騎馬の素養なくんば用を爲さず。是れ余の今日に於て此の技に通ずるの用意を爲さんと欲する所以なり」と。

十四、偶感　四月十一日夜

一、飲酒は人心を荒廢す之を節す可し。

一、喫煙は從來未だ試みざるも、今に於て欲心に遠ざからずんば其の襲ふ所となるやも知れず、斷然之を手にす可からず。

一、本日明石少將と共に圓山大嶺和尙を訪び、禪話に半日の工夫をなす。每日靜坐の日課を設く可し。靜坐は曾文正公家訓に遵じ、曾て東方齋と共に實行し來りしも近年之を廢しをるが更に續行す可し。

一、每朝冷水摩擦も實行す可し。

右四件實行の事。記して他日の證と爲す。

十五、母を憶ふ

誰やらの句に、

「相見ての後の心に比ぶれば、昔はものを思はざりけり」

の歌あり。

右は男女相思の情を寫したるものならんも、亦以て親子間の感情を表白せるものと見るを得べし。我れ年十三にして四方に志し、東西に奔走して、膝下の孝養を缺く玆に二十年、昨春强ひて母を伴ひ同棲一年、此の間功名の念

熾に、學問に渴し事務に繁なる余は、緩々と傾談の機もなく、又、余の猛烈なる性格は、田舍育ちの老母の繰言を聞くの餘裕もなく、匆々の中に復た相別るの時機となりたるが、昨日相別れてより、何となく涙の自ら下るを禁ずる能はず、終日母を思ふの情に堪へざるの心地す。嗚呼親子の至情は自然なり。年既に六十四にもなれる母、餘命幾干もなからん。樹靜まらんと欲すれども風止まず、子孝ならんとすれば親在さずの嘆なきやう、誓つて双親に孝を盡くさんことを期す。父上年六十七なるも、母上と共に猶ほ健、願はくば永く健在なれ、健在にして百年の壽を保ち以て我をして孝養を盡くさしめよ。左るにても余の志、徒らに大にして、屢々四方に出遊し、遂に鄕里に優遊するの期なかるべきも、明年秀子米國より歸らば、是非双親を東京に招きて、同棲せしめたきものなり。此の夜、中央公論の四月號を繙き、『母』なる小說を讀過して、感慨殊に深く夜三更之を記す。

此れは明治四十二年四月四日の日記の一節である。

十六、四戒と騎虎の勢と晨起

自分が念々刻々自ら戒め、自ら省み、向上の一路を辿らんとして來たことは、六十餘年一貫の生涯であるが、日記も亦明治三十年以來四十餘年間一日も缺かさず記して、後の戒めとしてゐるので、此處に其の二、三を附加して當時の心境を露呈してみよう。

明治四十二年四月十一日のところに、四戒と云ふのがある。

一、飲酒を節すべし。

一、喫煙は未だ試みしこと無けれども、何時其の誘惑に襲はるゝやも計り難し。斷然煙草を手にすべからず、（幸に今日まで喫煙の癖なし）

一、本日も明石少將と圓山大嶺和尙を訪ねて、辨道に半日の工夫をしたが、毎日、靜座の日課を設くべし。靜座は曾父正公家訓に遵ひ、曾て東方齋と共に實行し來たりしもの。近年此れを廢止せるは不可、須らく續行す可し。

一、每朝冷水摩擦も續行す可し。

右四件實行の事。記して他日の證と爲す。

又、『騎虎の勢』と題する一文が、同年五月二十六日の日記に見へる。

騎虎の勢は決して突如として、一時に生ずるものにあらず。其の來たるや漸あり、左れば之を制する亦漸を以てせざる可からず。其れには細く長く其の氣を洩らし、此れを累積せざればよし。世の中に恐る可きは、累積の力なり。累積の不平に到つては、最も危險にして、例へば大石を高處より轉ずるが如く、其の落下の力は降るに從つて倍加し、何物を以てするも此れを阻むべからざるなり。海舟翁の城山落の琵琶歌に曰く、

「勇むに勇むはやり雄の騎虎の勢一徹に、留め難きぞ是非もなき」

と、南洲翁の雄豪を以てしても、尙ほ此れを制する能はず。況んや凡人をやである。人を治め自らを治むるには、常に此點に注意し、不平の蓄積を豫防す可し。

更に六月二日の日記に「晨起」と題して、次のやうな修養短文が出て居る。若かりし自分が人生の夏の初めに於

て、如何に精神鍛錬に努力し、日常生活に精進したか、今は懐しい思ひ出となつてゐる。

明朝より未明、曉起することを期す。余の從來の習慣は遲く眠りに就くの癖あり。是れ頗る不可、殊に夏季に宜しからず。夏季は毎朝五時には起床の事とすべし。宴席其の他にて夜を更かす事あるも、朝起の刻を違へざるを期す。思ふに成業の根本は朝起に在り。此れを念とし之を心として必ず決行せよ、若し中途に廢するあらば、余は男子に非ざるなり。

十七、追想錄を草し終る　七月三日誌

追想錄を題して夜來語と云ふは「夜來八萬四千喝、今日如何學似入」なる東坡の句より來るもの、三月中旬より五月下旬に至つて稿成りしも更に「學生時代と余」の一章を添加し六月に至つて完成し、十二行二十二字詰千六拾一枚に上れり。非賣品として上梓すべきならんも、後機を待つ事とし之を保存するに決せり。曾禰統監に語りしに統監も之を公にするは多少の體裁と結構を爲す可しと云はれたり。

（夜來語は當時の一千餘枚に加ふるに大正十年更に四百餘枚を加へ合せて一千四百餘枚に上れるが、今に筐底に保存されて公刊の機未だ至らず、昭和十八年十一月認之）

十八、先輩の眼に映ずる我

陸軍省人事局長本郷少將、滿韓視察の途次、一昨夜來京、昨朝會談數刻せり。其の節、少將は桂侯爵の訓戒なりとして傳達して曰く、

「井上は余の信じて役に立つ男となす所なり。最近兩三年間の成績は、その成すあるを示す。而も彼は創業的手腕に富み、守成の才に至つては、未だ之を認むるの機なし。世は常に創業のみに非ず。寧ろ守成の器に待つもの多し。故に守成の器たるの素養をなすべし。猶ほ彼は自我の念熾なり。是れ大成せんとするもの〻戒む可き所、抑損隱忍以て大に成すあるの日を待たざるべからず」

と、本郷少將は更に桂侯の傳言として、曾禰副統監に對して、

「桂は井上は相當使へる人間なりと思ふが、閣下の意は如何。機を見て承れ」

との問に、曾禰副統監は答へて、

「井上は使ふ人に依れば餘程立派なる働きを爲し得る男なり。要は彼を使ふ者の如何による」

少將乃ち

「彼の缺點は如何」

と問へば、答へて曰く、

「缺點としては歐洲、東亞、中央亞細亞等に遊び、多少自惚れるの點あり。主張亦鋭く、猶、大に修養して大成を期せなければならぬ」

の語ありしと聞く、又曾て伊藤統監は宋內部大臣に對して、

「井上は君でもなければ、十分使ひ切れざるべし、內部にやることは適當なり」

との語ありしを、直接宋より聞知せしことあり。長谷川大將に至りては、余に全幅の同情を寄せらる。要するに我れは未成の小材なり。諸先輩の評、其の當、不當は措いて問ふを要せず。我は常に自我を撤し、自負の念を去り、抑損隱忍以て大成を期し、諸先輩の知遇に酬ひざるべからず。偶々桂、曾禰二老の評を聞き記して以て座右の箴とす。

此れも朝鮮時代の日記の一節で、人生の夏の初に在りし頃の自分が偲ばれる。

十九、明治四十二年夏季の東上　八月二十四日誌之

本年夏季賜暇を以て七月十一日京城を發し、八月二十日歸任す。此の間四十日東京に在る十日、日光に遊び鎌倉横須賀に海軍同窓を訪ひ、富士に登岳し、小田原、國府津に兩三日を過ごして先輩を其の別業に訪ひ、京阪にも立寄り、鄕里に在る前後十日氷上、多紀兩郡に於ける各種の招待會に臨みて所見を吐露したり、此の行會見せるは、山縣公、渡邊子、清浦子、小松原、岡部、大浦諸大臣、桂侯、犬養、長谷川大將、福島中將、牧野男、三井、山本、目賀田、田兩男、德富、三宅、杉山、頭山、根津、鶴原、成瀨、日向、林、井敬、森村、松石、萩原、小松大谷伯、梁啓超等諸氏にして、山縣公には初對面なり。桂侯、山公との傾談に依りて對韓政策の眞相を知り大に意を强ふし、三井、山本森村氏等によつて、實業界の趨勢を知り、福島、根津氏等に就き軍事を聞き、海軍諸友と會し、海軍の進步を耳にし兼て日本社界の風潮と之に伴ふ弊害、之が救濟政策、男子自らを處する所以に就き大に得る所あり、犬養氏等の政客により政界の前途をも揣摩し亦得る所なからず。要するに四旬の日子酷暑を犯して先輩諸友と會し、或は山川に放浪して費す所六百餘金、而して得る所は將來處身の方法如何にあり、決して此の行の徒爾ならざりしを自ら顧みて思ふ。

荒尾精先生傳記編纂に關する相談を了せし事、鄕里の父老と會して自己の現狀を近鄕に周知せしめしことの二件は此の行の副產物なり。

二十、柔道道場　九月十七日

同好の士相集りて柔道の稽古をなし、一は以て身體を鍛錬し、一は以て尙武の氣を養ひ同好相砥礪し、相戒飭して殖民地の風氣を健全ならしめんとの微志より道場を設くる事となり。乃ち東洋協會學校の道場を借受けて明日より開始の事とせり。余は會長に推され、教師に野呂正義あり、肝付宗次を顧問とし猶ほ當分は餘り外に發表せず、基礎漸く成るを待つて形を作る事とせり。

二十一、故荒尾精先生傳記編纂に就て　九月十七日

左の如き贊成人の下に材料蒐集に着手し、故人生前の知人に廣く頒布して助力を求め編纂材料蒐集の爲め必要の資を支出の事とし、本月十日其の配布を了せり。印刷數四百枚內百二十枚を山內巖氏に送り、他約百五十枚を個人に頒ちしなり。

故東方齋荒尾精氏傳記編述資料蒐集に就て

肅啓朝夕の涼風漸く人に佳なるの節、益々御清適奉賀候。却説故東方齋荒尾精氏逝て十有三周年、此の間帝國の地位と勢力は前後兩次の戰役を經て空前の發展を爲し、今や列强と班伍して獨り東洋平和の礎石たるのみならず世界治亂の機を制せんとし、之を故人が獨立孤行、東方問題を絶叫して應ずるもの稀なりし當年を回顧すれば實に隔世の感有之、故人をして今日在らしめば其の天禀の英資は練達の工夫と相待つて益々德器を大成し進んで帝國の進運に貢獻し興亞の偉業を贊襄すること多大なるものある可きを疑はず、悲ひ哉、旻天無情、之に年を藉さず、谷中寺畔の墓石既に苔して人の弔ふこと疎に、偉跡漸く世の記憶より沒せんとするに想ひ到れば故人を追慕するの念は延て流涕長太息を禁ず可からざるもの有之候。

頃者、幸に二、三先輩の間に建碑の計あつて其の成る近きにあるが如く、嗣を立てゝ後を善くするの議亦緒に就けるやに聞及候も、故人は天下の公人なり志士の典型なり東方の先覺なり而して所謂英雄の資質ありて英雄の運命を缺けるの不運兒たるに於て、其の傳記を公にし一は以て故人の遺風餘烈を顯揚して不朽に傳へ、一は以て青年の立志資料たらしむるは、殊に今日の時宜に適せる擧にして生等後進の故人に對する義務たるを信じ、自ら不肖を揣らず諸先輩の御贊同を得て之が編述刊行をなすに決し候。然るに資料殆んど之れ無くして故人の全體を髣髴する容易に無之、一に生前故人と面識あり又事を共にせられたる諸賢の御援助を仰ぎ出來得る限りを蒐集して纔かに能く大誤なきを期し得べき義に御座候。

諸賢は其々公私御繁忙の御身とて御寸閑もあらせられざることゝ奉存候得共、鄙意を諒として此の擧に全幅の御同情を賜はり故人の爲め强て貴重の時間を割き御存寄りとも御協議の上苟くも故人に關し御記憶に存する資料は勿論、其の逸事、詩歌、文章より斷翰、零墨の微に至る迄皆故人を偲ぶの好資料たるべきに付、略左に列記せる方法に依り、成る可く急に多數の御郵送を得たく候。尤も此等資料は鄭重に格納し置き御必要の分は閲了次第確實に御返納申上決して散逸等致間敷候。

猶ほ外傳として浦、廣岡二氏を始め藤島、山崎、鐘崎、藤崎、大熊、猪田其の他日清戰役に殉ぜし諸烈士の小傳をも編述附錄致度候間、此等諸士に關する材料をも併せて御郵送願上度此段奉得貴意候。敬具。

一、資料御送附先　京城旭町四丁目宮內府官舍井上雅二宛又は東京赤坂溜池町東亞同文會山內巖宛

一、資料の締切期日　本年十二月三十日

一、資料の種類

甲、現存の記錄書

卽ち故人の論策、手簡、手記、筆蹟其の他故人に關する御手稿、故人に關する新聞雜誌の切拔記事等一切の有形文字、寫眞（幼年時代より臨終に至る間の小照並に故人に因緣ある寫眞）及遺物（愛用の書物軸物、器具、刀劍等の撮影物）は可成卽時御郵送被下るゝこと。

乙、御記憶の資料

故人の經歷より推して前項有形の記錄類よりも諸賢御記憶の資料の方却つて編述上有用のもの多かるべくと存候に付、大要左の項目に就き御存の點細大漏さず速記若しくは御記述の上可成速に御寄送被下度

其の他御氣付の點又は御意見あらば腹藏なく御垂示御添加を仰ぐこと。

一、荒尾家系譜

二、年　譜

三、名古屋に於ける幼年時代、菅井家に寄寓時代、外國語學校時代、芳野金陵の門に出入せる時代、其の他東京に於ける學生時代、鹿兒島寄寓時代、陸軍教導團時代、大阪鎭臺時代、士官學校時代、熊本鎭臺時代、參謀本部時代、渡清の初期時代、漢口時代、日清貿易研究所設立及其の前後の時代日清戰役前後時代、京都寄寓時代、戰後清國漫遊時代、臺灣渡航より長逝に至る時代、右各時代に於ける故人の行住、閲歷、事業及其の經過、當時の社會と故人の交渉關係、貴下其の他諸士と故人との關係。

四、所謂左肩黨としての士官學校時代。

五、今西鄕と呼ばれたる熊本時代の面貌。

六、東方問題に献身するに至りし動機と其の四圍の干係。

七、渡清計劃。

八、渡清當時に於ける支那の形勢。

九、渡清當時に於ける朝野の支那に關する智識と意嚮。

十、渡清當時に於ける列國の極東關係。

十一、渡清以來漢口其の他に於て行住を共にせし我が有志の對清意見行動及故人との關係。

十二、駐在武官としての故人の貢献。

十三、支那經略者としての故人。

十四、清國官民中の有志と故人との交際並に事業關係。

十五、我朝野の有志と故人との交際並に事業關係。

十六、日清貿易研究所と清國通商綜覽編纂事業の顚末。

十七、日清誘導商會の設立計劃の顚末。

十八、東方通商協會の設立計劃の顚末。

十九、朝鮮に關する意見及び計劃の顚末。

二十、韓國名士と故人との交際關係。

二十一、日清開戰當初に於ける論策並に建議書。

二十二、日清戰役中故人を中心とせる友人及門下生の活躍。

二十三、京都若王子時代に於ける故人の風懷。

二十四、媾和管見と戰後經營意見。

二十五、臺灣統治に關する貢献。

二十六、故人の天禀。

二十七、故人の信念（精神上）
二十八、故人の理想（事業上）
二十九、故人の修養（陽明學、武術、愛讀の書類等）
三十、故人の風格
三十一、故人の學殖。
三十二、故人の感化力。
三十三、故人の私淑せし偉人（西鄉南洲、曾文正公等）
三十四、故人の人に優れたる諸點と其の短所。
三十五、故人の性癖と嗜好。
三十六、清韓其の他外國人より見たる故人。
三十七、故人に對する生前死後の世評（新聞雜誌等の掲載記事を含む）。
三十八、臺灣、東京、大阪其の他各地に於ける葬儀及追悼會の狀況。
三十九、故人の詞藻（詩歌、書簡、文章等）。
四十、故人の逸事逸話。
四十一、追悼の詩文。
四十二、貴下の見たる故人。
四十三、浦敬一、廣岡安太、石川伍一、藤島武彦、山崎羔三郎、鐘崎三郎、藤崎秀、猪田正吉、大熊鵬、福原林平、楠内友次郎、藤城龜彦。
右十二志士の略傳、遺文、遺稿、逸事逸話等。
四十四、其他御氣付の點。

明治四十二年九月　日

京城旭町四丁目
韓國宮内府書記官
井上雅二拜

追而前以て貴下の御贊成を得度候處遠地官遊の事にも有之、多忙の際取敢へず左記諸賢の贊成を得候。

贊成者氏名（イロハ順）

犬養毅、井戸川辰三、井深彦三郎、井手三郎、橋口勇馬、花田仲之助、晴氣市三、頭山滿、伯爵大隈重信、子爵小川又次、男爵大久保春野、小澤德平、大原武慶、御幡雅文、緒方二三、子爵渡邊國武、川嶋浪速、片山敏彦、與倉喜平、高山公通、高橋謙、恒吉忠道、根津一、中西正樹、中島眞雄、中野二郎、宗方小太郎、宇野宮太郎、野津鎭武、山内巖、前嶋眞、男爵福嶋安正、福本誠、小山秋作、男爵淺田信興、明石元二郎、齋藤力三郎、齋藤季次郎、子爵清浦奎吾、男爵北垣國道、白岩龍平、森清右衞門、守田利遠、杉山茂丸、菅井誠美。

斯くて明治四十三年九月、東京左久良書房より「巨人荒尾精」として此の書を刊行し贊成員其の他故人の舊知諸

賢には成本を寄贈したり。序文は松方侯、桂公二先輩に囑し成本の二冊は盛裝して宮內大臣を經て　天皇陛下　皇太子殿下の天覽を仰ぎ奉れり。亦以て故人の名譽とするに足る。

二十二、伊藤公の凶變　十一月五日識之

伊藤公爵月の二十六日哈爾賓に於て韓人の兇手に殪る。悲報四海に傳播して一世震駭す。殊に韓國上下の狼狽最も甚しく、何の策を以て此の善後を收拾すべきかを知らざるが如し。

余は宮廷に事務を幹し、三十日大臣次官共に東上するに及んで內外の庶務益々多端、大臣等出發の前夜の如きは遂に一睡せずして天明に至れり。爾來每日夜十二時迄は官邸にて執務したるが、昨四日國葬終りて一段落を濟ませり、是れより先き韓帝は電報又は勅使其の他の手段にて誠意を我朝及び藤公遺族に致したるが、猶ほ一般人民に戒飭を加ふるの必要ありとし、其の意見を以て次官より余に囑する所あり。二十九日草案を整へて次官に提出し、次官は之を李總理大臣に寄せて其の採否に委せたりしが、四日國葬の日を以て全文に何等の改刪を加へず、詔勅として李總理副書の下に煥發せられたり。

其の文意は日本の保護に依らずんば存立する能はざる旨を明記し、今後は更に凶悖の徒の日本の敦誼を蔑如して事端を滋くするあらば、國家は滅亡すべきことを斷言したるものにして、從來曾つて無き所にして他の保護關係の國に於ても斯る詔勅を出したるの例を見ざるなり。而して全文は余の草案に出づるに於て微笑を禁ずる能はざるものあり。

國民戒飭の詔勅

韓帝は四日夕詔勅を公布せらる。曰く夫れ經國の要は邦本を固くし萬民を保全するに在り。方今中外の大勢紛糾して國步の隆替豫期すべからず。朕が國勢の孤弱を以つて日本の保護に賴るにあらざれば曷んぞ克く其の存立を保つを得んや。是の故に登祚の初め大廟に誓告して、曠古の改革を行なひ、華を棄て實を取りて開國進取の大計を定めて、夙夜兢々及ばざるを是れ懼る。太子太師伊藤公爵正誠を致して、日本中興の業を贊し大輔の重秉に列する事玆に四十有餘年、大に憲章を定め宏猷を振張し現に樞詢の要職に在り、常に東洋の平和と終始す。其の大命を奉じ統監の任に膺るや兩國の利害共通の根義に據つて朕の國政を指導し休戚を分つ。朕亦其悃誠に倚信して維新經始の丕績漸く成るを得るのみならず。老軀克く太子を輔育して兢々の誠を盡して渝らず。惟ふに日本帝國の柱石たるのみならず。實に朕が國家の師表にして其の勳其の德は前古比罕なり。豈に圖らんや曩に隣鄉哈爾賓を過ぎ朕の兇悖なる人民の兇手に傷き俄に薨去す。今國葬の日に當り焦傷益々切なり。思ふに彼の兇悖の徒世界の形勢に暗く往々日本の敦誼を蔑如し遂に無前の凶行を敢てす。是れ卽ち朕が國家社稷を賊害するものにして、若し朕の臣民にして朕の意に違背して兇逆事を滋くすることあらば民衆何を以て泰安に、國基何を以て鞏固なるを得ん、爾臣民相率ひ相戒め朕の旨を體せよと。

十一月十六日

の方法等を顧念するに、韓は最早我の一屬領地たるの位置に在り。此の邦に於て活動の餘地は殆んど之なく、而して歳月人を待たず、余は半島經營に少壯最も爲すべきの時を過ごし、更に永く此の小天地に蹋躇するは志を天下に爲す所以にあらず。徐に發展の策なかるべからず。依つて昨年以來心に期する所あるも輕舉すべきにあらず、徐に時機の可なるを待ちつゝありしに四方の形勢は益々余の奮起を促すあり。而して在韓の一友人と本夕志を談して其友の贊同を經たり。之が發展の一策として海外一遊の議を提し之を諾せしむ、意是に於て大に安し。

第二　盛夏　自明治四十四年至大正十二年　十三年間　三十五歳より四十七歳　二十七件

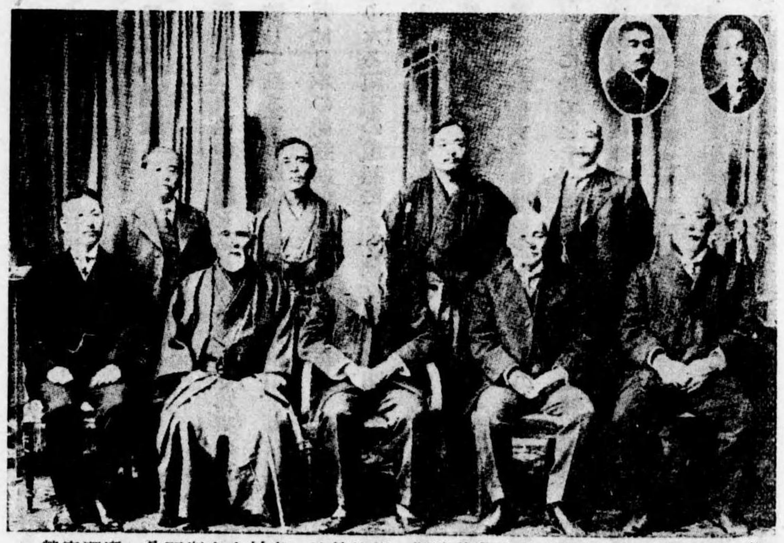
一、南行紀念の招宴　明治四十四年十一月十日

南亞公司十月二十日に設立せられ登記を終へ不日出發に付き、平素懇親の先輩知友の重なる人士を采女町精養軒に招きて留別の小宴を開きしに會せられたるの士、

青木、大浦、岡部三子爵、田、福島、目賀田三男、大久保商務局長、竹越三叉、德富蘇峰、三宅雪嶺、根津一、井手三郎、本郷少將、山本条太郎、森村市左衞門、箕原貞明、白岩龍平、成瀨仁藏の十八名にして、大隈伯、桂公、長谷川、大久保兩大將、牧野男、鶴原、木内等諸氏は病氣又は旅行中にて缺席せられたり。

余の挨拶に對し森村翁の半主人的答辭あり次に青木子爵、年長者として來賓を代表して、余に對し挨拶あり。終

明治四十四年十一月東京精養軒に於て述べる者の南行を記念せし　前列向つて右より
箕原貞明、福島安正、目賀田種太郎、森村市左衞門、青木周蔵、大浦兼武、岡部
長職の諸氏。後列向つて右より白岩龍平、根津一、大久保利武、三宅雄二郎、成
瀨仁藏、本郷房太郎、田健治郎、德富猪一郎、山本条太郎、井手三郎の諸氏。最
前列に座せるが述べる者。



南亞公司關係者　前列右より藤井諸照、川崎榮助、森村市左衞門翁、廣瀨實榮、
森村開作。後列右より大倉文二、述者、法華津孝治、諸葛小彌太の諸氏。圖
は右小畑大太郎氏、左和田豐治氏

つて記念の撮影を爲し、後、大廣間にて傾談刻を移し、九時散會、一同大に滿足の樣子なりしは、余の最も欣ぶ所なり。

二、南亞公司（南アジヤ會社）設立の由來

今回の世界周遊は其の筋の命を受けたる調査事項調査の外、自己の見識を弘め人格を養ひ將來の方針を決定するにありき。二十有八國の山川に親しみ五萬六千哩を踏破して到る所の狀況を視察し王侯將相より兒童走卒に至る迄有らゆる階級の人と接觸し歸來一つの確信を得たり、所は日本の前途如何を考慮する事に在りて存す。

日本は既往三千年間東洋に孤立して蘊蓄し釀成し來りたる祖宗の遺烈により最近四十年間に於て支那を討ちて臺灣を領し、露國と戰つて樺太を割き南滿洲を勢力範圍とし、遂に一千年來の懸案たる、朝鮮八道を併呑するに至れり。寔に開國以來未曾有の盛時と言はざるべからず。然れども今後列國競爭の間に立ち國勢を振張し國家永遠の基を開かんには更に大なる領土を何れかの方面に獲得せざるべからず。激增しつゝある日本の人口は元より我本土と新版圖とを以てしては之を容るゝに足らず。況や此れ以上に於てをや、更に他の方面に於て熟々列强の其の國を盛にする所以のものを考ふるに爭つて自己の領土若しくは勢力範圍に據り興業の原料を得て經濟上の發展に腐心せざるはなし。是れ我邦の亦忽にするを得ざる所なり。

而して原料の產地は此を熱帶圈に求めざるべからず。英國が印度及び埃及を領有するにより得る所の利益、獨逸が亞弗利加植民地に向つて盛に經營の歩を進めつゝある狀況は直ちに以て一般を推すべし。而して人口の移植原料の供給、此の二者に於て見渡す限り我懷中に入り來り得るは南亞細亞ならざるべからず。南亞細亞とは印度以東緬甸、馬來半島、暹羅、安南、比利賓、蘭領印度諸島なり此等三百萬平方哩の沃土は或は英或は佛或は蘭或は米の所領となり。若くは英佛兩國の勢力範圍に歸し政治上分配に與るの餘地なきは勿論なり。然れども經濟上に於ては比較的に此を容るるの餘地あるものとす。此等の地は移民原料の供給の外、殖民政策の三大要義の一たる市場としても亦等しく有望にして邦人の力の及ぶ處は此の方面の外なし。戰後の日本は北米に嫌はれ濠洲に嫌はれ歐洲諸國に厭はれ又同文同種の支那に嫌はれ四面楚歌の內に在る現況なるが我國にして眞に將來の發展を計らんには新領土の經營を完ふすべきは勿論なるも南亞細亞の方面に膨脹するなくんば百年の後と云はず五十年の後に於て國勢窘窮して竟に衰亡に赴くの他なし。古來洋の東西に於て國を立つるもの無數而かも其の總てが盛衰興亡の歷史を繰返せるに似ず。我國は約三千年に亙り獨立の體面を海東に維持し人仁に地沃、祖宗積勢の致す所今日の盛世を見るに至る我國の將來は尙ほ大に發展すべき運命を有するものと信ず。東西文明の融合萬國平和の黃金時代は暫く措き今後百年の計として少くも南亞細亞に向つて鴻圖を策せざるべからざるは眼前の急務にして、今日此の機を逸するに於ては國勢發展の氣運を閉塞し遂に國家衰亡の悲運に逢着するものなることを覺悟せざるべからず。猶ほ曷んぞ宇內統一と謂はん。東西文明の融合と謂はん。今の時に於て日本人として爲さざるべからざるは少くも百年の計に在り。南亞細亞の經營に在り。是れ余が深く心に感じ挺身自ら其の任に當らんことを決心したる最近の動機にして之に當るの人物を物色して自ら推薦せるは敢て妄想せしにあらず。三十有五年の短日月幸にして屢々海外に出遊し又自ら省察して得たる自家の識見と學問と體力は自ら此に當るの適當なるを信じたるに依る。西鄕南洲、大久保甲東、木

戸松菊の輩は皇政復古の業を創め、伊藤、大隈、山縣、桂、西園寺、澁澤の輩は明治四十年の日本を形成するに力ありしも今後に於ける帝國第二の發展は是を吾等壯年の徒に待たざるべからず。而して言論の時は既に去り今は實行の時に在り。余海軍を辭してより玆に十有七年志す所は大日本を成すに在り。學ぶ所は大日本を成す所以の道を學ぶに在り。今や多少の智識と經驗を得て實行の途に上らんとす。

惟ふに日本の今日在るは前述する如く、祖宗三千年の遺烈に依るものにして此の遺烈は更に吾等壯年の事業を冥護し其の目的を貫徹せしめらるべきを信ぜんと欲す。祖宗三千年の遺烈あるにあらずんば安んぞ今日の日本あるを得ん。而して今日の日本を更に大成し南亞細亞の地を經營するは亦等しく此の遺烈に依らざるべからず。天日本に此の運命を與へずんは則ち罷む。若し此の運命を與ふるあらんか是を遂行するは必ず祖宗の遺烈に依らざるべからず。且つ吾等祖宗の發軔の地の南亞細亞に在るは親しく彼の地に遊ぶ者の齊しく想像を誤らざる所にして就中馬來人の棲息せる地方は吾等祖宗の故郷と云ふも不可なし、人稍もすれば維新の改革を稱し王政復古と云ひ朝鮮の併合を稱して神宮皇后の素志を達せしと云ふ實に然り而かも余は言はんとす、吾等の南亞細亞に膨脹するは神武以前の故郷に復歸するものなりと、南亞細亞の經營は少くとも五十年後の日本に取り存亡の決する死活問題なり。神武以前に復古するの大業なり誰れか復是を疑はん。

此の如き見地の下に余自ら是れに當るに際し先づ着跟すべきは馬來半島四萬平方哩の地なり。地理、政治、經濟氣象其の他の狀況よりして馬來半島に先づ指を染むるを順序とし、護謨栽培の世界的事業にして如上の目的を達するに最も適當なるものと思惟し我實業界の巨人たる森村翁と互に相信じ議相熟し是れに着手することゝなりしなり

是れより前、余は朝鮮に於て爲すべき任務略ぼ終りを遂げたるを思ひ暫らく日本內地に在つて微力を邦家に盡さん考へなりしかば、今回の周遊より歸るや二三先輩は余の爲めに相當の考慮を費し、身を樹つるの途を講ぜられつゝある狀況なりしも、此等の諸計畫は之れを南亞細亞の經營に比すれば極めて小なりと云はざる可からず。又事業の傍に於て隻脚を政治界に容るゝが如き半上落下の遣り方は到底男子の採るべき眞の所爲に非ず。自己の天職の海外膨脹の先驅となり帝王の業を爲すにある以上、小島界裡の小利小名を一擲することゝし、之れを最も親しき間柄なる牧野伸顯、田健治郎、本鄕房太郎、山本条太郎諸氏に計り、次で成瀨仁藏、靑木周藏、目賀田種太郎、大浦兼武押川則吉、大久保春野、山縣有朋、寺內正毅、明石元二郎、小宮三保松、田邊輝實、澁澤榮一、三井三郎助、岡部長職等の諸氏に計り最後に桂首相にも相談せしに誰一人異議を稱へざるのみならず、邦家の爲め何事をも打棄て挺身之れに當るべき旨を說諭せられ玆に益々決心の臍を固めたる次第なり。

斯く志す所は遠大にして帝王の業を爲すに在り。然れば其の成果は之れを一生の間に求むる可からざるやも知る可からざるなり。余今回の渡鮮に際し一夕舊友相會し余の爲めに宴を開くや李完用氏は其の子恒九氏をして此に列せしめ書を贈りて曰く「平生所レ學爲二何事一、後世有三人知二此心一」と、此の句恐らく彼れ自身の爲めに言ふが如きも亦等しく余の爲めに云へるが如し、卽ち余が事業は成を後世に期せざるべからず。所謂國家永遠の基を開くが爲めに計を今日に樹つるに在り。固より太閤以上の宏圖にして「セシルローズ」以上の成功を得ざるべからざるに於て閣身を擧げて是れに任じ頭腦體力兼ね全く成功を漸進に待たざるべからず。此の宏圖を成し得ると否とは全然繫つて己一身に在りと考ふ。書して玆に至り名を南亞公司とせる所以は說明を要せずして自ら明かならん。

終に一言すべきは南亞細亞經營と云ひ帝王の業と云ふも畢竟は塵積爲レ山の例に洩れず、純然たる事業家として百姓として一心不亂に先づ護謨事業に當るに在り。此事業にして成功せずんば決して他に亘らざることを誓ふ。聊か設立の由來を述べて後日の參考とす。

明治四十四年六月二十七日

於濱寺

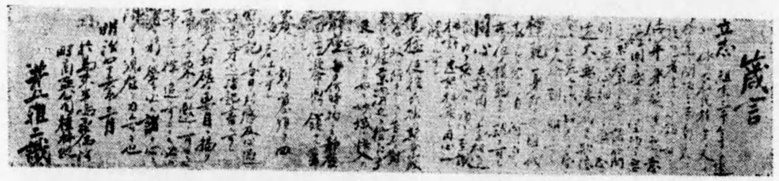
南洋に渡航するに際し伊勢の太廟に參拜し誓告す。

誓告

我神國ノ今日アルハ祖宗三千年ノ遺烈ニ依ルモノナルヲ恐察ス。神國ノ運命ハ今後益々開展シ、遂ニ宇內ヲ統一シ四海兄弟萬國一致ノ極地ニ達スルニアラザル可カラズ。顧レバ元寇ノ役對馬ノ戰悉ク神靈ノ加護ニ憑ラザルナク以テ今日ノ强大ヲ爲スニ至レリ。幸ニ生ヲ此ノ盛世ニ享ケ神國ノ民タル者宜シク國運伸張ノ爲メニ一身ヲ獻ゼザルベカラズ。雅二年少志ヲ立テ奮ヲ發シ屢々萬國ヲ周遊シテ士道ヲ砥礪シ智識ヲ涵養シ奉公ノ誠ヲ致サン爲メ辛苦スル十有七年、神國永遠ノ基ヲ樹ツルハ南亞細亞ノ經營ニ在ルヲ確知シ得タリ。

伏シテ惟ルニ南亞細亞ノ地ハ天孫發軫ノ鄉ニシテ子孫ノ據テ以テ永ク其ノ惠ヲ享ケ宇內統一ノ大業ヲ完成スルノ根據地タリ。今雅二等挺身其ノ地ニ赴キ心ヲ勵マシ身ヲ碎キ神國自享ノ宏謨ヲ翼贊セント欲スルニ當リ、恭シク神前ニ跪キ赤誠ヲ披瀝シ以テ曰ス、仰キ希クハ神靈雅二等ノ微衷ヲ憐ミ給ヒ雅二等ヲシテ斯志ヲ成サシメ給ハンコトヲ

森村市左衛門翁より贈られたる標語



マライ半島ジョホール河畔南亞公司植林地にかかげたる述者自筆の從業員に示せる箴言

南亞公司植林地に於ける作業服の述者

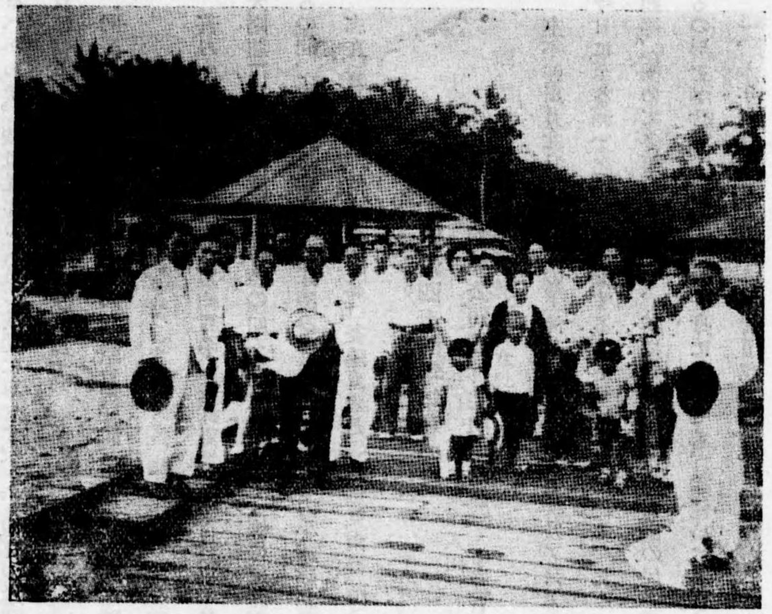
同じくゴム林開拓に奮鬪中マラリヤ熱に冒されたる時代の述者

林ムゴ園農イガンスストの設創者述

ロスンガイ農園クラブ前の述者と
專務並に職員
——故森村市左衛門翁揮毫——

同トロスンガイ農園クラブ前の巨木
—三十年生、幹周下部にて十尺六寸—

前列　右吉原取締役　中央述者
左松本專務　其の左竹内主任



ロスンガイ護謨園入口に於ける職員と述者

任ヤ重ク途遠シ雅二等協心戮力、業若シ成ラズンバ生還ヲ期セザルヲ誓フ

神武天皇紀元二千五百七十一年六月二十三日

於伊勢太廟靈前謹白

三、明治四十四年末又山に入る

十二月二十八日夜

十二月五日東京を發し二十五日新嘉坡に着し二十八日柔佛河畔の南亞公司經營植林地に着、入山式を行ふ。

茅屋一軒、椰子叢畔、流に面するの邊に在り河身を隔てゝ前面遙に鬱蒼たる平野を望み、更に南方一碧、天に連て遠く背後は則ち我が領土たり。廣袤十平方哩未だ以て大なりと爲す能はざるも微より顯となり小より大に伸び、今日の點滴の水、他日の大海の量となるの日、來らざ

るべからず。我は元より斯業の成功に專念すべく、他日の雄飛は先づ斯業成功の後ならざるべからず。偶々入山の夜に當り一言を記して他日の誌と爲す。

同盟の友　法華津孝治、同　高木榮、同　居城新三郎、同　鈴木留吉、同　三吉朋十、同　衣川梅之助、馬來の犬二疋。

苦力小屋に在る支那人苦力約百名、伐採地域約七百英反、燒拂地域百三十英反、植付地域十英反、目下年中の最大雨期に屬し、作業の進捗意の如くならざるも、一條の道路既に海岸より約一哩餘の事務所建築地に通じ、之に至るの間、防風林を除き、伐採濟みの箇所多し。苦力小屋點在して作業に從事しつゝあるを望見し快心極りなし。

志在二新建一國。何求利與レ名。炎陽夏六月。孤劍又南征。　（本年六月南航次の作）

四、明治四十四年年暮の感

南亞公司植林地山中に於て十二月三十一日午後八時記

本年の正月元旦は尼兒江の上流、六百哩なる上埃及アスアン貯水堤の邊にて迎へ（四大陸遊記に詩あり）たるが今日に至る滿一ケ年間を回顧するに本年は世界に於て、北亞トリポリー事件、摩呂哥事件、波斯問題、英國上院問題等、極めて多事の年にして、特に支那問題は四百洲の民心を動搖せしめ革命の氣勢頗る昂り、前途測るべからざるの形を示せり。而して我が一身に在つても、亦極めて多事の年たりしなり。

一、本年四月八日萬里の外遊より無事歸朝。

一、五月末、報告の爲め朝鮮に渡り六月初め歸東。

一、南亞細亞經營の邦家百年の大計にして身親ら之に當るの決心を爲し、六月末渡南、八月初めジョホール國政廳よりジョホール流域に六千英反の永借地權を得、居城、高木二人をして事に着手せしめ、八月十日歸東の途に就き二十四日東京に入る。

一、南亞公司設立の議、進行し森村翁を中心とし、其の友人數輩を加へ十月一日株式會社南亞公司の設立成る、而して余は其の常務取締役となれり。

一、十二月五日東京を發し、二十五日着新、直に入山、玆に此の山中に於て越年する事となれり。

一、七年間の官吏生活より、實業經營に移れるも、平生の志は其の地位に依り變ずるものにあらずして、依然自己の志す所、學ぶ所を實行するにあるのみ。新に建國を志し所謂帝王の業を成すは、我が素志なり。

一、遠遊より歸朝、始めて糖尿病の氣味あるを知り、醫師に囑し食事療養を爲す。生來些個の病氣なかりし身、此に於て此の不調あり。時に及び自重自愛する所なかるべからず。

一、本年は斯業の第一着手にして明年に於て漸く佳境に入るべく、奮然主一無適なるを期す。

一、年暮に際し胸中何等やましき事なし。唯だ家妻及支那子等と同棲する能はざるを氣の毒に思ふ切なり。況んや老親猶ほ堂にあるおや。父母を慕ふの念は年を追ふて漸く濃かなり。嗚呼我れ老ひたるか否乎。

一、年中、四、五の外友を得たる外、日本人に於て未だ會心の友を得ず。大に友を求めざるべからず。

一、唯だ南亞公司事業の起りしより、森村翁一派の實業家と交はり大に稗益する所ありたり。此の徒と事を共に

せば大に安神なり。大に士魂商才を發揮せざるべからず。

五、南亞公司トロスンガイ植林地社宅壁上の箴言　四月十日記

立志　祖宗三千年の遺烈に依り、大和民族享天の命運を開拓せん爲め、南荒に投ぜしものたる事を心銘すべし。

修身　身は嚴重を要し、意は確固を要し、色は温雅を要し、氣は和平を要し、語は簡明を要し、心は細密を要し志は遠大を要し、滲漏せず、欺隱せず、怠荒せず、以て斯の志を成すに足るの人格に到るを期すべし。

同志　志相同じく、氣相通ずるを以て來り合す。須らく至誠相許し、忠恕相接し同心一體たる可し。

寛猛　使役の良否は、斯業成否の岐るゝ所たるを以て、苦力に對する、宜しく寛猛兼濟、之を役する手足を動かすが如き、自然の妙域に達するを要す。

靜坐　毎日何時に拘はらず、靜坐一回、正位凝命、鼎の鎭まるが如くなる可し。

養氣　刻々心を留めて須らく四海を呑吐す可し。

寫日記　毎日の所感及び身過、口過、心過、皆記書す可し。

右吾人切磋の要目を掲ぐ。事の未だ成らざる邀ふ可からず。事の已に往く追ふ可からず。必ず諸を躬に學び、必ず諸を心に問ひ、以て現在を勤む可き也。

明治四十五年三月　馬來半島ジョホール河畔トロスンガイ植林地　井上雅二識

六、南洋企業の信念

南洋時代の自分の信念は、前記の太廟への誓告や農園に於ける箴言に克く現はれて居ると思ふが、當時の感想錄を繙けば、次のやうな熱烈な文字も見られる。

惟ふに帝國の今日あるは、祖宗三千年の遺烈によるは勿論なるも、此の遺烈ば更に我等青壯年の事業を冥護して其の目的を貫徹せしめらる可きは、固く信じて疑はざる所である。祖宗三千年の遺烈あるにあらずんば、安んぞ帝國の今日あるを得よう。斯くて今日の帝國を更に大成し、南亞細亞の地を經營するは、又等しく此の祖宗の遺烈によらねばならぬ。天、帝國に此の運命を與へずんば、則ち罷む。若し此の運命を與ふるあらんか。之を遂行するは必ず祖宗の遺烈によるべきである。且つ我等の祖宗發祥の地が、南亞細亞にある可きは、親しく彼地に遊ぶ者の心會默得する所であつて、就中馬來族の棲息せる地方は其の昔、我等祖宗の故鄕の一たらずして何であらう。人動もすれば維新の改革を稱して王政復古といひ、朝鮮併合を稱して、神后の素志を紹述せしと云つて居るが、夫れは或は然るかも知れぬ。然し、我等の南亞細亞への膨脹は、則ち神武以前に復古するものといふ可く。所謂「神武前復古」である。左すれば南臣細亞の經營は差詰め、少くも帝國の將來にとりて、其の存亡を決する死活問題たると同時に、神武前復古の大業である。誰か敢て此れを疑ふ者ぞ。

七、講話　四月十五日記

毎月一日十五日の兩日を休日と爲す事としたるに就き、此の休日に於て同人一堂に會し相互精神上の修養を爲すは必要の事たるを思ひ、毎回一場の講話を爲す事とせり。

依つて本日は南方經營が帝國の前途に何故に必要にして、吾人が之に任するは如何の理由に出づるかを詳說し、次に南亞公司命名の由來よりセシル・ローズに及び、ローヅ一代の勳業と人格を略述し、最後に斯志に酬ひ、ローヅの如き人物たらん爲めに、必要なる人格の養成に力めん爲め、箴言八則を揭示せる事を陳べ、一同の發奮を希望し、諄々、二時間に亘れり、初回の聽講者は、

高木榮、三吉朋十、居城新三郎、金子新次郎、庄司稻麻呂、衣川梅之助、熊谷丑松、小野地周太郎、矢持義雄、九名なり。

八、「セシル・ローヅ私生涯」發刊に關する序文

誰か謂ふ現代は凡人の世なりと。世を擧て唯だ蝸牛角上の爭を爲し凡化し俗了して紛々擾々に堪へざらんとし、一人の乾坤を旋轉し宇宙を呑吐する底の英豪を覓めて得べからず。ルーズベルト、ロイドジョージ、ストリビン、ブリアンの輩、豈に言ふに足らんや。須らく盛んに英雄を地下に喚起して卓勵風發の氣を上下に鼓吹し、氣死の靑年を鞭韃して國家の棟梁たらしめざる可からず。

余、志を抱き重ねて南洋に航し現に赤道直下常夏の國に在り、陸に象、蛇、虎、豹を侶とし、海に鮫、鰐、鯨、鯢を儔とし、前に萬里太平の波を控へ、後に千年斧を入れざるの地を擁し、氣象宏濶一身以て天下に繫るあるの念益々禁ずべからざるものあり。

此日早起して椰子樹蔭の淸泉に嗽き、高く旭旗を廬頭に揭げ同胞六七、土酒を以て屠蘇に代へ團座新年を祝したる後、獨り長椅子に凭り、架上の「カーライル」英雄論を繙き感興頻りなり。想ふ、家奴より起りて群雄を願使し早く海內を蕩平して餘力高麗に及び更に唐、天竺をも征服せんとしたる太閤秀吉は、余が幼少より夙に其の名を慕ひ其の風を擬し今に景仰措く能はざる古今の第一人にして羸弱の軀を用て暗黑亞弗利加に投じ自力能く地を闢く數十方萬哩、財を散する幾億金、アングロ・サクソン族の必ず宇內に雄飛すべきを信じ、畢生役々、竟に南亞百代の鎭と爲りたるセシル・ローヅは、余が靑年時代より憧憬する近世の快男子なり。古の太閤をして今に在らしめば、其の雄才大略は能く時勢に適應して經濟的帝國主義の權化となり、威力遠く四海を壓する者あるべく、今のローヅをして古に生れしむ亦太閤の肇に倣ふ能はずと云ふ可からず。古の太閤は今のローヅたる可く、今のローヅは古の太閤を紹く能はざらんや。

幼にして太閤を體し、長じてローヅを想ふ。余に於て自ら一道の信念あり。一貫の趣味あり。

明治三十四年秋冬の交、歐洲に留學して維納に在る際、ローヅは痾を養ふて埃及に遊ばんとし、途、中歐を橫ぎるの事あり。往て之に謁せんとし偶々囊底空ふして之を果さず。越へて翌年一月ローヅ南に歸り、幾くもなくして一夜將星頓かに隕ち、英魂逝て復た回らず、斯くて生前親接の機を逸したる余は、厘に書籍口碑に據りて其の風貌を髣髴し其の人格を私淑するの外なきに至り、之が資料を內外に求むる年あり。一昨夏再び世界巡遊の人となり英京に留まるや、廣く故人の遺友を物色して其の所說に聞き、又普く書肆を漁りて傳記數本を得たり。中に就き本書

は故人の祕書として長く故人に隨從し最も表裏の實情に通ぜるヒリツプ・ジョルタン氏が率直の筆を驅つて英雄の半面を畫きたるものにして、文意暢達情理交々臻り、讀み去り讀み來りて故人の風格紙上に活躍し人をして其の音容に接するの感あらしむ。宜なる矣、本書一たび出でゝ英語國青年の耽讀を競ふもの、乃ち著者及び出版書肆の快諾を經、木塚常三、東俊造二君の助力に依りて之を意譯して世に公にし以て青年子弟の立志資料たらしめんとす。若し夫れローヅの正傳に至りては斯かる小冊子の能く盡くす所に非ず。譯書を以て滿足すべきに非ず。年を閲して諸書を涉獵し、能ふ可くんば躬ら故人驅馳の國に臨み、其の境遇に同化し其の人格に入神し、始めて筆を下さんと欲す。世の少壯爲すあるの志を抱き當來の經緯に任ずるの士、幸に先づ本書に依りて英雄の半面を研究するの一資料とし、以て續々感奮興起するあらんか、本書の譯出徒爾ならざる可き也。

神武紀元二千五百七十二年元旦

馬來半島ジョホール州ジョホール河畔椰子樹蔭の草廬に於て　井上雅二識

九、發熱蓐裡の言

南洋の創業時代には、誰しもがマラリヤに冒されるのである。自分も在住二年目頃に至り、此れに冒され時々再發を見たのであるが、忘れもせぬ、大正四年の暮歸京中十二月二十三日のこと。北ボルネオ企業問題に就て小田原に山縣元帥を訪問した時、元帥より、

「君の顏色は馬鹿に惡いが、どうかしてゐるのではないか」

と言はれたが、翌二十四日更に時の首相大隈伯を早稻田の自邸に訪ふて、同じく南洋企業の件に付き伯の助力を望み歸宅後、果して惡感を催し臥床した。丹毒に冒されたのである。二十五日には不快を押して外出したが、中央亭で、田中大佐（後の耕太郎中將）と食事中、堪へ難いので歸宅して見ると、午後四時の體温四十度に上つた。最初マラリヤとのみ思ふて、意に介しなかつたが、背部に於けるマラリヤの解熱注射の傷口から、病毒菌が入つたものと察せられる。そこで二十八日に友人、阿久津三郎博士の周旋で、順天堂病院へ入院した。自分の病院入りは今までのところ、此れが空前であり、今迄の所、絶後である。

三十一日の日記を繙くと、初めの方は家妻が代筆して居るが、後の方に未定稿として、

曾期卅歲乘二風雲一、已入二不惑一何所レ爲。唯有二封侯一片志一、欲二無限擴二大皇運一。

といふ不韻の句が自分の手で記されてある。其の頃は毎日三十九度内外の發熱で血淸注射をしてゐたのであるが、翌正月元旦の日記を見ると、矢張り家妻の手で、左の如くつけてある。

順天堂第百三十二號室にて、褥中新年を迎ふ。午前頭痛激しく、引いて午後に及ぶ。午後は殆んど平熱となり、病毒大に衰へたり。去二十五日より玆に一週間にして、病勢大に衰へたるは、平素健康の爲めなるべしと。

此の頁にも自分の手で、左のやうな句が附加してある。句を成してゐないが相變らずの元氣潑剌たるところを見せてゐて、今、此れを讀んで微笑を禁じ得ない。

曾期卅歲策二封侯一。齡欲二四旬一猶未レ酬。唯有二一片凌レ雲志一。夢魂恒繞五大洲。

詩の意味は、三十歲にもなれば一國一城の主となならうと期してゐた人間が、已に四十歲となつて、未だ志が酬ひ

られない。然し、一片、雲を凌ぐの志は依然として存し、夢はいつも、五大洲を繞つてゐるのだといふのである。

一月八日に愈々外科手術をした。麻藥をかけて手術室に赴き、知覺を失ふと共に、佐藤博士（達次郎男）の執刀に依り、傷口は切り開かれ、內部の腐廢物は洗滌され、繃帶を捲き、擔架に依つて寢室へ戻されたが、此の間二十分、恰も夢から覺めたやうで何等の苦痛もなかつた。晝食を省いた自分は、空腹を訴へたものと見へて、日記にはその事まで書いてあるが、此れは麻藥の反應が至つて輕かつたからで、身體精神共に壯健だからとの主治醫の判斷であつた。

翌九日には、又、マラリヤの爲め、發熱四十度に及んだが、夜は三十七度に降つたと書いてある。かくて一進一退であつたが、十三日頃より平熱に復し、日一日と快復して在院三週間、十七日に退院したのであつた。

凡そ當年の南洋開拓者は、何人と雖もマラリヤに冒さるゝを免れず、中には黑水病となり或は胃腸を害し、榮養不良が因となつて仆れる者少からず。自分は丹毒に冒されたのであるが、此れを以てマラリヤは根絕したものと見へ、爾來幾年間南洋に在つても、遂に冒されなかつた事は幸である。要はかゝる場合にあつても、依然氣魄の衰へなかつたことを想起して、此處に一「エピソード」として挿入した次第である。

十、象　狩　り

南洋時代の日記を繙くと、ジョホール州に於ける邦人最初の象狩りといふ一節がある。

大正四年七月十一日、南洋の事業地トロンスガイ植林地に於て、吉井大尉（信照氏）の一行が巨象を射殺した。これより數ケ月以前、同方面に於て、數頭の象群出沒して護謨林を荒らし、その損害少からざるを以て、ジョホール州「サルタン」に請願して象狩りの認可を得、「サルタン」所有の巨銃二個の拂下げを受け、象狩隊を組織して此れを北部、中部、南部の三部隊に分ち、その中、中部の本陣をトロンスガイ植林地に置いたのであつた。

此の日、中部々隊の一行は、象の足跡を慕ひつゝ、此れを追跡する中に、晝十二時前後に至つて、漸く三頭の象群を發見し、亂射十八發、僅に其の中の幼年象一頭を射止めたのであつた。

余は偶々此の日、新嘉坡より歸山し、間もなく銃聲を聞いにが、程なく巨象射殺の快報に接し、依つて其の應援隊として、支那苦力を率ひ、同勢十數名にて、約三哩の小徑を行進し、辛うじて現場に至り、一行と相會した、見ればまだ三十幾歲の幼年象で、身體もさまで巨大ならざりしも、兎も角もとて此の象を前にして記念の撮影をなし次で馬來人の案內者は恒例とあつて、象屍の周圍を廻つて厄拂ひの式を擧行した。馬來人は象を以て山中の王とするが故に、此れを射止めし場合は、神火を焚き、青葉の枝をとりて、象の前後左右に振ること、恰も我國に於ける厄拂ひの如し。式終るや、初めて支那苦力をして、斧を以て四肢と頭部とを切放たしめ其れを多數の苦力に命じて運搬せしめた。

所が頭の重さだけでも約五、六十貫あり、山中草木繁茂する小徑を、六人以上の肩を以て運搬せしめることは、到底不可能なりしを以て、途中に於て、更に其の頭蓋骨を切放して重量を減じ、漸く現場より十五六町隔つる川畔に運び、其處より獨木舟に托して、新嘉坡に運び去らしめ、一方余等一行は暗を犯して、夜の八時半といふに本部へ引揚げた。

此の象狩りは實をいへば、此の附近に於ては近年始めて行はれたるものにて、年代からいふと、約三十年來のことだといふ話であつた。のみならずジョホール州に於て、邦人の手に於て實行したのは、全く此の擧が嚆矢だといふことであつた。

其の後五、六ケ月の後に、更に二頭を獲た。かくて前後三頭を射止めたわけだが、余等の射殺して獨木舟に托した殘骸は、新嘉坡到着後、同處に於て頭部と四肢を剝製に付したが、約二百圓ばかりの料金をとられた。其の上記念の爲め、日本へ持ち歸ることゝなつたので、今度は途中多くの運賃を支拂はねばならなかつた。而して今日では其の頭部は、高輪の森村幼稚園に、四肢の中一個は自分の宅に保存してある。

十一、坐右銘

一、早起未レ更レ衣、靜坐一炷香。
一、旣着二衣帶一、必禮二神佛一。
一、眠不レ違レ時、食不レ至レ飽。
一、接レ客如二獨處一、獨處如レ接レ客。
一、尋常不二苟言一、言則必行。
一、臨レ機勿レ讓、當レ事再思。
一、忽忘二過去一、遠慮二將來一。
一、負二丈夫之氣一、抱二小兒之心一。
一、就レ寢如レ蓋レ棺、離レ褥如二脫兎一。

右は大正六年日記の冒頭に大書したる坐右の銘であるが、所謂三尺の童子も此れを語る可く、七十の老翁も能く此れを行ひ難しであつて、此の銘の如き、今に服膺して然るべきものであらう。

十二、修養の服藥

大正七年の日記にも面白いものが卷頭を飾つてゐる。題して「修養服藥」朝夕二回內用といふのである。

一、正直五分、思案四分、堪忍三分、分別二分、用捨一分。
二、禁物は無理、慮外、過言、無心、油斷。

とある。又、司馬溫公の句として

一、顏回は陋巷に安んじ、孟軻は浩然を養ふ。富貴は浮雲の如く、此の名は極樂園。
一、孝悌は神明に通じ、忠信を蠻貊に行ふ。積善は百祥を降す。此れを名づけて因果となす。
一、言は百世の師となり、行は天下の法となる、人々掩ふ可からず、是を不壞心と名づく。
一、仁人の安宅、義人の正路、之を行ふて正且久しければ、是を光明藏と名づく。
一、忿怒は烈火の如く、利慾は銛鋒の如し。終朝長く戚々、是を阿鼻獄と名づく。

と、いふやうな句をも掲げてあり、修養の一助とした事が思ひ出される。

十三、南洋事業と自己の責任

第一、南亞公司設立の由來、

(一)動機と信念、(二)第一着の事業、(三)神前の誓告。

第二、創業の八箇年、

(一)概說、(二)經過、(三)希望、(四)進止、(五)結論。

南洋事業と自己の責任

第一、南亞公司設立の由來

南亞公司設立の由來は企業の決心を以つて東京を發し南洋に第二次の渡航を爲すに當り後日の爲め記錄したる左の一篇に依り其の梗概を推し得べし。今日よりして之を見るに其の思想甚だ暢達せず。其の字句亦頗る妥當を缺くものあるを覺ゆるも、以て南投の動機と信念を窺ふに足るを以て其の儘茲に記載して當時を偲ぶ事とすべし。

一、動機と信念

今回の世界周遊（明治四十三年五月より翌四十四年四月に至る一ケ年間）は其の筋の命を受けたる事項の調査以外、自己の見識を弘め人格を養ひ將來の方針を決定するに在り。二十有八國の山川に親み六萬哩の行程を踏破し、各國の險夷强弱を究め、各民族の興敗消長を察し、歸來一の確信を得たり。我帝國の前途に關する確信を得たり。

我帝國は既往三千年間、東海に孤立して蘊蓄し釀成し來りたる祖宗の遺烈に依り最近四十年間に於て支那を膺ちて臺灣を收め、露國と戰つて樺太の南半を割き、南滿洲を勢力範圍として一千年來の懸案たる朝鮮八道を併合するに至れり。寔に神武以降未曾有の盛事と言はざるべからず。然れども今後列國競爭の間に立ちて國勢を伸張し、國權を確立し邦家永遠の洪基を樹てんには更に大なる領土否な經濟的版圖を何れかの方面に獲得するの要あり。掌大の本土と新領地とは激增する人口を容るゝに足らず。富國强兵の資源を得るに足らず、又飜て列强の共の國運を盛大ならしむる所以を考ふるに皆な爭ふて自己の領土若しくは勢力範圍に據り興業の原料を得、以て經濟上の發展に努力せざるはなし。是れ我帝國の齊しく忽にすべからざる所なり。(歐洲開戰後、自給自立、原料地盤獲得の聲始めて熾なり)

而して原料就中植物原料の地盤は之を熱帶圈に求めざるべからず。英國が印度、埃及及南洋殖民地を領有するに依り得たる所の利益、獨逸が亞弗利加殖民地に向つて經營の歩を進めつゝある狀況、佛國の北阿に於ける、蘭國の南洋は於ける、直に以て全般を推すべし。人口の移殖、原料の供給、此に於て乎、我眼底に映じ來るは見渡す限り先づ南亞細亞ならざるべからず。南亞細亞とは英領印度以東、緬甸、馬來半島、暹邏、佛領印度、比律賓、蘭領印度諸島なり。此等三百萬平方哩の尨大なる沃土は或は英或佛或蘭或米の所領となり若くは其の勢力圈に歸し、政治上之が分配に與るの餘地なきは詮なし、然れども經濟上我勢力を扶植し我商權を伸張するの餘裕綽々たり。此等地域は移殖民と原料供給の外殖民政策の三大要義の一たる市場としても亦等しく有望にして邦人の力の及ぶ處は、先

づ支那に次で此方面ならざるべからず。最近の帝國は北米に嫌ばれ濠洲に嫌はれ歐洲諸國に嫌はれ同文同種の支那とも未だ親善なりと云ふ能はず。四面楚歌の内に在る現況なるが、我帝國にして眞に國基を堅實にし國運の發展を計らんには支那との聯結と同時に南亞細亞の方面に膨脹するなくんば百年五十年の後と云はず、三十年二十年の後に於て國勢窘窮して竟に衰頽に赴くの外なし。古來洋の東西に國を立つるもの無數、而かも其の總てが盛衰興亡の歷史を繰返せるに似ず、獨り我帝國は上下三千年に亘り萬世一系の皇統を戴き海東に獨立の體面を維持し人仁に地沃、祖宗積德積勢の致す所、今日の炎隆を見るに至る。帝國の將來は尙ほ大に發展すべき命運を有するものと確信す、東西文化の融合、萬國平和の黃金時代は暫らく措き、今後百年の計として少くも南亞細亞に鴻圖を策せざるべからざるは眼前の急務に屬し、今日此の機を逸するに於ては國勢伸張の氣運を閉塞し竟に國家衰亡の悲境に逢着するものなる事を覺悟せざるべからず。猶ほ曷んぞ宇内統一と謂はん。東西文明の融合と謂はん。今の時に於て日本人として爲さざるべからざるは少くも百年の計に在り。南亞細亞の經營に在り。是れ自己が深く心に感じ挺身其の任に當らんことを決心したる最近の動機と信念にして之に當るの人物を物色して自ら推選せるは敢へて一朝の妄想に非らず。一夕の感觸に非らず。三十有五年の短日月幸にして屢々海外に出遊し、又支那及朝鮮經營の衝に當り、此の間に修得し研究し陶冶したる多少の識見と學問と體力と心境とは自ら之に當るの適當なるを信じたるに依る。西鄕、大久保、木戸、岩倉其の他維新の先輩は王政復古の偉業を翼成し、伊藤、大隈、山縣、澁澤其の他明治の先輩は今日の帝國を形勢するに力ありしも今後に於ける帝國第二の發展は之を我等壯青年の徒に待たざるべからず。而して言論の時は既に去り今は實行の秋なり。自分は始めて海外に一歩を踏出してより玆に十有七年、志す所は大日本を成るに在り、學ぶ所は大日本を成る所以の道を學ぶに在り、今や僅かなる智識と乏しき經驗を以て唯だ一の至誠を負ふて敢然實行の途に上らんとす。

惟ふに帝國の今日あるは前述の如く祖宗三千年の遺烈に依るものにして此遺烈は更に我等壯青年の事業を冥護し其の目的を貫徹せしめらるべきを信ぜんと欲す。祖宗三千年の遺烈あるに在らずんば安んぞ今日の帝國あるを得んや。而も今日の帝國を更に大成し南亞細亞の地を經營するは亦等しく此の遺烈に依らざるべからず。天帝國に此の運命を與へずんば則ち罷む。若し此の運命を與ふるあらんか之を遂行するは必ず祖宗の遺烈に依らざるべからず。且つ我等祖宗の發輒の地は南亞細亞に在るべきは親しく彼の地に遊ぶ者の心會默得する所にして、就中馬來族の棲息せる地方は其の昔、我等祖宗の故鄕たらざらんや。人稍もすれば維新の改革を稱して王政復古と云ひ、朝鮮の併合を稱して神后の素志を紹述せしと云ふ。實に然り、而かも我等の南亞細亞に膨脹するは神武以前に復歸するものと云ふ可く、南亞細亞の經營は少くも將來の帝國に取り存亡を決する死活問題なり。神武復歸の大業なり。誰か復た之を疑はん。

二、第一着の事業

此の如き見地の下に自ら之に當るに際し、先づ着跟すきべは英領馬來半島四萬平方哩の地なり、地理、政治、經濟、氣象、交通其の他の關係よりして先づ馬來半島に指を染むるを順序とし、護謨の栽培は二十世紀の世界的事業にして且つ熱帶地の代表的產物なるを以て如上の目的を達するに最も適當なりと思惟し之を實業界の巨人にして人

格者として夙に尊敬措かざりし森村翁に諮りしに幸に快諾を賜り翁の力に依り互に相信じ議相熟し斯業に着手することゝなりしなり。

是より先、自分は朝鮮に在官すること七年、併合の盛事既に成りて任務終りを告げたるを思ひ、暫く內地に在つて微力を邦家に盡さん考へなりしが今回の周遊より歸るや、二三の先輩は自分の爲め相當の考慮を費やし身を立つるの途を講ぜられつゝある狀況なりしも、此等諸計畫は之を南亞細亞の經營に比すれば極めて小なりと云はざるべからず、且つ自己の天職の海外膨脹の先驅となり帝王の業を創むるに在る以上、小島界裡の小利小名を一擲して身を捧げて之に任ぜざるべからずとし之を平素知遇を忝ふせる牧野、田兩男、本鄕大將、山本氏、成瀨氏、靑木、大浦兩子、目賀田男、大久保大將、明石中將、福島大將、根津氏、田邊氏、淸浦子、長谷川大將其の他諸先輩に計り、最後に山縣、桂兩公にも相談せしに擧つて贊同を賜はり何事をも打棄て挺身之に當るべき旨を說諭せられたれば玆に益々決心の臍を固めたる次第なり。

斯く志す所遠大なれば其の成績は之を一生の間に求む可からざるやも知れず、自分の曩日、告別の爲め渡鮮し一夕舊友の招宴に赴くや、前韓國首相李完用伯は令嗣恒九氏を代理として出席せしめ書を贈りて曰く「平生所レ學爲二何事一、後世有二人知一此心一」と、此句恐らく伯自身の爲めに言はれたるが如きも亦等しく自分の爲めに云はれたるが如し、卽ち自分の事業は成を後世に期せざるべからず、所謂國家永遠の基を開くが爲めに計を今日に樹つるに在り此の宏圖を成し得ると否とは繫つて自分の努力奈何に在り。

終りに一言すべきは南亞細亞の經營と云ひ帝王の業と云ふも畢竟は塵積爲レ山の例に洩れず純然たる事業家として百姓として一心不亂に先づ護謨事業に當るに在り、此の事業にして成功せずんば決して他に亘らざるべし、聊か南亞公司設立の由來を述べて後日の參考とす。（明治四十四年六月東京に於て記す）

三、神前の誓告

愈々南洋に渡航するに際し、居城、高木兩生を伴ひ伊勢の太廟に參拜し左の誓告を捧げたり。

我神國の今日あるは祖宗三千年の遺烈に依るものなるを恐察す、神國の運命は今後益々開展し東西文明の調和者となり、遂に四海兄弟萬國一致の極地に達するに在らざる可からず、願ればは元寇の役對馬の戰、悉く神靈の冥護に憑らざるなく以て今日の强大を成すに至れり、幸に生を此の盛世に享け神國の民たる者、宜しく國運伸張のために一身を獻ぜざるべからず、微臣年少志を立て奮を發し、屢々萬國を周遊して、士道を砥礪し、智識を涵養し、奉公の誠を致さん爲め辛苦する十有七年、神國永遠の基を樹つるは南亞細亞の經營に在るを確知し得たり。

今微臣等挺身其の地に赴き心を勵まし身を碎き神國自享の宏謨を翼贊せんとするに當り、恭しく神前に跪き赤誠を披瀝し奉る、仰ぎ希くは神靈、微臣等の至誠を憐み給ひ斯志を成さしめ給はんことを。

明治四十四年六月二十三日　於　太廟靈前　謹　白

第二、創業の八ヶ年

一、概　說

前述の如き動機と信念とに依り南洋開拓に後半生を捧げんとし、あらゆる周圍の係累を裁斷しあらゆる他の榮達の道を排斥し、太廟に誓告して自己の決心を神明に披瀝し、志在二新建一國、不レ求利與名、炎陽夏六月、孤劍又南征の一絶を壁に題して渡南、馬來半島の一角に雄圖の萠芽を植付けたるは明治四十四年六月にして爾來春秋八ケ年、一年の半を熱帶常夏の地に住み苦熱を凌ぎ惡疫と戰ひ絶大の確信を以て樂んで創業建國に從事せしが、大正四年冬に至り衆議支配人の制を設け直接の經營を之に任し自己は大綱を攬つて之を監督することゝなり、自然現業地に在るの日短く、自己の希望し且つ當然の責務たる親愛なる從業者と苦樂を侶にするの機會に乏しく此儘に推移せんか、自己の志と業とは相副はざるに至るなきやを保せざりしに、昨夏七月鎌倉の一日、森村翁と會社の根本精神より將來の方針を論議したるに端を發し、次で和田顧問社業恢弘の提議となり重役一同の贊成となり、株主の協贊となり、第二期發展の機茲に熟し、蘭領東印度、英領ボルネオ、其の他廣く南洋地方に事業を擴張し得ることゝなり十二月初め出發半歲を費して各般の調査を遂げ、先づ地をスマトラ東部に相し經營の歩を進むることゝなり、自己の責任は第二期に入れり。

二、經過

當初に於ける森村翁の立案は小より大に低きより高きてう事業の原則に依り五十萬圓千五百英反開墾を第一期計畫とし、森村家及同組合員の出資、自己の請負的無限責任經營を骨子として合資會社と爲すに在りしを中途其の組織を株式會社に變更したり。自分は企業の動機決心よりして之を異み、何故の變更なるやを正せしに、翁は形は株式會社とするも余を中心とする少數親友間の合本組織なるを以て其の精神は當初と毫も變る所なしと明言せられ、事實亦然るを以て更に牧野、田兩男爵其の他三四先輩の意見に聽きて之に從ひ其の時よりして常務二名を置きて責任を分擔し、現業地の經營は二頭政治となれり。

二頭政治の長所も少なからず、之を善用せば、より誤りなきを庶幾し得べく、況んや自己に事業上の經驗なく重役亦南洋の實情、護謨栽培の智識に缺く、萬一の失敗を豫防せん爲め二名の直接責任者を設けしは周到なる用意の然らしむる所として自分は會社に對し絶對の責任あるとの强き觀念を抱けると同時に衷心より此制度に滿足し常に兩者間の隔意なき協調を遂げて事業も漸く進捗し、第一期計畫の遂成となり、二木園の買收となり、渡邊園の買收となり、大正四年冬に至り卽ち創業四ケ年半を經て支社支配人を置き現業地直接の經營に當らしめ同時に常任監査役と事每に協議すること從前と何等異なるなく、從つて自分の立場は責任の分擔は常務二名時代と實質上同樣にして而かも直接經營には與からず、南洋在住の機會漸く乏しくして志業相副はず、立會社の動機精神と相距る益々遠ざからんとし中夜悵々の情に堪へざることありしも、一切を自己の誠意努力の不足に歸して萬事を自己の責任、使命に問ひ前途を想望して毫も不滿を現在に抱かず、衆議に從つて孜々として事に當りしが昨年夏より事業擴張の議熟して蘭領東印度方面への出張となれり。一方、西島園を新に買收し、又未墾地の開墾を續行し、現に開墾面積四千五百英反、投資一百三十萬圓（大正七年三月現在）となり、他方創立第五年度には四分、第六年度には一割二分の配當を爲したるが今後每期生產激增を見るを以て市價の如何に拘はらず配當の遞增を致すべく、事業正に其の緒に就き更に第二期擴張の期に入れること前記の如し。

三、希望

其の間自己の不敏よりして時に同僚の不安を惹きしことあり、又自己の主張多く徹底せざることあるも專ら自力の足らざる爲なりとし、常に自己を責めて衆議に從ひ、就中支配人設置の後は、南洋に在るは年に數ケ月を出でず其の在南の日も經營を之に委任して直接關與せず、以て現行組織に伴ふ最善の成績を擧ぐるを期したり。其の經過の跡に就て觀るに幸に本社同僚の卓越せる指導と現業地從業員の不斷の努力とは社業をして順調の發達を遂げしめ其の成績必ずしも他に一籌を輸するの程度に非らざるも、當初の決心と志望に對しては著しく逕庭あり、未だ所期の萬一に酬ゆるに足らず、日既に暮れて途猶ほ遼かなるの感あるは慚愧に堪へざるなり。

最近在南の日は益々減少して、內、親愛なる從業者と苦樂休戚を頒つ能はず。外、南洋開拓の先驅たり中心たるべき使命に任ずる能はず、然かも一忍到底、喜んで今日に及べるは自己の微力が唯一の原因にして自己の運命は唯自己之を開拓すべく、帝國の隆替も區々一身に繫るあるを確信し、徐に至誠の天に通じ人を動かして志業の大に伸ぶべき秋あるを期待せるが爲なり。歲月人を待たず、創業の當時三十五歲向立の壯年は最早四十有二歲不惑後の人となり、人生最高潮の時機、世界未曾有の變機、帝國興廢の分岐に遭遇し猶ほ進んで盤錯を裁斷し荊棘を除却して雄圖を其の所期に向つて展開する能はず、又丹心を留取し身命を奉獻して威烈を後世に貽す能はずんば二十餘年一貫せる大日本建設の理想と南洋新建國の抱負は何れの時にか達成するを得べき、燕雀の詆笑意とする所に非ざるも獨り神明に對する自己の誓告を奈何せん、皇天の降し賜はれる責任を奈何せん、將た一片耿々たる不動の斯志を奈何せん。

時は至れり。最善の方法を講じ最良の手段を採り之に向つて驀進するの時は至れり。

其の方法手段とは言ふ迄もなく立會社の根本精神に溯り神明誓告の信念に基きて社業を經營し自他共に益々內外融合上下一致以て社基を堅ふし進んで各方面に各種の事業を擴張し終極遠大の目的理想を成就するに力むべく、之に副ふ爲めには何時にても適當の施設を爲し、必要の改新を加へ現業地の責任者には全幅の信賴を置き其の自由手腕に一任すべし、之を監督して誤りなきを期するには別に方法あり以て各人各自、生々の氣に滿ち一致團結努めて倦まざらしむること是なり。

四、進止

若し失れ然る能はず機關を重複して相互に制肘せしめ、三千哩外の遠きに居て現業地適切の施設に机上の改廢を加へ理想は遠大ならず、經營は卑近に失し、爲すが如く爲さゞるが如く、稍もすれば徹底の方針なく不動の雄志なく、眼前の利益に滿足して其の日を徒消せんか碌々たる路傍の營利會社と相伍し、乳汁を吸ふて生息するに足るべきも熱烈なる立會社の眞精神は玆に滅亡し人心は玆に龜裂して社業の恢弘は固より確實なる收利をも亦期すべからざるに至るべきや理の當然、勢の必至なり、懼然として駭心驚目せざるべからず。

或は經營其の緒に就ける今日を機とし株式を開放して廣く有力の人士を鳩合して普く巨大の資本を醵集し時運に適するの措置に出づべしとの說あり。惟ふに同業者の大合同や巨資を擁する拓殖會社の創設は國運の進展に伴ふ必

然の趨勢にして之に對しては我より進んで大合同を企劃することあるべく、又大會社の創設に與かることあるべきは南亞公司設立の精神目的を擴充達成する所以なれば一人として異議なかるべし、而かも之に應ぜんには常に自己の事業を充實し完全し、活潑々地の生氣あらしむるを以て前提要件とす。此準備此覺悟あらば何時にても時運に策應して隨處に主となり、以て立會社の精神目的を擴充達成し得べし。

五、結　論

要するに社業は今や緒に就き第二期發展の期に入れり、過去七ケ年の經驗と時代の要求は社務の改善、刷新の機運を釀成せしむ、之が決行と否とは將來の成否隆替に關す、決行の外、途なきなり、而して自分の進止は當初獻身の動機と信念に照らし直前邁進するあるのみ、森村翁並に其の後繼者との間に一點靈犀の通ずる限り精進努力するあるのみ、先輩、同僚、知人の信任ある限り斃れて止むあるのみ。必ずしも事業の大小通塞を以て去就せず、小は大ならしめ、塞は通ぜしむるのみ、而して南洋開拓の先驅となり中心たるを期するは自己の不動心なるを以て區々の一挫一折に依り之を變改し得るものに非ず、良心の命ずる所に從ひ最善の方法に依り以て建國の業を貽し、兒孫紹ぐべきの道を開くべきのみ。（大正七年十月記）

十四、南洋事業に對する余の覺悟

一、方　針

一、南亞公司設立の動機精神は森村翁父子と自己の精神的結合、國家的精神の合致と二十有餘人の先輩の贊同と現株主の協力とに在り、此の動機此の精神に依り益々社基を堅實にし益々社業を發展せしめ南洋開發の志業を完成すること。

一、故に自己の根據を南洋に置き本國に來往して事業に盡瘁し、廣く南洋の富源を討査し、專ら南洋の企業を提撕し、南洋に於ける日本人の勢力を統一し、本國に於ける對南洋の智識を開發し、以て帝國の南洋に於ける遠大の目的を達成し、國家百年の大計を樹立すること。

二、施　設

一、立會社の根本精神に溯り、神明誓告の信念に基きて社業を經營し、自他共に益々、內外融合、上下一致、以て社基を堅ふし進んで各方面に各種の事業を擴張し終極遠大の目的を成就するが爲め時勢の要求、過去の經驗並に各國人經營の得失に鑑み略ゝ左の大綱に據り社規の改定、社務の刷新を爲すこと。

一、現業地の組織を改正し其の權限を擴張すること。

二、職員任用及進級の制を定め、從業員奬勵の道を開くこと。

三、職員定限の制を設け、成るべく員數を減少し各人をして其の全力を發揮せしむること。

四、利益配當、手當金、株式讓與等の制を設け、資本主と從業員間の共益融和の實を擧ぐること。

三、處身

理論

一、至誠事に當り一心不亂斃れて後止むは事業に對する責任者の信條なり。

一、南洋開拓は志にして南亞公司は業なり、南亞公司を經營するは則ち南洋開拓の志を達する所以にして志業一致し之に加ふるに事を共にする者の精神的結合を以てす、茲に始めて志達し業伸ぶべし。

一、此志を廢せざる限り此業を棄つべからず、自己去れば南亞公司なきなり、形體を存するも精神なきなり。

事實

一、南亞公司も創立以來既に七ケ年を經過し事業稍々緒に就き、更に第二期發展の期に入れり、宜しく當初獻身の動機と信念に照らし益々直前邁進すべし。森村翁並に其の後繼者との間に一點靈犀の通ずる限り、精進努力すべし、先輩、同僚及株主の信任ある限り自疆止まざるべし。

一、萬一志業相背馳せんとする場合には之を一致せしめ、經營宜しきを得ざる場合には之を改善し、精神弛緩せんとする場合には之を作興し恒に私心を去り私慾を絶ち、正義と仁愛を以て唯だ目的の貫徹を期すべし。

（大正七年十月記）

十五、香山（カホ）の約

大正八年四月十二日午前十一時認之

忙人忙を殺して風月の人と爲る、又靜處に天眞を養ふ所以、又塵外に前途を商量する所以、敢て遊子に倣ふて遊佚閑を消する爲ならず、大正八年四月の十日、夫妻相伴ふて落花の都を後にし、目白より赤羽に出で信越線に依り高崎に下車、途を電車に藉り、薄暮香山に着き、聚遠樓第一房に投ず。此地は靈泉を以て聞へ、海拔二千尺、山水秀麗、紅塵到らず。候猶ほ淺くして浴客稀に、最も靜思に適せり、乃ち共に爐を圍みて心話して更深きを覺へず、十一日は曉起一轎を賃せるも步して背後の山を攀ぢ、谷を越へ峠を下り、疎林と枯草と常盤木と落葉松の間を過ぎり、往く〳〵遠近の風光を賞でつゝ榛名湖畔に出で天神峠を過ぎ榛名神社に詣で、義貞公の奉獻燈籠や信玄矢立杉抔に古を懷ひ、引返して湖畔亭に鮮魚を煮て午食し、歸途飛雪滿身、浩歌して往返五里の道を蹈破し、後三時歸館。

夜は又心談數刻、兩人一心、異體同心、談緒盡きず、浴して眠り、明くれば十二日は夜來の降雪、前山を掩ひ、半は白銀世界と化し、山風强く吹き寒威激しく、都門の陽春と正に別乾坤なり、却つて是れ兩影無限の心談を續くるに適す、乃ち更に互に思ふ所を攄べ、互に相正す、亦旅中の快事なり、茲に其要を摘錄して後の記とす。雅二

一、南洋拓殖事業は志と學と事を共にする人の三者略ぼ兼ね得、天の余に下せる使命なるを以て之が發展に努力し、以て大和民族享天の命運を開拓し子孫紹ぐべきの計を樹つべきは言ふを俟たず、卽ち此の事業は終世の事業なり。

一、然れども自己の見識を廣め自己の信念を養ひ、修身齊家より治國平天下に至るの本來の道なるを念ひ、此宇宙改造の大機に於て、一身を最も有用に投じ、小は日本、大は東洋より西歐に及び、全世界の文化に寄與し、人類の平和文明に貢獻せざる可からず。之が爲めに常に渾身の努力を吝まず、自己人格の完成より隣人に及び、遠く

廣く世界の生靈を救ふの覺悟あるを要す。

一、依つて第一、一兩年を期して自己の研究室を設け寸陰を惜みて、內外の群書を涉獵し、東西の時論を通觀し、以て自家の經綸、自家の人格を鍊成すること。

第二、冗費を省き專ら節約に力め、成る可く多數の青年子女を敎養し後繼者を造成すること。

第三、今後三、四年以內に相携へて歐米を視察し新世界の新文明に接觸して當來の經綸に資すること。

第四、機運熟し衆望歸すれば議政壇上に立つを辭せざること。

大正九年に於て機運到り衆の推す所となるも、現在の專務の地位と兩立せざるに於ては謝絕すること。

但し大正十三年に至ては年齡も四十七、八歲となり、正に人生最高潮の時機たると事業も大に進捗し、後繼者に直接經營の任を委し、自己は大體を總攬するを以て足るに至るべきを以て、斷然衆望に背かざるの覺悟なること。

萬一、人事急變して事業猶ほ完からず、根底猶ほ堅からざれば、此年に至るとも敢て進んで政治圈內に入るの意なきこと。

第五、日支關係は東亞同文會を根據とし、日南關係は南洋協會に據り、朝鮮、臺灣に關しては東洋協會其の他に依り、又自己の諸關係を通じて貢獻すること。

特に支那、南洋は余の畢生の事業なるを以て既に幹部の地位に在る以上、益々之に努力すること。

第六、要は敢て求めず、敢て急がず、專心努力、自力を養ひ自己を訓鍊し何時にても各方面の必需に應ずる底の覺悟準備あるべし。

故に天下の命ずるあらば起つて大政を變理するも辭する所に非らず、時非ならば窮巷に陋處して天命を樂む亦不可ならず、只人生朝露の身も世界後世に繫るあるを思ふて、寤寐忘れず、刻々心を磨き身を碎き、完全なる人格者となり、遂に神人合一の境に到るを期すべきなり。

秀

一、自分は天命に依り我國女性開發の爲め、畢生努力し、天意を成すべきを誓ひたり。而して現今我國の狀況よりすれば、我日本女子大學校に家政大學を建設して我國女子特殊の天稟を全ふせしめ、小にして我國家庭の道德的基礎を强くし及び能率增進を計り、大にして社會萬般の施設に改造を加へ、以て我國女子の天職を完ふせしむると同時に女子に非ずしては遂ぐること能はざる底の文化を向上せしめ、以て男子の短を補ひ缺を矯めて國家繁榮人類幸福の增進に貢獻せんとするものなり。此に努むること今後十年、更に進んで此が完成を得ば、步を物質界の研究より精神界に分け入り、此が研究と實踐躬行に努力し、其の思想と實行とに於て益々宇宙の幽玄なる生命に觸れ、益々其の人格の熟成を圖り、此方面に於て更に我女子大學校及一般の人の靈界に盡す所あらんことを期す。

一、思想は其の人の性行を作り、人格を刻み行く、されば今日より物質科學の研究と相待つて精神的思索にも怠らざるべし。此の研究には外國語を良くするの必要あれば、一週一回又は數回敎師に就き研究を怠らざるべし。又我國家庭には其の抱負を實現し、家族の靈的生活の進化と經濟的生活充實に力め、益々理想的にして健全なる家庭生活に踏入るゝことを夢寐忘れざるべし。

と斯くて兩人共に神を天地有形の外に通じ思を風雲變態の中に馳せ、且つ語り且つ讀み、倦み來れば窓外の山水に身心を洗ひ、夕刻の電車にて今夜歸京せんとす。

香山の二日は有意義に費さる、遙に聖壽の萬歳、國家の安康、故鄕の老親故舊、東京の子女、滿天下の未知旣知の友人の祝福を祈りつゝ。

十六、大正八年末の我

一、身體

年齡、四十二年十一ヶ月。身長、五尺四寸。體重、十六貫五百匁。健康、輕微の糖尿と右眼結膜炎あるも、心身共に壯健、何等の故障なし。

二、動的方面

事業　南亞公司(南亞細亞會社)。創業八年半。投資、二百五十萬圓。開墾面積、七千五百英町步。採取面積、二千六百英町步。一年生產、七十六萬ポンド(時價七十六萬圓)。從業員、職員四十七人、勞働者千六百人。

關係せる諸公共團體

東亞同文會。南洋協會。東洋協會。朝鮮協會。南洋栽培聯合會等の諸役員

其の他關係の公益團體並に社交倶樂部

公共團體　十八。社交倶樂部　三。

家族

養父六十八歳、養母六十五歳。妻四十四歳、子供長女二十一歳。長男八歳。次女七歳、

實家

父八十歳。母七十四歳。長兄四十八歳。弟三十七歳。妹三十歳。共に健在。

三、靜的方面

四十有三年に亘る經驗は、自己反省の念と相待つて、漸く內的生活の眞味を掬せんとするに至り、卽ち英雄的色彩より、哲人的風格に至らんとして居る。客氣覇心、外に漸く銷へ、正氣眞氣、內に醸成せんとするの傾向あり。努めて倦まずんば、遂に自己を宇宙と融合せしめ、生死一如、神人合一の至境に至り、永生の樂しみを享受し得るに至らん。然も神を信ずといふも、未だ入神するに至らず、儒敎に學ぶ所多く、日本國粹に負ふ所少からず、敎育勅語を體得し、大日本主義の宣傳に努めたる者、世界正義の人道的精神、此れに過去二十年間に於ける世界的體驗より、會得し來たりたる心境と相待つて、果して今後何れの所に歸趨を求む可きぞ。

廣かる可し、然も深からざる可からず、粗も妙なり、然も精ならざる可からず、世に順應するも可なり。然も、個性を生かさゞるべからず。交友を天下に求むるはよし、然も、濫交を避けざるべからず。古今中外を涉獵する佳なり。然も、其の要領骨子を會得せざるべからず、人生は一瞬とも云ふ可く又永生とも云ふ可し。速に眞人の境地

に到り得て、克く永遠の光明に浴すれば、躬は永生なり不朽なり。俗世界の功名は固より我が心海の波を漂はすに足らず、眞人の境地に安住して行住坐臥、常に大歡喜に滿たん。此れ我が終生の願なり。然も、力足らず、一年を顧みて歳晩の巖頭に立てば、慚汗背を濡らすものあり。

將に人生の夏の眞中に至らんとする者の境地は、此の語によつて其の一端が想像せられる。

十七、年頭の計畫

一、靜的方面

一、人生の根本義に溯及して永生の境涯に近づくこと。
一、祈念と感謝の生活を繼續して倦まざること。
一、世界の新思想を研究すると共に東洋思想の淵源を更に探討すること。
一、英語の實習を爲すこと。
一、漢史、漢文をも讀過して文才を練ること。
一、對支問題を研究し之が對應策を講ずること。
一、社會問題特に勞資問題を考究すること。
一、冗費を省き社交を節し讀書の時間を得ること。
一、生活改善を實行して時流に率先すること。
一、成るべく運動を爲し筋肉の鍛錬、身體の保健に力むること。
一、內、自力を蓄へ自己を養ひ常に丹田に力を籠めて朝夕從容沈毅の態度に居り、苟くも燥急輕薄の言動あるまじきこと。
一、只だ人と國との爲めに奉仕し斷じて人の厄介になる可からず。

二、動的方面

一、南亞公司事業は外形の擴大よりも內容の充實を計り、現在の規模に於て第一位の成績を擧ぐるを期し增資は之を明年に待つべし。
「、東亞同文會の事業は國家的事業たることの徹底的諒解を各派、各黨、朝野の識者に求め、第一補助の增額、寄附金の公募を爲して財力を得、同文書院の基礎を定め其の內容を充實し、他方日華兩國共益共存の實を擧ぐる爲め日華會館其の他施設を爲すこと。
一、南洋協會の事業は新嘉坡陳列館の新築に着手して學生會館及び陳列館の充實擴張を期し、一方恒久的財源を獲得する爲め基本財產を設くるに力むること。
一、時運に適應し一層事業の堅實發展を計る爲め南亞公司從業員の待遇を改善し勞資共益の實を擧ぐること。
一、朝鮮問題を考究して日鮮併合の眞目的を達成するに力め、一は以て東亞の和平に資し、一は以て自己七年在官の自然的責任に答ふること。

一、飽く迄も國士先憂の態度を持し、時流を趁ふて營利の巷に立たず、一意南亞公司の完成に努力すべく經濟界の反動免るべからざるを覺悟し、資金の一部は之を現金として保管するに力め、友人關係の事業にして已むべからざるものと雖も之を助成するは可、之に投資することを避く可し。

一、內面的實力涵養の處身の第一義たるは云ふ迄もなき所なるも、堅實なる方法に依り速に財力を蓄積して雄飛の地歩を造ること。

一、明年又は明後年を期し、約半年の日子を以て第三次世界漫遊を爲し當來の經綸を養ふこと。

一、先輩知己の間には餘力を以て政治界に出でんことを慫慂し若しくは希望するもの尠なからず、年四十有餘に及び改造の大機、年齡も時運も共に適當ならざるに非らざるも、內、自力を養ひ、外、財源を蓄ふるに於て尙早の感なきに非らず、南洋事業も僅かに其の緖に就けるに過ぎず今後少くも數年を待つて大成するを可とすべし。

然かも何事も勢なり、勢眞に到り機眞に熟せば驀然起つて飛躍を試むるは自然なり。要は迫らず求めず、只だ日夕實力を涵養して奉公の誠を捧げ。其の日の最善を盡くして意義ある生活を爲せば則ち足る。

右大正九年元旦　熱海郊外錦ヶ浦魚見亭に於て眼下に靑松碧水を俯瞰し遙かに大島の噴煙を望みつゝ之を認む。

十八、正月の豆相

敢て時流を趁ふて所謂避寒旅行をするのではない。日夕追々の生活を爲し沈思靜慮の閑なき境遇に在る身の一年の總勘定日たる歲晩と、一年の計をなすべき年頭だけなりと都門の塵を避けて靑山白水の間に逍遙し、宇宙の大靈に接觸して內的生活の充實を計り以て飛躍の素地を作り、併せて家族と團欒の樂を侶にせん爲め、事情の許す限り歲末年始には何れかの地に赴く事として居る。然し其れも中々思ふ樣にはいかぬ、遠き過去を措き、朝鮮在官六年後の明治四十三年この方を顧みるに、四十四年の正月は埃及「ナイル」河中に於て、四十五年は南洋ジョホール國にて、大正二年は丹波の鄕里にて、三年は湯河原、四年は鄕里、五年は東京、六年は伊豆山、七年はシンガポール、八年と今年は當熱海にて正月を迎へた。即ち朝鮮を去つて後、十回の正月に於て、三回は外國、二回は鄕里、一回は東京にて迎へた。豆相の地は足柄箱根の山南に在り、海に面して到る處に靈泉湧き、氣溫にして冬季優遊に適して居る、且つ此時季には各方面の名士や知人の來り遊ぶもの多く、時には短褐辨當を腰にして山河を跋涉し、時には爐を擁して聖賢の書を讀み、倦み來れば會心の人を訪ふて當世の務を談ず、其の心胸を開拓し身體を鍛錬し得ること少なからず、一旬若しくは半月の閑遊、決して徒爾ならざるを覺ゆるのである。今後も日本にて正月を迎ふる限りは之を繰返さんことを期して居る。

大正三年の湯河原は大倉別莊に在り、末女幽子の猶ほ襁褓の裏に在る時代であつたが、或は夫婦相携へて十國峠の頂を極め、八州の野を俯瞰し、或は伊豆山に無邊子爵と會して高談放論し、或は源家興亡の跡を弔ふた。六年の伊豆山は相模屋に泊し、千疊敷の大湯に浸りて都門滿身の塵を洗ひ、元旦には熱海大倉別莊にて森村翁、大倉翁夫婦と團坐して雜煮の餅を祝ひ、梅林芳香の間に奧田義人氏と談りたるを記憶す。八年の熱海は「ホテル」に滯留し日の半は森村翁と對坐して神人合一の至境に與り聞き、日の半は或は郊外に散步し、或は後藤男、井上(辰)博士、隈氏等と語り、四日、風を犯して背後の山を越へて長岡に出で、和田豐治氏を晩芳園に訪ひ、鎌田榮吉氏等と語

り、五日、國府津の森村別莊に泊し、大隈侯、成瀨女子大學校長、山縣公、田邊輝實老等を訪ひ、六日、鎌倉に森村開作氏、廣瀨翁、山本条太郎氏等を歷訪して同夜歸京した。「森村翁熱海一夕話」の著も此の時の產物である。

今回は去二十六日に來着し、時の大半は讀書と靜思に費やして居る。昨と一昨の半日は錦ケ浦魚見岬の巖頭に立ち、遙に大島の噴煙を眺め靑松碧水を俯瞰して大正八年の我を回想し、天地の悠久と人間の永生を感じ、又飜つては蜉蝣の人生を觀じ、永生の國に到らん爲め努力精神の生活を續けんことを神明に誓つた。豆相の地に親しむ厘に數年ならざるに、無邊子も森村翁も奧田男も成瀨老も共に遠く逝て復た見るべからず、然し魁偉なる子の風貌、恭謙なる翁の神格、素朴なる男の態度、熱烈なる老の風格は眼前の風物と相映じて歷々として余の胸裡に顯はれ來たるの趣きがある。此四人者は余と共に余の在る限り生きて居る、特に翁と十年の心交は忘るべからざる印象を余に與へ、翁は常に余と共に在るの心地がする。眼前の森羅萬象は其の變ずる所よりせば瞬時も定形なく、日月星辰の運行晝夜を分たざるも、其の不變なる所よりせば一物を加ふる能はず、一物を減ずる能はず、恒久不變である。人生亦斯の理を出でず、只だ當さに自己を以て宇宙に合し萬物生々の理に順ひ自疆息まざるべきのみ、街頭に出づれば避寒の客麕至し、到る處に面識の人を看る、後藤男は既に舊臘より滯留し、牧野男も一兩日中に來着の筈、何れの宿も滿員の盛況である。家妻も陽一も至極健全なるも末女幽子去る二十九日に感冒豫防の「ワクチン」液注射を爲せしに、其の夜より發熱四十度近くに及び、爾來二晝夜を經て猶ほ下熱に至らず、何等他の病症なきが如きも注射の反應としては稍ゝ激しきに過ぐ、更に經過を見るの要あるべく、滯留猶ほ數日に及び大いに牧野男等と談論する積りなり、場合に依りては豆南の海岸を巡り各處の好山水に浴して十日前後に歸京する考へである。斯の遊又何等か求道の上に、はた人格の完成の上に贏得る所あれば幸である。大正九年元旦、於熱海「ホテル」識。

十九、大正十年々頭の計畫

一、事業

昨秋以來の護謨栽培會社合同案は本春初頭より極力之が實現に力む可し、少くも參千萬圓乃至五千萬圓の資本とし之が社長には和田豐治氏を推す可く、同氏にして就任する能はざる場合には牧野子爵推薦の本田農學博士を推すことに盡力す可し。而して事務としては余自身之に當るは從來の經過と南洋事業に對する自己の責任上已むなき徑路なれば之が推薦を受くる場合には自己の利害を顧みず進んで其の任に當るべし。萬一、他に適任者ありと認められ、余が專務の任に就かざる場合には之を自己の不德、不敏とし已むなき成行として之を承認するも南洋事業は當初森村翁との同心協力の精神よりして之が完成に努力すること。

南洋協會の事業は自己の南方發展に對する責任を盡くすが爲めに必要なる公共事業なるを以て專務理事として極力之が擴張施設に努力す可し。

東亞同文會の事業は立志出關以來二十有餘年に亘る東方大局の支持に必要なる事業なるを以て常任幹事として極力之が擴張施設に努力す可し。

一、政治生活

昨年の立候補は周圍の事情に制せられ自己の確信と充分の準備なくして承諾せしやの憾あり、恒產なくんば恒心を保つこと難きは古今同一歎なり、自己の本來の面目は天下國家に盡くし、大日本國を形成し、進んで世界人類の福祉に貢獻するに在るも、既に南洋事業に依つて其の理想を實現せんことを、十年の昔に於て太神宮に誓告せる以上、其の事業未だ完成せず自己の恒產の確立せざる以上、漫然他の勸誘を受け若しくは自己の好癖に依り、猥りに政治家生活に入るは斷じて不可なり、既に殘半生を政治生活に沒入するの恒產成り、四圍の境遇之を許すを待つて、進止を決す可きも、現在の努力は一に護謨事業を完成して先づ恒產を成すに在り、其の餘力を支那、南洋の公共的事業に捧ぐるは不可なし。

一、精神生活

從來靜的生活よりも動的生活に傾けり、爾今靜座冥想を凝らし、根本的信念の確立と創造的生活の實現に力むべし、常に世界思潮の趨勢を察し、青年と接觸を保ち、來るべき時代の指導者たるを期すべし。

一、家庭生活

「家」を永世に安固ならしめ國家人類に貢獻せん爲め本年度より家憲を制定し財產の管理分配に關する規定を設くること、家庭の圓滿純潔を處世の第一義と心得、夫婦の理想信念の一致を期すること。長女は本春學業を終へ一人前の婦人となるに付き其の希望を斟酌し之を善導すること。長男の長所は情操に濃く性質は本來の善良と境遇の圓滿に助長せられ、益々其の方面に美點を發揮しつゝあるも、今後は一層身體の鍛錬と精神の硬的訓育に力むべきこと。次女は才氣潑剌の風あるも其の短所は思考力に乏しく落付きの少き嫌あり、加之其の境遇が自然長男の次位にある爲め、長男に比し稍々外に向ふの傾きあり、今後は一層之を愛護し、之を匡正して圓滿なる發達を期すること。兩親に對しては其の晩年を全ふし鄕黨の名望たらしむる樣居常努力すること。

一、外遊

關係事業の不振なるのみならず、目下合同計畫中に屬するを以て、本年內の外遊は事實不可能の運命に在るものと豫斷せらる。依つて余の外遊は全然之を未定の問題とし、家妻は本年秋より明春にかけ約半歲の日子を以て米國視察に赴くこと。

一、秀子の計畫

一、事業

女子高等敎育の普及と家政大學昇格を實行すること其の第一。

櫻楓會をして前校長の素志に副ふ樣會員全般の內容を充實し外部の發展を企圖すること其の第二。

國際的には永久平和の確立に努力し、國內的には婦人の地位向上を計る爲め日本婦人國際協會の成立發達に努力すること其の第三。

民力涵養の目的に成る生活改善同盟會の事業を完成せしめる爲め必要なる研究調査を爲すと同時に自己の家庭に之を實行すること其の第四。

二、研究並に精神生活

過去の研究並に精神生活より釀成し來れる現在の立場たる家政學を一層現代的に進歩せしめ、以て自己の色彩を一層明白ならしむる爲めに、外遊に讀書に實地研究に、あらゆる努力を爲すこと。

宇宙に於ける神の存在と正義の神祕の存在とを確信するを以て、世界の平和、人類の幸福に貢獻する平和運動に參加すること、昨年度よりも一層內面生活の充實高調を企圖すること、廣く社會萬般の事相を研究考察し、男子の性格事業を諒解し、以て國家社會の圓滿なる向上發展に共同すること。

三、相互の希望

雅二の志業、目的、趣好と、秀子の志業、目的、趣好とは相互同情、信愛に依りて兩全、共存するものたるを信ず。故に相互、同情、信愛を一層濃厚ならしめ相互の志業、目的の達成を幇助すること。

此記午後零時半より起草し同四時半に至つて畢る。窓外、暮靄遠くより臻り、筑波の峯は雲霧の裏に在りて見る可からず、神氣澄淸、夫妻一致の心境に達せるを感謝しつゝ筆を擱く。

大正十年正月八日午後四時半、東臺聽鶯莊にて　井上雅二、同秀子認む。

聽鶯莊壁間に

春色無二高下一、花枝自短長の句あり、紫野無學禪師の書する所、又舊知康有爲の絕句あり。

東臺一戰乖二維新一、今日鶯亭無限春、風雲感慨由來事、把レ臂休レ嫌酒入レ唇

又扁額に題して

定有二幽人居處密一、應レ知俗客往來稀の句あり、共に塵界を蟬脫して天上に逍遙するの概あり、今日此の約を草するに最も適當の處たるを覺ゆ。

二十、函嶺の誓

大正辛酉十年神武建國祭の前日、相携へて函嶺に遊び小涌谷三河屋に泊し、翌日午前細雨を犯して蘆ノ湖畔の勝を探り、午後更に大涌谷に到らんと欲せしも細雨は驟雨となり戶外一步を出づるに懶し、乃ち窓外風雨の聲を聞きつゝ對座して前途を語る、三河屋は曾て目賀田男爵と一夕歡談を俱にせし所、烏兎匆々既に十年、十年一昔の諺あり、七十古來稀なりとせば、十年の歲月は余に取つて容易ならず、其の間、南洋に來往すること十四回、當年の雄志猶ほ伸びず、世局は大戰亂を經て正に一變せり、知人國府犀東君は五十二にして始めて外遊し、白人の友より齡

三十前後ならんと評せられ、歸來而立の賦を作りて三十の元氣を以て新に世に處せんと告白せり。余は十八にして世界に志し、足一歩を大陸に着け、爾來二十餘年一貫して渝らず、豪氣毫も磨せざるも志業の伸びざるは當年の立志に背くこと多大、俯仰慚愧の至りなり。今玆に此記を草するは聊か以て現在を批判し將來を打開せんと欲するが爲めなり。大正十年四月神武天皇祭日、幽嶺三河屋樓上にて　井上雅二

忍

人生は一に忍、二に忍、三に忍、家康坐右の銘は彼が太閤の後を享けて德川三百年の太平を築ける所以、例を昔に取るに及ばず、近く現代に於ても原敬を見よ。人の犧牲となり名を他に與へ苦を己に嘗め、常に割惡しき部分を演じたる其の積善は、彼の今日ある所以、余の缺點は成を急ぐに在り、事は成るの日にあらずんば成らず。成るの日を確信して成るべきの德と業を積むに在り、忍なる哉、忍なる哉。

鳴かざれば鳴く迄待たん杜鵑

今後に力む可き事

一、交遊を節して讀書に親み思想の根本を探り人格の完成に力むること。
一、冗費を節して成る可く早きに於て自動車を常置し活世界の活動に資すること。
一、積年の希望たる青年養成の爲め寄宿舍を建設すること。
一、現在の常務たる護謨栽培の事業も、東亞同文會の事業も、南洋協會の事業も共に其の局面を更に展開するの要あり、成す可き事の多くして猶ほ成らざるもの多し、努力精勵して完成を期すること。

支那子の事

本人の性格、趣好よりして將來を豫斷するに卒業後直に結婚して家庭の人たらしむるよりも本人の希望を容れ、其の欲する學業を繼續し、其の特色を發揮せしめて一生の立脚點たらしむること。但し性格の癖を矯め圓滿なる人格に到らしむる爲め、一面科學並に生活の本質に接觸する樣に力めしむることが前提要件なり。之が爲めには漫然內地にて不充分の境遇に在らしむるよりも當然必要なる〇〇の費を割いて米國に留學せしめ、其の資を補給すること。渡航費並に學資として〇〇圓を渡航後三ケ年間に分配支出し、其の不足分は自己の力に依り之を補はしむること。三ケ年以後は本人の希望に依り猶ほ留學を繼續せんと欲する場合は其の費用は本人の自給とす。

陽一の事

他日高等學府に入學する準備として中等教育は成蹊學園に於て受けしむべきも豪邁、俊敏の氣風を養成する樣特に學校當局に依囑すること。

幽子の事

幽子は圓滿なる婦德を涵養せしむる爲め今より學校教育の外、趣味教育として音樂、其の他常識を得せしむる樣素養に力めしむること。以上

自己の修養と爲すべきこと、猶ほ廣汎にして益々精神力の發揚と學術上の研鑽に一層の努力を要するは申すまでもなきが、現在の境遇は努力すれば努力するより以上の反響と成績を擧げらるゝ樣の心地せらる、之は時代の要求に副ふが爲め自力以外他力の加はるものと爲さゞるを得ず、元來「イムプレツション」と「ヱキスプレツション」は同程度に在るべきを信ずる自分として一層「イムプレツション」卽ち自己の修養に力め「ヱキスプレツション」卽ち自己發展に一層眞摯に一層謙讓なる可きこと。以上秀子附記。

二十一、鐵の如き人

原敬氏の言＝人間は鍛へなければいかん。石と鉛は鍛へる事が出來ないから一は脆く一は溶けてしまう。鐵は鍛へると鍛へるほど堅くなり、彈力が出來る。卽ち人間は鐵のやうにならなければならぬ。石は保守主義、鉛は急進主義、鐵は漸進主義だ。

然り、原氏は實に鐵のやうな人だつた。大正十二年七月十四日微雨蕭々の夜十一時半認之。

二十二、書感　其の一

四月二十七日菅原老母上京し、五月六日に姪美和子と河野工學士との婚儀成り、國元實兄夫妻亦參加し、引續き老母は在京玆に約一ケ月近く歸縣せんとす。少壯鄕關を出で双親の膝下に孝養の全ふし得ずして、一昨年老父を失ひ今老母を迎へて同居數旬に及ぶも朝夕の繁忙殆んど緩談の機すらなく復た再び相別れんとす、人生の遭遇一笑の外なし。

五月以來梅雨連旬、頗る不快の天候也、此日久し振りに早退し浴後後庭に向つて太閤と東照宮の外交戰を讀み、時々微笑の禁じ難きものあり、太閤は眞に不世出の英雄なる哉、家康の熟柿主義に徹底せるも亦容易に企及し難き所也。大正十二年七月十八日認之。

西行法師の句

願くば花の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃

同　其の二

大正十二年八月八日立秋の夜、八十六度の釜中にて宮本武藏の傳を讀み感を書す。獨行道十九ケ條

一、世々の道に背くことなし。二、よろづ依怙の心なし。三、身に樂をたくまず。四、一生の間慾心なし。五、我事に於て後悔せず。六、善惡につき他を妬まず。七、何の道にも別れを悲しまず。八、自他ともに恨みかこつ心なし。九、戀慕の思ひなし。十、物事に數奇好みなし。十一、居宅に望みなし。十二、身一つに美食を好まず十三、我身にとり物を忌むことなし。十四、舊き道具を所持せず。十五、兵具は格別、餘の道具を嗜まず。十六、道に當つて死を厭はず。十七、死後、財寶所領に心なし。十八、神佛を尊み神佛を賴まず。十九、心常に兵法の道を離れず。

達人は萬古の心を思ふ。

二十三、八月二十八日夜

八月十日秀子と共に東京を發し東北及北海道を巡遊し更に長驅樺太洲の南端を窮め二十五日歸京せり。

加藤首相病歿して後繼內閣未定、新聞紙上紛紛の論出で猶ほ夢裡に在り、昨日田男を玉川に訪ひ本日故首相の告別式に列し歸來靜思す。唯一心以て自己の天職とする所に邁進するのみ、一心萬友に交る可し。內省、二兎を逐ふ勿れ。

二十四、大正十二年十月十四日

自動車王のヘンリー・フォード翁、某氏の次期大統領たらん希望あるや否やの問に對し答へて曰く

イヤ、私は現在の仕事以外に一つも別の仕事を求めては居ません。

翁の一代一業の眞骨頭を見る事が出來ます。然し米國が要求せば翁も立たぬことはありますまい。

二十五、大正十二年十月二十八日

震災後、身世匆忙半日の淸閑なし、此日早朝秀子と共に牧野宮相を訪ふて午前中に歸宅し久振りに在宅、淨机に依り英人著の「無限生活」なる書を繙き物心一體、永生は斯寸裡に在るの段に至り頗る首肯すべきものあり。

小我を棄て大我に合し、利己を棄て全體に奉仕し精神の絕對力を確信し、神人合一の境に至れば、平靜中庸の道を蹈み、至大至剛の域に達し、所謂永生不死の人たるを得べし。

我に利己なし何の愛欲あらん、愛は神也。夕刻に至り秀子景願帳を携へて歸る、披き覽るに山陽外史の眞筆を神戸擧一君の蒐集せるもの也、一讀更に爽快を覺ゆ、正に靜思と爽快の半日なり。

二十六、天長節の淸夜

終日在宅して靜思するの機を得たるを感謝す。

善は永久に惡を征服する事が出來る。健康は苦痛の蹈んだ所を步む。

人は思ふ如く其の通りになる。左れば起てよ而して神と共に思へ。

神は健在なり汝も亦同樣也。

自己生活の支配權は全く神と自己自身との間に橫はる可きもの也。

自然の儘で態と他人の注意を促がさない人は偉人である。

神の生活を生活するが第一。

信仰、絕對的獨斷の信仰は眞の成功に達する唯一の法則なり、人の成功不成功は全く己に依り、決して外部の支配に依るものでない。

物質的財產を我物であると考へる事は愚の極である、クリストは何物をも有せずして總ての物を有して居た。

豐富は宇宙の法則なり、其の來る道を塞がずば常に充分の供給を受くるを得。